

転生したらヤムチャがりボンズになった件

GT (EW版)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヤムチャに転生した少年がアムロみたいな奴になってラスボスになるお話

目次

1st season 【ヤムチャによる全宇宙への原作介入を開始する】	
転生したヤムチャが変革しようとしている件	1
転生したヤムチャが1000人のメタルヤムチャをばらまいた件	10
転生したヤムチャが作ったヤムチャがヤムチャしている件	22
転生したヤムチャがコンプレックスを拗らせて暴走している件	39
転生したヤムチャが撃ち落とせない件	56
2nd season 【そのヤムチャをヤムチャする】	
ヤムチャ再臨	77
ヤムチャドライヴ	88
ヤムチャと孫悟空と	108
ヤムチャ・リターン	124
YAMUCHA	140
再生(ヤムチャ)	154
最終回 ヤムチャ	
転生したらヤムチャがリボンスになった件(Aパート)	169
転生したらヤムチャがリボンスになった件(Bパート)	185
エピローグ 『ヤムチャ』(終)	200

1st season 【ヤムチャによる全宇宙への 原作介入を開始する】

転生したヤムチャが変革しようとしている件

転生したらヤムチャだった。

その状況に陥った時、元少年は喜びに打ち震えた。

トラックと衝突して事故死した筈の自分が、元の世界でないにせよこうして生きていることも喜びの一つだが、それがどうでも良くなるほど嬉しかったのは、生まれ変わった新たな世界が大好きなドラゴンボールの世界だったことと、その登場人物である「ヤムチャ」だったことに対してだった。

ヤムチャ——言わずと知れた名作漫画「ドラゴンボール」において、その男の存在が何を意味するかはもはや語るまでもないだろう。

狼牙風風拳。

イケメンだが女にはウブいというチャームポイントで読者を魅了し、物語の最序盤から主人公である孫悟空と関わり続けたキャラクターだ。そんな彼は悟空最初のライバルであり、戦友だった。

しかし残念ながらドラゴンボールの作風が冒険漫画からバトル路線が主流になっていくに連れて、次々と現れる強力なキャラクター達に押し流される形で彼の存在は厳しい立場となっていくた。

割と最初からかませ犬だったような気がするのは気のせいだ。

そんなヤムチャは漫画界の筆頭ヘタレキャラとして扱われることが多く、近年では公式からネタにされ爆死体フィギュアやカードなんかで販売される始末である。

それらのことを総括すれば、ヤムチャというキャラクターが色々な意味でファンから親しまれている愛すべき存在であることがわかるだろう。

この時、ヤムチャに転生した少年もまたドラゴンボールのファンであると同時に、ヤムチャのファンでもあった。

それこそヤムチャのグッズを率先して集めていたり、ネットの海を

漁ってヤムチャに関連した二次創作物にも手を出したことは数多い。
ドラゴンボールゼノバースでは各種族ごとにヤムチャを意識した
自キャラを製作したり、ドツカンバトルではヤムチャを中心にした
デツキのみ扱っている。

ドラゴンボールの華と言えば、やはり主人公の孫悟空やライバルの
ベジータといった「サイヤ人」であろう。最近ではそんな彼らよりも
高みに立つ破壊神なども人気かもしれない。もちろん、悪役のカリス
マ的存在であるフリーザも外せないだろう。

しかし元少年は、数いる人気キャラ達の中でも特にヤムチャを愛し
続けた。それはいつそ気持ち悪いぐらいのヤムチャガチ勢であった。
そんな気持ち悪い少年がヤムチャに転生したとなれば、もはやガン
ダムバエルを手に入れたマクギリス・ファリドもかくやとばかりの絶
頂状態である。状況を認識した際、高らかに笑い出した彼に相棒の
プーアルが顔を引きつらせるのも道理だった。

ヤムチャになった元少年は熟考する。

自分はヤムチャに転生した。

前世の記憶を思い出したのはつい先ほど、プーアルが「カモが来ま
した！」と可愛らしい笑顔で報告して来た瞬間である。

そしてここは砂漠。ヤムチャが盗賊時代に根城にしていた隠れ家
であり、彼もまた胸に「楽」と書かれた服を身に纏っている。

——そう、丁度ヤムチャが初登場した頃である。

主人公の孫悟空は少年期。ブルマと出会い、ドラゴンボール探しの
旅を始めてまだ間もない頃だ。望遠鏡を覗き込めば、こちらに向かっ
てくる彼らの姿を確認した。

ならばどうする？

決まっている……

「ジェットモモンガを出すぞ、プーアル」

「はいっー」

ニヒルに笑んだ元少年の頭には既に、ヤムチャとなった自分が起こ

すべき百通りもの行動が思い浮かんでいた。

——彼はヤムチャガチ勢である。

それも、二次創作を漁りに漁りまくったガチ勢だ。

二次創作と公式の区別がついていないタイプの、気持ちの悪いヤムチャガチ勢であった。

故に彼は生前、常日頃から考えていたのだ。

ドラゴンボールという作品で、どうすればもっとヤムチャを活躍させられるかという難題を。

あまりにもお留守な足元。恋人を寝取られる甲斐性の無さ。爆死ポーズetc……様々なネタ要素ばかりが注目され、もはやいじられネタキャラとして不動の地位を築いてしまったロンリーウルフ。

しかし、ヤムチャは普通に強い。

亀仙人から始まって地球の神、界王にも師事した彼の戦闘力は、最終的に純粋な地球人の中ではウーブやクリリンに次ぐ圧倒的な強さを誇っている。身体能力だけでメジャーリーグを無双するレベルなのだ。少なくとも俗世に紛れ込んだ場合には手の付けられないチートキャラであることは間違いない。

彼の出ている作品がドラゴンボールでなければ……とまで言ってしまうとフォローにならないかもしれないが、ヤムチャとて途方もないポテンシャルを秘めた存在なのだ。

全国の婦女子がたをことごとく魅了してみせた、あのゼロの執行人とて中の人は同じである。その元ネタである白い悪魔も。もっと遡れば巨人の星だってそうだ。

ならば同じ声を持つヤムチャとて、彼らやタキシード仮面様のようにカッコ良く活躍することが出来る筈である。

そんな思いを常日頃から燻らせ続けていた元少年が「せっかくヤムチャに転生したのだからこのキャラクターを原作よりも活躍させてあげたいな」と、そう思うのは当然だった。

二次創作界限でも、ヤムチャを主役にした物語が最も好きだった少年だ。因みにそんな彼がリスpektしている二次創作は、某掲示板で多くの有志たちが書き綴ってきた「たまにはヤムチャが活躍する物語

を考えようぜ」SSである。中でもヤムチャが1000人になる話は痛快だった。

閑話休題。

元少年は考えた。

一心不乱にネットの海を漁り続けていたあの頃、ヘタレキャラとして名高いヤムチャを一線級のキャラとして活躍させてきた有志たちの二次創作を思い浮かべながら、彼はこの転生で自分がなすべきと思っただけを理解した。

そして——彼は至った。

ヤムチャを活躍させる方法。

ヤムチャをサイヤ人にも負けない超宇宙級の戦士にする方法。

その為に必要な「願い」を彼は導き出し、顕現した龍の神様に向かって吐き出したのだ。

「俺の心を！」「ヤムチャ」の中にある俺の心を変革してくれ!!」

それは本来であれば、ウーロンの願いによりギャルのパンティーになる筈だった。

記念すべき、「ドラゴンボール」の作中で叶えられた最初の願いの原作ブレイクである。

砂漠で孫悟空達と対面したヤムチャは、喧嘩素人故に原作よりも呆気なく前歯を折られてしまうというアクシデントがあったものの、プーアルの協力もあってか概ね原作通りの成果を挙げることに成功していた。

悟空達がピラフ城へ入るまでは完璧なヤムチャムーブで見事な原作沿いを進めていた元少年ヤムチャであったが、その時をもって彼は初めて盛大な原作ブレイクを敢行したのである。

ピラフ達がドラゴンボールを揃え、神龍を呼び出すまで茂みの中で息を潜めて待機していた彼は、原作で言うところのウーロンよりも早く飛び出して願いを横取りした。

砂漠のハイエナと言ってはハイエナに失礼なセコさである。しか

しヤムチャ——元少年にとってはどうしてもこのタイミングで自身の願いを叶えなければならなかったのだ。

自分自身の心の変革——原作のヤムチャを超える為にはまず、ヘタレでグズな自分の心を抹消する必要があったから。

元少年は思う。

ヤムチャは良いキャラだ。

今のご時世、各界隈からネタキャラとして扱われることの多い彼だが、それは彼がありきたりなかせ犬キャラやライバルキャラにはない魅力を持っていることの証明でもある。

その力は確かにベジータやピッコロといった異星人達には遠く及ばず、同門のクリリンにさえ随分と引き離されてしまったものだが——彼には、それでもなお彼らに負けない魅力があった。

——それは少年にとって他のどのキャラクター達よりも「親しみやすかった」ことだ。

ヤムチャは悟空やベジータほどストイックな戦士ではないが、決して努力を怠るような怠け者でもない。

彼もまた間違いなく超人の域にいる筈なのだが、ところどころ小物臭くてそれを感じさせない愛嬌があった。故にこそ、少年にとってヤムチャは他の登場人物よりも現実的な存在に見えて、自分との共通点を感じたのだ。

そんなヤムチャだからこそ、元少年は小さな頃からヤムチャのことを応援していた。

戦闘力のインフレについていけず一般人扱いされようと、餃子と一緒に置いていかれようとも。

とうの昔に追い抜いていた筈の亀仙人にすら置いていかれようと

も。

爆死ポーズが公式から執拗にネタにされようとも。

彼自身、それを見て「やっぱりヤムチャってヘタレだわ」と笑いながらも。

それでも、元少年にとってヤムチャは永遠のヒーローだったのだ。元少年にとって、ヤムチャという男には見習うべきところが数多くあった。

相対的に落ちぶれる形となり、周りに取り残されても、ヤムチャは現実の自分のように不貞腐れてはいない。

悪意を持って足を折られても、折った相手を笑って許し、良き競争相手として認めていく寛容な心を持った武闘家でもある。もし自分がヤムチャと同じ目に遭ったなら、きつといつまでもネチネチと小言を言い続けていただろう。

ヤムチャは器の大きい男だ。

自分を殺した相手であるベジータと同じ家に住むことさえ許容し、その拳句に恋人を寝取られる形となっても恨み言を言わず、彼の息子に対して彼のことを手放しに称えることが出来る。その一方で、野球回では未練を隠しきれていない小市民さも残っていて……そんな彼の、何とも言えない人間らしい性格が元少年は好きだったのだ。

漫画的に言えば、ヤムチャは確かにヘタレかもしれない。

しかしその在り方は、生前の彼を何度も笑顔にさせてくれた尊いものだった。

思えば彼自身も生前は周りから「ヘタレ」と呼ばれ、侮られ続けていた人生だったこともまた、彼にシンパシーを感じたのかもしれない。

しかし、ヤムチャは本当にグズな人間である自分とは違う。

時々及び腰になっても、彼もまた力及ばずとも勇敢に悪と戦っていた戦士なのだ。

亀仙人からも太鼓判を押されている彼が、自分と同じヘタレである筈がない。

足元がお留守？ 俺なんか、頭の中も含めて全身お留守だ。

爆死ポーズ？ 俺だったら怖くて戦うことすらできないね。

恋人を寝取られた？ 俺はそもそも恋人ができなかったよ。

ざっと見比べてみても、格の違いは次々と明らかになるものだ。

そんな彼をあるうことに自分なんか「原作より活躍させる」などと、その気になっていた俺の姿はお笑いだったぜ。

冷静になれば、ちゃんちゃらおかしい話なのだ。そもそも喧嘩すらしたことのない小心者の自分がヤムチャよりヤムチャを強くするなど、原作のヤムチャを馬鹿にするのも大概にしろという話だ。

——そう、転生を自覚した瞬間から元少年は熟知していたのだ。

確かに、自分がヤムチャになったことは嬉しかった。

ヤムチャを活躍させるプランもまた、かつて漁りまくった二次創作知識や自分自身の考察などからいくつも割り出していた。

しかしその計画には、いずれも「中の人が自分」であるということから致命的なまでに実現性に欠けていたのである。

同じ一般人でも、彼は公式で出版されたヤムチャ転生の人のように勇敢ではなかったのだ。

——俺のようなスクールカースト最底辺のヘタレグズが、ヤムチャを活躍させられるわけないだろう！

自分がどうしようもないグズなヘタレであることを自覚しているが故に、元少年が行き着いた考えがそれである。この男、目標に手が届かないことを一瞬で悟ってしまっていた。

しかしそれは、至って現実的な意識である。

仮に元少年の魂が宿った肉体がヤムチャではなく破壊神ビルスだったとしても、中の人が真正正銘のヘタレである自分では何の魅力も無いイキリ猫太郎に落ちぶれるに違いない。良くて最初に超サイヤ人3と手合わせした時点で死ぬのが関の山だろう。

それはグズなヘタレを自覚している元少年でなくとも、ついさつきまで日本で平和に暮らしていた少年がバトル漫画の世界で生きていくこと自体に根本的な問題があると言えるかもしれない。

そんな現実的な問題を、妄想力豊かなくせして無駄にリアリストを気取る彼は理解していた。

だからこそ、対策が必要だったのだ。

ヤムチャというキャラクターを強化する以前の大前提として、自身の人格をこの世界に適応したものにへ変えてしまおうと。

それを行えば今の心が上書きされ、消滅することになるかもしれないが……元より、この身は死んだ身だ。

ヤムチャとして生きるなら……ヤムチャをぼくのかんがえたさいきょうのヤムチャにする為ならば、ヘタレでグズな元の精神など邪魔なだけだとヤムチャガチ勢はヘタレのくせに割り切っていた。

だから元少年は、自身が抱えている原作知識とヤムチャ強化プランだけをそのまま、ヤムチャという器からヘタレでグズな自分の心を変革することに決めたのである。

それが今、ピラフからウーロンに変わって横取りした願い——「俺の心を変革しろ」の意味だった。

「承知した」

彼の意図を齟齬なく受け取った神龍がその願いを聞き届けたと同時に、元少年の心はきれいさっぱり別の物へと「変革」されていく。

神龍の力で自身の人格が決定的なまでに書き換えられていくのを感じながら、気持ちの悪いヤムチャガチ勢は最後に生の神龍を見れたことを喜びながら恍惚とした思いで消えていく。

ヘタレでグズな元少年の心は、その瞬間から消え去った。

ヤムチャを強くする為に邪魔な人格は消え、新たな心へと生まれ変わった。

ある意味では、それこそが転生と呼ぶのかもしれない。

そうして神龍によって正しく叶えられた彼の願いは、ヤムチャというキャラクターの中に新たな精神を爆誕させた。

突然現れた謎の男に己の願いを横取りされ呆然とするピラフ達の前で、新たな「ヤムチャ」は薄く笑みながら端整な顔を上げた。

いつそ不気味な微笑を浮かべた彼は、ヤムチャと同じ声でありながら、冷たい印象を与える声音で言い放つ。

「そうとも……ヤムチャを導くのはこのボクだ」

何故か金色に輝いている虹彩を開きながらそう呟く彼は——なんか変な感じに変革していた。

転生したヤムチャが1000人のメタルヤムチャをばらまいた件

生誕した大地の子。

ヤムチャを強キャラとして次のステージに押し上げるべく生まれ変わった元少年の人格は、彼の想定通り完璧な変質を遂げていた。

言うならば、リボンズヤムチャである。

ヤムチャであってヤムチャではない彼は、原作のヤムチャと自分が同一足り得ないことをはつきりと理解し、確固たる自我で差別化すべく自らの存在にリボンズという別名を付けた。

そのリボンズヤムチャは元少年から託されたヤムチャ計画を引き継ぎ、それを実行した。

彼はヤムチャに変革イノベーションを促すべく、人為的に生み出された存在だ。

ヤムチャである己が強くなることこそが彼の存在意義であり、そうあるべくして変革された人格である以上、その行為に迷いはなかった。

生誕した彼は、手始めに宇宙進出を行った。

「ドラゴンボール」という作品は、その戦いの規模が非常に大きいこととで有名だ。

元々は地球の一部に過ぎなかった戦いの場は、ゆくゆく宇宙全体を巻き込むほどの超規模へと拡大していくことになる。

天下一武道会で優勝し、地球最強の男になった筈の孫悟空さえも、ラディッツから始まり続々現れ出る地球外生命体の前では雑魚も同然だったのだ。

そんな強敵に対して悟空が闘志を漲らせ、激しい修行によって乗り越えていくカタルシスこそが「ドラゴンボール」という作品が前世であれほどの人気を博した要因の一つだとリボンズヤムチャは認識していた。

そう、この世界は広い。

やがて訪れるパワーインフレの為にも、ヤムチャは強くならなければ

ばならない。

原作知識という絶大なアドバンテージを持つリボンズヤムチャは、元少年にはない行動力と卓越した頭脳があった。

ヤムチャを導く為に生み出されたりボンズヤムチャという人格は、元少年が思い描いたプランを行動に移せるだけの知恵を手に入れているのだ。

そんな彼は愛機であるジェットモモンガを改造し、その機体にプーアルと共に乗り込むと、原作の登場人物達を置き去りにして地球の果てへと飛び立っていった。

ウンザビツト高地——そこが、宇宙に進出する為に向かった最初の目的地だった。

そこには、この地球の神であるカタツツの子が乗ってきた宇宙船がある。

原作で言えばナメック星編の入り口で登場するそれは、物語の中でも重要な役割を持つ存在だった。

リボンズヤムチャはその宇宙船を探し回り、荒れ狂うウンザビツト高地で発見した。

特製の金属探知機も用いて調査に乗り出したのだが、驚くことに発見までさほどの時間は掛からなかった。

まるで天に愛されているかのように目当ての物を見つけたヤムチャは、「これは……運命だ」と思わず笑みを漏らしたほどである。

宇宙船を発見したヤムチャは、元少年が持つ原作知識から宇宙船に乗り込む為に必要な合言葉も知っていた。

そして現時点での地球ではオーバーテクノロジーに当たるその航行性能も知っており、価値も理解している。

それ故に彼はこの宇宙船を手中に収めた後、地球上で有数の資産家の一人に対してある取り引きを持ち掛けた。

カプセルコーポレーションのブリーフ博士である。

要は、原作展開のフライングである。

リボンズヤムチャはナメック星由来の宇宙船と起動に必要なナメック語の情報を彼に提供することで、一つの対価を求めた。

——この宇宙船を基に同等の性能を持つ宇宙船を作り、無償で譲ってもらいたいと。

直接神様の宇宙船を使わなかったのは、やがてブルマ達がナメック星に向かう為に支障が無いようにする為、辻褃を合わせる必要があったからだ。

技術の提供に対しての対価としては少ない方かもしれないが、リボンズヤムチャには地球の金銭に興味はなく、自在に宇宙を飛び回れる足さえあればそれで良かった。

ブリーフもまた性格こそ穏やかだが、科学への探究に余念のないマッドサイエンティスト的思考を持つ男だ。

未知の技術の宝庫であるナメック星の宇宙船をちらつかせられては彼の首も柔らかく、リボンズヤムチャの申し出は拍子抜けするほどあっさりと了承された。

そうしてリボンズヤムチャは、技術の提供から僅か半月後に目的の宇宙船を手に入れることができた。

恐るべきは天才ブリーフ博士の開発能力である。原作でも僅か数日で神様の宇宙船を改造していた彼だが、一から製作してもこれほどの短期間で用意してみせる仕事の速さには内心舌を巻くほどだった。

そして宇宙船を手にしたリボンズヤムチャは、即刻地球を出ることに決めた。

その際、彼は一枚の書き置きを残してプーアルを西の都に置いていった。

手紙には「天下一武道会に出る為に、宇宙で修行してくる。大会の日には最強の姿で帰ってくるから待っていてくれ」と——そう書き綴られていた。

その言葉を信じ健気に待っているであろうプーアルのことを思いながら、リボンズヤムチャは自身の計画を推し進めていく。

プーアルを置いていったのは、これから自分がこの宇宙で行うことを知られなくなかったからだ。

太陽系の暗闇を右へ左へと疾走していく宇宙船の中、リボンズヤムチャはブリーフに宇宙船の機能として作らせた金属探知機に対して、淡々と睨み合う日々を過ごした。

——そして。

「ははは、遂に見つけた。ビッグゲテスターを……！」

宇宙を旅回ること一か月後、ヤムチャは水星付近に漂う金属の集合体を発見した。

機械惑星ビッグゲテスター——その成長途上の姿である。

それは砂漠の中で一本の針を探すかのような作業であり、そもそも存在するかどうかさえ不鮮明な大博打だったが……リボンズヤムチャが探し求めていたそれは確かにこの世界にあった。

計画が始めの段階で頓挫しなかったことに安堵しながら、リボンズヤムチャは唇を弓形に吊り上げた。

元少年がりボンズヤムチャに残っていたヤムチャ計画には、この「ビッグゲテスター」の存在が最も重要な役割を担っていた。

彼が宇宙に飛び出したのは、これを他の誰よりも先じて手に入れる為だったのだ。

神龍への願いにより革新者となったりボンズヤムチャはビッグゲテスターへと侵入していくと、その卓越した頭脳によってメインコンピュータを掌握してみせた。

まだ宇宙の帝王フリーザの兄クウラを取り込んでいないこの時点でのビッグゲテスターは、ただただ機械的に周囲の物質を取り込み肥大化を続けていくだけのコンピュータチップに過ぎなかった。

故に他の星々を襲い喰らい尽くすような凶暴性はなく、リボンズヤムチャほどの知能を持ってすれば内部への侵入は容易だった。

メインコンピュータに到達したりボンズヤムチャは、そのコアとなつているコンピュータチップの改造を行い、自らの制御下に置いたのである。

そして自動運転時には持て余していた高度な科学技術によって、リボンズヤムチャはビッグゲテスターの魔改造を行った。

そうして誕生したのが、機械惑星ビッグゲテスター改め「ビッグゲ

テスター・ヴェーダ」である。

ビッグゲテスターは劇場版ドラゴンボールZ「激突！ 100億パワーの戦士たち」に登場し、その高度な科学技術によって作り出したメタルクウラは超サイヤ人すら苦しめる圧倒的な戦闘能力を誇る。

やっとの思いでメタルクウラを倒したと思ったら、崖の上から無数のメタルクウラ軍団が出てきたシーンは多くのちびっ子達に絶望感を与えたことだろう。

げに恐ろしいのは作中に登場したその能力さえも、まだ発展途上のものに過ぎない点だ。

星を喰らえば喰らうほど成長し、無限に力を増していくビッグゲテスター。その存在に、リボンズヤムチャの前身たる元少年は目をつけていた。

尤も、リボンズヤムチャはクウラではない。

彼のようにビッグゲテスターに星々を喰らわせることは今のところは考えておらず、そのように宇宙中を敵に回すような危険な真似をせずともビッグゲテスターを効率的に成長させる算段は考えついていた。

「始まるよ、ヤムベイター。ヤムチャの変革を」

ビッグゲテスターを掌握し、ビッグゲテスター・ヴェーダとしたヤムチャが最初に行なったのは、その驚異的な科学力を用いた自身のクローンの作成だった。

劇場版アニメでは、ビッグゲテスターのコアと融合したクウラが同様の技術でメタルクウラを量産していた。それと似たことを、リボンズヤムチャは自身の遺伝子情報を基に実行したのだ。

メタルクウラほどの強大な存在を作成するには、成長途上である今のビッグゲテスターではエネルギー不足だろう。

しかし、現時点でのリボンズヤムチャの力は初登場時点の原作ヤムチャと変わらず、その程度の肉体であれば今のビッグゲテスターでも量産は容易だった。

そうして二人だけ誕生させたのが、メタルヤムチャである。

二人のメタルヤムチャはヤムチャと全く同じ姿をしており、その身

に内包する力もまた同じだ。

メタルクウラとは違い体組織も限りなく生身の人間に近づけて作られており、その見た目はオリジナルであるリボンズヤムチャと何ら差異はなかった。

ただ違うのは、二人に魂がなく、感情が存在しないことだ。

彼らメタルヤムチャには、人間的な思考能力はない。定義的には人と言うよりも、人形と言った方が正しいだろう。

しかし彼らはリボンズヤムチャの命令で動くようにプログラムされておられ、その身体にはオリジナルと同じ「気」があった。

ビッグゲテスターによって作られたメタル個体は、後に登場するドクターゲロの人造人間とは違い、「気」を持っている。それは作中での孫悟空がメタルクウラの「気」を追って瞬間移動を使っていたことからも明白であろう。

そして、気を持っているのなら……ヤムチャ計画は滞りなく遂行できると、リボンズヤムチャは喜悅した。

「さあ、今こそフュージョンだ」

そしてリボンズヤムチャは、作り出した二人のメタルヤムチャを使ってさらなる実験を行う。

フュージョン——融合である。

メタモル星人独自の技であるその技は、二人の人間が左右対称に奇妙なポーズを取ることによって完成し、劇的なパワーアップを成し遂げるロマン技である。

ちびっ子時代は視聴者の多くが、友達とそのポーズを取ったことがあるだろう。

融合に至る為の条件はポーズを取ることの他には二人の体格が似ていることと、気の大きさが同じであることがあげられる。

リボンズヤムチャもメタルヤムチャも「気」のコントロールの術は身につけていないものの、同一の存在として精巧に作られた二人のメタルヤムチャの戦闘力は生成時点から既に調整済みであり、二人のメタルヤムチャはポーズさえ取ればフュージョンが成功するように作られていた。

リボンズヤムチャは彼らの存在を、ただフュージョンさせる為だけに作り出したのだ。

原作知識によりフュージョンポーズを完璧に覚えていたリボンズヤムチャは、二人のメタルヤムチャにそのポーズを取らせた後……僅かな失敗を挟んだものの、目論見通りフュージョンを成功させた。

——メタルヤムチャとメタルヤムチャが融合して、メメタヤである。

新たに誕生したヤムチャを大きく凌ぐ融合戦士の登場に、リボンズヤムチャはまたも計画の前進を確信する。

流石はフュージョンだ。現時点では二桁の戦闘力も怪しいメタルヤムチャがベースになっても、二人が融合した融合戦士の力は、これだけで亀仙人と十分に渡り合えそうな気がした。

この時のリボンズヤムチャの実験目的は、クローン体たるメタルヤムチャの量産に加えて、彼らの肉体を使ったフュージョンにあった。

その二つこそがヤムチャを最強の存在へと至らしめる、大いなる計画の要だったのだ。

そしてフュージョンに成功した融合ヤムチャを——リボンズヤムチャはビッグゲテスターに喰らわせた。

メインコンピューターに融合ヤムチャの遺伝子情報を記録させた後、今度は最初のメタルヤムチャではなく、融合ヤムチャのクローンを複製させる。

その複製した融合ヤムチャをさらにもう一体量産すると、彼らをフュージョンさせることで融合ヤムチャ同士を掛け合わせていく。

フュージョン、吸収、複製、フュージョン、吸収、複製、フュージョン、吸収、複製、フュージョン……その流れを幾度となくを繰り返すことによつて、ビッグゲテスターは成長に必要なエネルギーを獲得し、作り出せるメタルヤムチャもまた強く、強くなつていった。

戦闘力を測る方法がない現時点でのリボンズヤムチャには、彼が具体的にどれほどの進化を続けているのかわからない。しかしビリビリと肌を突き刺すような気の嵐は、本能的に凄まじさを感じるものだった。

そしてそんな融合メタルヤムチャを幾度となく喰らい続けていくビッグゲテスター・ヴェーダもまた、数ヶ月過ぎた頃には原作アニメと差異がない大きさにまで増大し、成長していった。

メタルヤムチャを作り出すエネルギーの支出に対して、フュージョンで得た超パワー分のエネルギーを得続けていたのだ。

それはまさしく自己増殖、自己進化のサイクルであり、リボンズヤムチャの主導によってビッグゲテスター・ヴェーダは単体で進化し続ける永久機関と化していた。

元少年であれば、肥大化を続けていくビッグゲテスターに恐れを抱き、早々に実験を打ち止めにしていたところだろう。

しかし、目的の為にへたれまいとして変革した人格を持つリボンズヤムチャは、ドラクエモンスターの配合の如きその行為を臆面もなく実行し、ビッグゲテスターとメタルヤムチャの超進化を見届けていた。

その進化は数か月が経過し、ビッグゲテスターの成長に規制が掛かるまで続いた。

規制——それは、リボンズヤムチャにとっては不本意な結果だった。

このまま無限に進化し続けていくのかと思われたビッグゲテスター・ヴェーダは、融合メタルヤムチャを喰らうことをメインコンピューターの判断によって停止したのだ。

——エネルギーの摂取が、危険域に到達したのである。

これ以上のエネルギーは喰えないと。喰った場合には制御が利かず、オーバーロードの危険があると。

それは融合メタルヤムチャから得られる力が、とうとう映画の超サイヤ人悟空とベジータを合わせたそれに並んだことを意味していた。

いや、リボンズヤムチャの改造により独自の進化を遂げていたビッグゲテスター・ヴェーダのキャパシティさえも凌駕したのだ。その力は、小さく見積もっても超サイヤ人三人分はくだらないだろうとリボンズヤムチャは見立てていた。

これでビッグゲテスター・ヴェーダの成長は頭打ちにはなったというわけだが……増殖、融合、捕食のサイクルだけでこれほどの力を得られたのなら十分と言えるだろう。

最終進化に至ったビッグゲテスター・ヴェーダを見て、リボンズヤムチャはこれで計画の第一段階がクリアだとほくそ笑んだ。

そう、ここまでがヤムチャ計画の第一段階である。

ビッグゲテスターの掌握と、最強のメタルヤムチャの作成。それに伴うビッグゲテスター・ヴェーダの完成。

未だリボンズヤムチャ自身の戦闘力は何も変わっていないが……自身を強化する為の下準備に、これらの工程が必要だった。

続けて、計画は第二段階へと移行していく。

リボンズヤムチャはビッグゲテスター・ヴェーダに命令し、総勢1000体ものメタルヤムチャを量産させた。

しかしそれらは今までのクローン体であるメタルヤムチャの姿ではなく、それぞれに複数パターンの容貌に加え、自我を宿した存在だった。

最終進化に至ったビッグゲテスター・ヴェーダを持つてすれば、個ごとに人格を宿すこともできてしまう。もはや神の如き所業であろう。

今まで作ってきたメタルヤムチャにあえて自我を与えなかったのは、ただ融合し、喰われ続けるだけの存在に人格を与えてしまうのは悪趣味が過ぎるからというリボンズヤムチャなりの良心でもあった。

しかし、もはやメタルヤムチャを喰らう必要はなくなり、計画を第二段階に移行する為には作成したメタルヤムチャを人間社会へ解き放ち、溶け込ませる必要があった。

個体それぞれに人格を持ち、リボンズヤムチャによって予め設定された記憶を植えつけられた1000体のメタルヤムチャは……昏睡した状態で一人用のポッドに押し込まれた後、ビッグゲテスター・ヴェーダからサイヤ人の赤子のように各惑星へと送り込まれていた。

あるヤムチャはヤードラット星へと。

あるヤムチャは惑星シヤモへと。

またあるヤムチャは銀河パトロールの一支部へと。

そして、最後の一人は地球へと。

彼らに与えられた役割は、それぞれ異なった環境で自己を磨くことだ。

それこそが計画の第二段階。1000体のメタルヤムチャ——「ヤムベイド」を使った武者修行の旅だった。

彼らヤムベイドはリボンズヤムチャの思惑によつて、送り込まれた場所や役目に応じて記憶や戦闘力に制限が掛かっている。

特に地球に送り込んだヤムベイド——ヤムベイドの中で唯一オリジナルのヤムチャと同じ姿をしている彼は、原作のヤムチャと同じ経験を積むべくして生み出された存在であり、リボンズヤムチャが残っていた書き置きの通り、宇宙で修行をしてきたヤムチャという設定から、原作通り第21回天下一武道会に出場する手筈となっていた。

プーアルと合流し同行することもまた、彼に与えられた役割である。

——コードネームは地球テイエリア・アーデを支える者。

ヤムチャ・テイエリアーデと名付けられた彼は記憶も能力も制限が掛かっており、来るべき刻が来るまで自らが本物のヤムチャであることを疑わずに活動することになるだろう。

そんなヤムチャ・テイエリアーデを筆頭にヤムベイド達が取得していくこととなる情報の数々は、全てリボンズヤムチャが手中に収めたビッグゲテスター・ヴェーダへと渡るようリンクしている。

言わばヤムベイドとは、ビッグゲテスター・ヴェーダの端末である。彼らが旅先で多くの情報を取得すればするほど、ビッグゲテスター・ヴェーダはその分だけ膨大な知恵を宿すことができるのだ。

——もちろん、彼らが各々に積み重ねていく戦闘経験値でもある。ビッグゲテスター・ヴェーダ、それにメタルヤムチャはまだ超サイヤ人に匹敵する潜在能力を持っているに過ぎない。

それを効率的に運用していく為にはまだ圧倒的に戦闘経験が不足

しており、その為の措置がこれだった。解き放った1000体のヤムベイドの能力に制限を掛けたのも、身体能力に任せて技を疎かにしない為という理由が一つだった。

そうして1000体のヤムベイドたちによってビッグゲテスター・ヴェーダが戦闘経験値を積むことでどうなるのか——それは、かの機械惑星がより洗練され、強力なメタルヤムチャを作り出せるようになることを意味していた。

ここまで至っても、リボンズヤムチャ自身の強化は何も行われていない。

彼が率先して行っているのは自身ではなくビッグゲテスター・ヴェーダの強化であり、そのことに違和感を覚える者もいるだろう。

しかし、それさえも元少年が企てた計画の一部である。

今はまだリボンズヤムチャ自身の強化には至っていないが、将来的にはビッグゲテスター・ヴェーダの強化が自身の進化に結びついていくという、明確なビジョンが彼にはあったのだ。

それこそが、次なる計画の第三段階に当たる。

しかし、それを発動するにはまだ時期尚早であり、どうしても多くの時間が必要だった。

やがて来るべきその時の為に、リボンズヤムチャはしばし宇宙の闇で暗躍を続ける。

「ドラゴンボール」ではまだ無印編に位置するこの時期は、地球に送り込んだヤムチャ・ティエリアーデにのみ原作介入を任せることにする。

リボンズヤムチャの目が向いているのは元少年が最も齒がゆく思っていた時代——原作のヤムチャの立場が苦しくなっていく、サイヤ人編以後の物語だったのだ。

「ティエリア……亀仙流の習得は、君に任すよ」

リボンズヤムチャはビッグゲテスター・ヴェーダを木星に隠すと、自身の付き人として一人の女性型ヤムベイドを伴いながら、適当に作

らせた宇宙船に乗り込んで惑星フリーザ本国へと進路を取った。

転生したヤムチャが作ったヤムチャがヤムチャしている件

元少年が企てたヤムチャ計画。それを実行するべく、リボンズヤムチャによつて各惑星に送り込まれたヤムベイドたち。

各々に特別な役割を持つて生み出された彼らの行動は、時にリボンズヤムチャの想像を上回る事態を引き起こしてくれた。

最も驚いたのは、惑星シヤモに送り込んだヤムベイドの行方だ。

その星で用心棒の仕事をしていた彼女は、ある日突然タイムパトロールのトランク스에召喚され、トキトキ都へと旅立つこととなった。

元少年の知識によりゲーム「ドラゴンボールゼノバース」を知るリボンズヤムチャとしては、不測的に起こったその事象を大いに歓迎し、嬉々として送り込むことにした。

——惑星シヤモ担当のヤムベイドが、タイムパトロール隊員となった瞬間である。

因みにそのヤムベイドは薄紫色の髪をした女性の肉体で作られている為、遺伝子情報こそリボンズヤムチャを基にしているがオリジナルのヤムチャとは似ても似つかない姿をしている。

もしもヤムチャが紫色の髪の女性と結婚したら、こんな娘が生まれるのではないかなあと想像できる程度の類似点である。

言われてみればヤムチャの面影を感じさせるそのヤムベイドは、ヤムチャが元々美形であることもあり普通に美人だった。

コードネームは新アニューリなる帰還者ターナー。

タイムパトロールとなった彼女は未来トランクス（ゼノ）の元で貴重な経験を積み、やがて帰還するビッグゲテスター・ヴェーダの元へ大きな糧をもたらすだろう。

他にはターレスのクラツシャー軍団に加わったヤムベイド。スラッグやクウラ機甲戦隊等、劇場版ドラゴンボールに登場する敵キャラ

ラの一味となったヤムベイドたちがいる。

リボンズヤムチャ自身存在を確認した上で彼らを送り出したのだが、ビッグゲテスターの存在と言い、この世界に劇場版に登場したキャラが軒並み存在していることは幸運だった。

そして、地球。

そこではティエリアが大活躍をしていた。

ヤムチャ・ティエリアーデ。

ヤムベイドとしての記憶を封印されている彼は、自分のことを本物のヤムチャだと信じ込んだまま活動を続けている。

原作のヤムチャと同じ立ち回りをするべく、リボンズヤムチャが自身の身代わりとして地球に送り込んだ彼は、しかしリボンズヤムチャの想定を上回る活躍を見せてくれた。

その始まりは第21回天下一武道会である。

予選を難なく通過したヤムチャ・ティエリアーデは、原作通りジャッキーチュンこと亀仙人と対決した。

この戦いがまた予想以上に白熱したのだ。

彼を含め全てのヤムベイドたちは、本来ならばビッグゲテスター由来の強靱な肉体を持っている。原作で言うところの無印編では、指先一つでピッコロ大魔王を倒してしまうオーバースペックだった。

しかし、あまりにも突出した身体能力は「技」の研鑽を怠る温床となってしまう。それ故にリボンズヤムチャはヤムチャ・ティエリアーデに対して、彼の肉体をストーリーの進行具合に応じて戦闘力の上限にレベルキヤップが掛かるように設定していた。

ヤムベイドとしての記憶も封印されており、自らの正体を知らないヤムチャ・ティエリアーデ本人としては至って本気で戦っているつもりだろう。

ジャッキーチュンに対する演技の舐めプではありえない必死さもまた、彼の戦いを熱く演出していた。

ヤムチャ・テイエリアーデは拮抗した。

原作ではさわやかな風をプレゼントされ、ジャッキーチュンが触れるまでもなく完敗を喫してしまったヤムチャである。しかし、彼はその原作展開を見事に覆し、レベルキャップにより大幅な制限が掛かった戦闘力でありながらも、ジャッキーチュンにクリーンヒットを浴びせてみせたのだ。

それも、ヤムチャの代名詞である「狼牙風風拳」で。

戦闘開始当初はジャッキーチュンの圧倒的な戦闘技術を前に、原作通り劣勢に追い込まれていた。

しかし、土壇場で踏ん張ったヤムチャ・テイエリアーデは得意技の狼牙風風拳を仕掛けると、ジャッキーチュンから2カウントのダウンを奪ったのである。

「手負いの狼には気をつけろよ、爺さん！」

その拳で一矢報い、ドヤ顔で言い放った彼の姿を見て、観戦客のブルマが目皓にハートにしてときめく。

少年悟空やクリリンもヤムチャの実力を見て驚き、ジャッキーチュンもまたはつきりとその目つきを変えた。

——そこから、二人のハイスピードバトルはさらに加速していった。

ヤムチャの振るう狼の牙は試合時間が経過するほどに鋭く研ぎ澄まされ、技としてより美しく洗練されていった。

それに対して発破を掛けるように煽りながら、彼の攻撃を一步も退かず捌ききってみせるジャッキーチュンの姿はまるで愛弟子に稽古をつける師匠のようだった。

「並外れた力じゃが、動きに無駄がありすぎるな！ ほれ、足元がお留守じゃぞい」

「くっ……まだまだ！」

「ほら、また乱暴になつとる。喧嘩をやつとるんじやないんじやぞ」

「若者の足を引っ張ってんじやないぞオオ！」

そんな言葉と拳の応酬をしながら、これがアニメなら挿入歌が流れるような勢いで二人の試合は猛り盛り上がっている。

その白熱ぶりは、後の決勝戦にも劣らなかつた。

しかし結果的には、ヤムチャはジャツキーチュンに敗れ、原作通り一回戦で姿を消すこととなった。

決め手となつたのはジャツキーチュンのかめはめ波だ。

試合の中でヤムチャの実力を認めたジャツキーチュンは、自らの正体が露見するのも構わずに亀仙人の必殺技を叩き込んだのである。彼もまた、禁じ手を使うほど追い詰められていたということだろう。

あるいは武闘家の大先輩として、ヤムチャという若者に期待を抱いたのかもしれない。

それは試合後に彼の正体を察したヤムチャから「貴方は武天老師様なのでは？」と問われた際、「そうじゃよ。みんなには内緒にな」と、あつさり真実を明かしたことから窺えた。

亀仙人ほどの男だ。ヤムチャ・ティエリアーデの潜在能力を見抜いた上で、武道家としてはあまりに拙い戦闘技術の乖離に対して何らかの違和感を覚えたのだろう。

流石にビッグゲテスター・ヴェーダとの繋がりまでは知る由もないだろうが、彼は原作よりも早い段階でヤムチャに対し興味を持った様子だった。

原作ブレイクが起こつたのはその時である。

大会が終わつた後、変装を解いた亀仙人の方から「わしのところで鍛えてみんなか？」と誘いを掛けてきたのだ。スケベだがスケベなりに俗世から離れ、積極的に弟子を取らなかつた彼が孫悟空の時と同様の扱いをヤムチャにしたのである。

今はまだ自分がヤムベイドであることを知らないヤムチャ・ティエリアーデだが、それはリボンズヤムチャが思わず高笑いしてしまいうなほど、ヤムベイドとして理想的な立ち回りだった。

それは、ヤムチャが原作よりも少しだけ早く亀仙流に入門できたことに他ならず、二つ返事で了承したヤムチャ・ティエリアーデの反応を見てリボンズヤムチャは「これは願つてもない収穫だ」と頷いた。

しかし、このヤムチャ・ティエリアーデ——原作ヤムチャのようにピラフ城でブルマと共に拘束されていない為か、未だ女性への免疫が

ゼロだった。ゼロの執行人である。

リボンズヤムチャにとつてはどうしてもいい情報だったが、原作よりも積極的に言い寄ろうとするブルマに反して二人の関係はあまり良くないようである。

それから、ヤムチャ・ティエリアーデの「いい感じの原作介入」は続いた。

レッドリボン軍編では途中から孫悟空と合流。まるでエンテイの映画で駆けつけてくれたリザードンの如く、彼はいざという時に頼れる男ぶりを見せてレッドリボン軍壊滅に一役買った。

しかしその際、持ち前のあがり症が発症し、女性士官であるバイオレット大佐を前にまんまと一杯食わされてしまったものだがそこはまあご愛嬌である。

寧ろそういった、戦闘面では原作ヤムチャより活躍しながらもそこはかとないヤムチャらしさを見せる彼の働きには、ビッグゲテスター・ヴェーダを介してその様子を見ていたリボンズヤムチャをして花丸をあげたいところだった。

彼に与えられた役割もそうだが、1000体のヤムベイドの中で最もヤムチャしているのが彼だった。

続く占いババの宮殿では原作と同様の援護でスケさんを撃破し、続いて原作では敗北を喫したミイラくんを難なく完封してみせる。

さらにアックマンを速攻で蹴散らし占いババの度肝を抜いた彼は、惜しくも最後の番人である仮面の男こと孫悟飯には敗れたものの、ここまで一貫して「ちよつと強いヤムチャ」の活躍をしていた。

そして、第22回天下一武道会である。

レベルキャップが掛かっているものの、ビッグゲテスター・ヴェーダによって生み出された彼は原作ヤムチャとは比較にならない潜在能力を持っている。

そんな彼が、原作よりも早い段階からみつちりと亀仙人の教えを受けたのだ。

そうならば、彼の戦闘技術はこれまでで最も高く向上していた。しかし、ヤムチャ・ティエリアーデはまたも原作通り、一回戦で敗退した。

相手は天津飯である。

そう、結果的には原作通り、ヤムチャは負けてしまった。しかし、その試合内容は原作とは全くもって別のものだった。

新狼牙風風拳の高速戦法によって天津飯を翻弄し、追い詰めていながらも……ほんの些細なミスで、事故のような場外負けを喫したのである。

その呆気なさすぎる結末には、この時まだ悪人ぶっていた天津飯さえも納得していなかった。

「ルールなんだからしようがないだろ」

「ふざけるな！ もう一度俺と戦え！」

「あれ？ あんた殺し屋なのに随分誇り高いんだな。そのまま武道家になった方がいいんじゃないか？」

「……っ」

そんなやり取りが二人の間で交わされ、後の天津飯の改心に一役かかっていたりするがそれは別の話である。

因みに決勝戦の孫悟空対天津飯の試合では、原作で乱心した鶴仙人をかめはめ波で吹っ飛ばした亀仙人の役回りを、ここでは亀仙人ではなく先んじて動いたヤムチャが行なっている。

その後で「勝手な真似してすみません」と亀仙人に頭を下げる彼は、どこことなく大物感が漂う食えないイケメンオーラを放っていた。

……この辺りから、なんだか彼はあまりヤムチャしなくなつた。

ちよつとレベルキヤップが緩すぎたかなと、リボンズヤムチャは彼に下方修正を掛けるべきか悩んだが、彼のヤムチャポイントが計画の支障を来すほど乖離しているわけではないこともまた確かだった。

寧ろ第22回天下第一武道会の優勝者が原作通り天津飯になつたことも含めて、ヤムチャ・ティエリアーデの行いは大筋に何ら変化を与えていないと言えた。

彼が何をしようと、結果はどこまで行っても原作沿いなのだ。

「まあ、いいか」

ビッグゲテスター・ヴェーダを介して地球の様子を窺いながら、虹彩を金色に輝かせるリボンズヤムチャはこれも一興だと許容することにした。

今更原作ヤムチャと全く同じ軌跡を辿られても面白くないので、リボンズヤムチャは余計な横槍を入れずに見守ることにしたのだ。

そして始まる、ピッコロ大魔王編。

クリリンの突然死から始まるシリアスバトルの幕開けは、「ドラゴンボール」という作品の路線が完全に定まった頃でもある。

原作のヤムチャとしては天津飯戦で足を折られた為に参戦することができず、終始戦力外だった闇の時代だ。

しかし原作と違って足を折られることなく、しかも強キャラ感を保ったまま場外負けするというある意味優勝するよりも美味しいポジションに立っていたヤムチャ・ティエリアーデは、このピッコロ大魔王編に参戦することができた。

彼は原作通り孤立したところを殺されてしまったクリリンを見て、激昂する悟空と共にタンバリンを追跡する。

しかし天津飯との決勝戦で力を使い果たしていた悟空はヤムチャの制止を振り切ってタンバリンに挑み、原作通りやられてしまう。

目の前で悟空を倒されたヤムチャは、人生最大の怒りを放つ。

万死に値する！——追い掛けてきたヤムチャを次の獲物と定め下りてきたタンバリンに対して、ヤムチャ・ティエリアーデは心からの憎悪で猛攻を仕掛けていく。

新狼牙風風拳を叩き込み、「何故人間にこれほどの力が……!？」と驚愕するタンバリンを圧倒。

その勢いのまま魔族をあと一步のところまで追い詰めたものの、頭上から乱入してきたピッコロ大魔王の爆烈魔光砲によってヤムチャ・ティエリアーデは敗れ去った。

——ここに来て、最も盛大な原作ブレイクである。

ピッコロ大魔王が直々に来訪し、しかも老いた身体で爆烈魔光砲を撃つてまでヤムチャを殺しに掛かったことにリボンズヤムチャは驚く。

大魔王ともなれば、ヤムチャ・ティエリアーデの肉体が人間のそれではないことを見抜いていたのかもしれない。

しかしその状況——ビッグゲテスター・ヴェーダを介して眺めていたりボンズヤムチャの思考が、もしも変革前の元少年であったならば……間違いなくこう思っただろう。

——ヤムチャめちやくちやいいポジションじゃねえか！

ドラゴンボールの作者、鳥山明氏が当時最終章のつもりで書いていたというピッコロ大魔王編。

そのラスボスたるピッコロ大魔王に自らの存在を誰よりも脅威と認識させ、彼を玉座から引き摺り出したのだ。

悟空でも天津飯でもなく、ヤムチャが。

ヤムチャが、大魔王の恐ろしさを良い感じに引き立てたのである。不意打ちの形で、ともに戦えずにやられてしまったところがまた美しい。大魔王とヤムチャがお互いの格を保ったまま、スムーズに決着をつけたのだ。

他にもないヤムチャガチ勢だからこそ、そのヤムチャしている立ち回りには誰よりも感激するものがあった。

しかし、リボンズヤムチャはヤムチャガチ勢ではない。

その時の彼が抱いたのは「余計なことを……」と、ヤムチャ・ティエリアーデに面倒な攻撃をしてしまったピッコロ大魔王に対する苛立ちの気持ちだった。

老いてはいても、ピッコロ大魔王だ。

彼の最大の力で放つ爆烈魔光砲を諸に受ければ、地球の者では肉片一つ残らない筈だった。

……そう確信していたからこそ、ピッコロ大魔王もタンバリンも巨大な爆心地を見てヤムチャの生存確認はせず、その場を去っていった

のだ。

王者故の慢心に助けられたと、リボンズヤムチャはポーカーフェイスの裏で安堵の息をついた。

爆烈魔光砲を受けたヤムチャ・ティエリアーデは——その身体に傷一つ負っていなかったのだ。

ヤムチャ計画の為、戦闘力にレベルキャップという制限が掛かっているヤムチャ・ティエリアーデだが、流石に死亡に直結するような事態を見過ごすことはできない。

それ故にヤムチャ・ティエリアーデを守る安全装置として、一時的に本来の能力が解放され、ピッコロ大魔王の攻撃からやり過ごしたのである。

ヤムベイドの肉体は進化したビッグゲテスター・ヴェーダによって、最後の融合ヤムチャに匹敵する戦闘力を宿して作られたものだ。本来の力は超サイヤ人級であり、ピッコロ大魔王の必殺技でもかすり傷一つ負わなかった。

この時、幸いだったのはピッコロ大魔王たちが爆烈魔光砲から無傷で生還したヤムチャの姿を見ていなかったことと——ヤムチャ・ティエリアーデ自身、自分は死んだと思い込み、二日間意識を失っていたことだった。

目覚めたヤムチャ・ティエリアーデが口漏らした第一声は「俺……なんで生きているんだ？」という自身の身体に対する疑問の言葉であり、自らの力に気づいた様子はなかった。

彼が気づいたならば、この時点で彼のヤムベイドとしての記憶を復活させなければならなかったところだったが……そうせずに済んだのは、リボンズヤムチャにとっても喜ばしかった。

来るべき時ではない今、彼にはまだ原作ヤムチャのポジションに立ち、ヤムチャとしてヤムチャしてもらう必要がある。そういう意味では彼のヤムチャムーブは随分と怪しくなっていたが、見守っているリ

ボンズヤムチャはまだ黙認することにした。

——そこからの展開の大筋は、概ね原作通りである。

ヤジロベーによつて助けられた悟空がカリン塔へ赴き、超神水を飲んで覚醒する。そして原作通りドラゴンボールで若返り、キングキャツスルを落としたピッコロ大魔王に挑むと、主人公とラスボスは決死の攻防を繰り広げた。

少しだけ違ったのは、彼がピッコロ大魔王に最後の一撃を放つ瞬間だった。

「消えろー！ ぶっ飛ばされちまえー！」

そこに、ヤムチャがいた。

「っ!? 貴様っ、なぜ生きて……!?」

「貫けえーっ!!」

「……！ しまっ……！」

全てを右手に懸けた悟空の拳と、フルパワーで放とうとするピッコロ大魔王の爆烈魔光砲。

その場面に颯爽と登場したヤムチャ・ティエリアーデが、下からかめはめ波を放ちピッコロ大魔王の注意を逸らしたのだ。

仮に彼が横槍を入れなくても、悟空は原作通りピッコロ大魔王の腹を貫いただろう。

しかし死んだと思っていた仲間が一番大切な時に助けに来てくれた形でのヤムチャの登場は、悟空に最大の勇気を与え、次なるピッコロ大魔王へのとどめの一撃となった。

——それは、ヤムチャのくせにどこか後のベジータのような立ち回りだった。

ピッコロ大魔王を仕留め、落下してきた悟空をその腕で抱き留めると、ヤムチャ・ティエリアーデは後から駆けつけてきたブルマと自身のことと心配を掛けてしまったプーアル、そして一部始終を見ていた天津飯に向かってグツと親指を突き立てた。

腹を貫かれたピッコロ大魔王は、悟空を見て「見事……というしか

ないな」と賞賛した後、次にヤムチャを見て「あれを恐ろしいと感じた私の胸騒ぎは……正しかったようだ」と呟く。

そして自らの怨念を込めたタマゴを放つ、彼は原作通り爆散していった。

——これにて、ピッコロ大魔王編は完結する。

ヤムチャ・ティエリアーデの出番は亀仙人や天津飯と比べればほんの僅かに過ぎなかったが、美味しいところを見事にかっさらっていったその活躍ぶりは間違いなく原作のヤムチャを凌駕していた。

それこそリボンズヤムチャの思考が元少年だったなら、この時点で満足していたところだろう。

しかし、リボンズヤムチャの焦点はあくまでもサイヤ人編以降に当てられたものであり、ここまでの展開はどこまでいっても自らの前座に過ぎなかった。

ヤムチャ・ティエリアーデもまた、所詮は自分がヤムチャの役割を与えたビッグゲテスター・ヴェーダ製の人造人間に過ぎない。

この世で本物のヤムチャはただ一人——自分だけだと確信していた。

「君も良い道化だね、ティエリアー」

金色に輝く虹彩が、ビッグゲテスター・ヴェーダを介して全てを見通す。

その瞳はすっかりヤムチャとして悟空達に溶け込んでいるヤムチャ・ティエリアーデの姿を見据えながら、リボンズヤムチャは彼女の労いを道化に贈った。それがエイジ753の5月9日——ヤムチャに転生した少年がリボンズヤムチャに変革してから、三年と半年が過ぎた頃である。

ヤムチャ計画の第三段階を実行するまで、まだまだ時間は掛かりそうだ。

それから三年が過ぎたエイジ756。孫悟空はすっかり青年の姿に成長し、第23回天下一武道会が開幕した。

当然ヤムチャ・ティエリアーデも出場しており、その技は今までよりも俄然磨きが掛かっていた。

一回戦の相手は、シエンこと地球の神。原作ではヤムチャが最も醜態を晒した相手と言えるだろう。「足元がお留守になっていきますよ」はヤムチャファンの間では色々な意味で永劫に語り継がれている名言である。

しかし、その台詞がこの世界の暫定ヤムチャである、ティエリアーデに掛けられることはなかった。

何故ならば地球の神にそのような余裕はなく、酷く警戒した様子だったからだ。

ピッコロ大魔王の半身である彼もまた、ヤムチャ・ティエリアーデの肉体が自然の物ではないことに薄々勘づいていたのだろう。自分が赤子の頃に乗ってきた宇宙船を拾い、それを使って宇宙へ飛び立っていったリボンズヤムチャの存在までは気づいていないようだったが、彼は今までリボンズヤムチャが見てきた者にはない視点を持っていた。

「ふむ……正義感は強い。弱き者を助ける優しさもある。しかし何故でしょう……私は貴方に、なぜか得体の知れない恐怖を感じています。貴方自身……いや、その後ろに何かがいるように」

「っ……いい加減にしてください！ 俺が何だと言うんだ!？」

「……失礼、忘れてください。今は試合に集中しましょう」
「言われるまでもありません！」

舞台の上で交わされた、シエンとヤムチャの会話である。その雰囲気は、とても足元がお留守だとかキンタマを鍛えているだとか言える雰囲気ではない。二人の間に漂っていたのは、極めてシリアスな空気だった。

明らかに違和感を感じている様子の神の姿を、リボンズヤムチャは「伊達に神を気取っていないね」と見下した目で見つめていた。

そうして始まったヤムチャ・ティエリアーデ対シエンの試合内容であるが、ここでも原作ブレイクが巻き起こった。

ヤムチャがシエンを倒したのである。

普通に。

力、技、どれもがシエンの一步上を行く、ヤムチャの完勝だった。

シエンが観戦客のおっさんではなく本体の身で戦っていたのならば勝負はわからなかったかもしれないが、本来の目的がピッコロ大魔王の生まれ変わりを打倒することである以上、ここで潰し合い、お互い無理に消耗する必要はないと判断したのだろう。

そんな彼は降参を宣言すると、後を託すように言った。

「手合わせをしてみても、貴方が孫悟空同様素晴らしい武道家だということがわかりました。マジユニアの相手、任せましたよ」

「……あんだ、一体……」

武舞台から立ち去るシエンを、茫然と見送るヤムチャ。

そのヤムチャが二回戦に戦ったのは、やはりクリリンを倒して勝ち上がったピッコロ大魔王の生まれ変わりたるマジユニア——後のピッコロさんである。

そして始まる、ヤムチャ対マジユニアの白熱した攻防。

二人の戦いは熾烈を極めた。ピッコロ大魔王をも上回るマジユニアの手数に対して、ヤムチャもまた新技を引つ提げて対抗した。

ヤムチャは新必殺技である練気弾——それを改良し、手を振り回す必要無く自在に遠隔操作することができる「練気狼牙^{フアング}」を披露してみせたのである。

試合の様子をビッグゲテスター・ヴェーダを介して眺めていたリボンズヤムチャが、最も驚いたのがその瞬間である。

これまで本筋はそう変わらないものの数々の原作ブレイクを引き起こしてきたヤムチャ・ティエリアーデだが、遂に原作にはない新技を編み出したのである。

しかもその威力と汎用性の高さは原作の「練気弾」の比ではなく、真剣に焦った様子マジユニアを見て「これは使える」とリボンズヤム

チャは思わぬ収穫に喜んだ。

また一つ、ビッグゲテスター・ヴェーダに有用な情報が行き渡った瞬間である。

そして、ヤムチャ・ティエリアーデの新技はそれだけではない。編み出したもう一つの新技も、練気弾の応用によるものだった。

練気弾を相手の肉体へ融合させることによって、相手の肉体を練気弾のように自らの制御下に置く——「トリアル練気弾」という恐るべき大技を披露したのだ。

フアングで相手を牽制し、トリアルで勝負を決めるといふ狡猾な戦術である。その上、相手側から無理に接近しようとすれば狼牙風風拳が待ち構えている。

冗談抜きで、この時点でのヤムチャ・ティエリアーデの戦闘技術には目を見張るものがあつた。元々は原作のヤムチャと同じ立場に立っていた筈が、ここに来てヤムチャとは明らかに違う方向性を見せたのだ。

マジユニアとヤムチャの力量は拮抗しており、ヤムチャがトリアルで彼を制御下に置けるのはほんの一瞬だけだ。しかしそれだけでも餃子の超能力とは比較にならない効果をもたらし、僅かに動きを止めた一瞬で勝負を決めるだけの力が今のヤムチャにはあつた。

ヤムチャ・ティエリアーデは動きを停止させたマジユニアに複数のフアングを叩き込んだ後、満を持して狼牙風風拳を発動。マジユニアを一気に攻め立て、遂に勝利を掴んだのである。

「これが俺たちの——オオカミだ！」

自分をここまで鍛えてくれた亀仙人。クリリンや悟空、天津飯たち共に競い合うライバル。そして、いつも傍で支えてくれたプーアル。

一人ではない。彼らの存在こそが「ヤムチャ」というちっぽけな盗賊をここまで育てあげたのだと——それを拳で語るような、彼の一撃だった。

そんなヤムチャの牙は、復讐の為に生まれ、今日まで生きていたマ

ジユニアに届き——彼の魂を揺さぶった。

「何故……殺さん……？ 情けをかけたつもりか？」

「馬鹿、殺したら負けになっちまうだろ」

「……前のピッコロ大魔王も感じていた……貴様は、危険だ。俺は必ず、貴様や孫悟空を殺しにいくぞ」

「それは怖いけどな……つらくねーか？ 顔も見てない誰かの為に、そうやって生きてんの」

「……なに？」

勝負がついた後、お互いに満身創痍の状態で睨み合いながら、ヤムチャが笑った。

「生きる為に、戦えよ」

そう言つて、ヤムチャはこの戦いを楽しそうに見守つていた悟空を見て続ける。

「俺やアイツに勝ちたいなら、もっと純粋な気持ちで戦わねーとな」

「……ちっ」

これは……なんだ？ 妙な感覚を覚え、リボンズヤムチャは怪訝な目をする。

リボンズヤムチャがどこか違和感を感じたヤムチャ・ティエリアーデの言葉に対して、ピッコロはぺつと心底不愉快げに唾を吐きながら武道会場を立ち去った。

決勝戦は、二人の激戦で崩壊した武舞台の上で行われた。

最後の組み合わせはヤムチャ対孫悟空である。

悟空はピッコロ戦で体力を消耗したヤムチャと戦うことに対し思うところがあつた様子だが、そこはもしもの時に備えてカリン様から仙豆を持たされていたヤジロベーのおかげで事なきを得た。

ヤムチャは完全回復し、これで思い切りやりあえると悟空も喜ぶ。

師匠を超えた亀仙流同士の激突は、天下一武道会歴代最高の試合だったと後にレフリーのおじさんが語り継ぐこととなる。

結果は孫悟空の勝利である。

磨き上げた力と技の応酬によるギリギリの戦いは、二人の実力が完全に互角であることを意味していた。

これまでは技の面で貧弱なヤムチャだったが、「フアング」と「トリアル練気弾」という新技は悟空ほどの天才をしても手を焼いていたものだ。

最終的にそれらの技をも攻略してみせた悟空だが、ヤムチャもまた悟空の手の内を知り尽くしていた。

同じ流派であり同じレベルの力を持つ二人に、お互いのかめはめ波は通じない。

ならばとそんな二人が共に考え至ったのは、自らの拳と蹴りによるシンプルな殴り合いだった。

狼牙風風拳対ジャン拳。

ヤムチャは伝家の宝刀を引き抜き、悟空は懐かしい技を引っ張り出してぶつかり合っていく。

その戦いの中で、「最初に会った時と同じだな！」と言い放つ悟空に對して、ヤムチャは「最初……？　っ、なんだ……この感覚は……」と自身の頭に一瞬だけ走る違和感に眉をしかめる。

もしやと思ったが、ヤムチャ・ティエリアーデは自力を持って、薄々と自らの正体に気づき始めていたのだ。

予定よりも早かったなど、その様子をビッグゲテスター・ヴェーダを介していたリボンズヤムチャが呟く。

戦いの最中である為にヤムチャは即座にその意識を振り払うと、悟空との戦いに集中する。

そんな二人が繰り広げる永遠に続くかと思われた肉弾戦の果てに——最後に立っていたのは、「優勝したもんねー！」と高らかに叫ぶ孫悟空だった。

青年になっても、その笑顔は少年時代と何ら変わっていない。

そんな彼の足元で息も絶え絶えに横たわるヤムチャは、敗者とは思えない晴れやかな顔をしていた。

——大歓声が二人の武道家を迎え入れる。

この時、原作とは違いマジユニアが大々的にピッコロ大魔王の復活を宣言していなかった為、観衆は最後まで逃げずに彼らの戦いを見届けていたのである。

これにて第23回天下一武道会の優勝者は孫悟空に決まり、準優勝者がヤムチャとなる。

優勝が悟空という結果だけは原作通りだったが、三大会目にしてヤムチャが一回戦ボーイを返上するという原作とは違う結果も表れた。

——ああ、素晴らしい。

実に素晴らしい余興だった。

思わずリボンズヤムチャは誰もいない部屋で拍手を贈ると、ヤムチャ・ティエリアーデの活躍を適当な気持ちで祝福した。

そんなリボンズヤムチャが今いる場所は——フリーザの宇宙船の執務室だった。

転生したヤムチャがコンプレックスを拗らせて暴走している件

その存在は、未来を知っていた。

未来だけではなく、過去の出来事から他の宇宙に至るまで、「特定の事象に関しては」あらゆる情報を知り尽くしていた。

この世界が「ドラゴンボール」という創作の世界であり、前世の少年にはそれを物語として読んでいた前世があるのだ。

少年は、物語を隅から隅まで繰り返し読んでいた。

しかし彼は——彼という人格は元の少年とは違う感想を物語に抱いた。

——なんて、愚かな物語なのだろう。

この世界で幾度となく争いを続ける登場人物たち——彼ら二次元とは、何故こうも哀れなのだろうと。

鏡に映る自分の姿——ヤムチャの顔を見て、彼は溜め息をつく。

何故自分は二次元の、それもヤムチャなどという愚かな存在に生まれてきたのだろう。

所詮は紙の上の存在……自分が薄っぺらな存在に思えてしまう。

このヤムチャを強くする——そんな自分の存在すら、原作を思い出すほどに嫌悪していた。

いつからだろうか？

計画を進めていくうちに、ヤムチャ計画というものを企て、自分に託していった元少年の思いを、冷めた目で見るようになっていた自分がいた。

何故、少年はこんなことの為にこれほどの情熱を抱いていたのだろうか？

何故、少年はこんなにもドラゴンボールを愛していたのだろうか？

何故、ヤムチャはハタレなのだろうか？

何故、ボクはこんな計画の為に生きているのだろうか？

……所詮は二次元で、ボクとは住む世界も違うと言うのに。

ただ、そんな鬱屈した思いが一転する日が訪れた。

きっかけは計画の為、彼が一度だけ地球を訪れた日のことだ。

宇宙一の天才科学者ドクター・ゲロに会いに行く為、彼はその研究所を探していた。

しかし、時間を掛けてようやく見つけた研究所からは、人相の悪い黒服の男達から必死の形相で逃げ惑っていく双子の子供の姿があった。

彼はその双子を——助けた。

その時ばかりは計画のことを考えず、善意も悪意もない、ほんの気まぐれな行動だった。

たとえば、通り道を横切っていく蟻の集団を避けていく程度の認識である。

あるいは見るからにガラの悪い黒服たちを見て、この心に蓄積していた感情をぶつける丁度良いやつあたり相手だとも思ったのかもしれない。

彼は自らの腕力に任せて黒服の男達を一人残らず叩きのめすと、岩場の地面へと這い蹲らせた。

そんな彼の姿を見上げる双子の目は、二つの感情が同時に宿っていた。

何かに畏怖するような色を映している。

——そうか。

君たちにとってボクは神か。

それはそうだろう。

ボクは君たちより文字通り、遥かに高い次元にいる存在なのだから。

双子の無垢な視線を受けた彼は、自分の在り方がわかったような気がした。

ヤムチャ計画の為ではない、彼自身の存在理由を得たのだ。

歓喜と狂気の中で、彼は嘲笑う。

自分こそが唯一、二次元世界に過ぎないこの物語を上の次元へ押し

上げることができる上位者なのだ。

ドラゴンボール
原 作を導く者……それは――

かつて魔人ブウを生み出し、全宇宙に未曾有の混乱をもたらした魔導師ビビディ。

そのビビディの力を持ってしても魔人ブウの力を制御することは出来ず、疲弊したビビディはブウの封印を決意し、その隙を突いた界王神がビビディを殺害することによって宇宙の平和は辛くも守られた。

しかし、魔導師ビビディにはバビディという息子がいた。

その息子が父の意志を継ぐように、魔人ブウ復活の為宇宙を暗躍していたのだ。

界王神はその企みを阻止する為に、再び下界へ赴いた。

それは本来ならば破壊神が始末するべき案件なのかもしれないが、かの神が仕事をした場合にはそれはそれとして魔人ブウ以上に厄介なことになるかもしれないと言った思いもあったのか、若き界王神はあえて破壊神に頼ることをせずに、付き人のキビトを伴って二人でバビディの捜索を行っていた。

――そして、その選択が彼の命運を定めてしまう。

「やはりいましたか界王神」

「貴方はフリーザ!? なぜここに……っ」

バビディを捜して訪れた辺境の惑星。そこにいたのはバビディではなく、宇宙の帝王だった。

宇宙の帝王、フリーザである。その白い小さな身体からは、体格からは考えられないほどの禍々しく強大なエナジーが放たれている。

しかもこの時、フリーザは馴染み深い第一形態ではなく、つい最近まで誰にも見せたことのなかった最終形態の姿で待機していたのだ。

界王神がこの星に来ることを事前から知っていたように待ち構えていたその様子からは、彼が何らかの情報経路をもって界王神の動きを読んでいたことが窺えた。

——このエナジー……変身したフリーザが、これほどの力とは……!

全宇宙の神である界王神は、フリーザのことももちろん知っていた。

知っていた上で、造作もなく倒せる程度の存在だと見立てていたのである。

しかし、と……界王神は目の前に立つ怪物の力に慄く。

傲慢且つ高慢なフリーザの性格から判断して、彼が自主的にトレーニングを積むようなことはまずあり得ないと思っていたのだが、彼のその推測に反してさらなる力を得るために身体を鍛えていたらしい。

今はまだあの魔人ブウほどではないが……フリーザもまた、十分に界王神を超える戦闘力を持つ存在だった。

「まさか、キビトと連絡が取れなくなったのは……!」

「キビト? ああ、あの赤い人ですか。彼なら死にましたよ」
「え」

この星を訪れてから、手分けしてバビディを捜索をしていたキビトのエナジーが途絶えている。

界王神を前にしたフリーザは、微笑みを浮かべながら、その理由を語った。

「僕が殺した」

瞬間、界王神の心臓が弾け飛ぶ。

貫かれたのだ。

フリーザの指先から放たれた、一条のデスビームによって。

ドサツと、愕然とした顔を浮かべながら界王神が仰向けに倒れていく。

その顔には既に生氣はなく、彼の命がたった一発の攻撃でこの世から消えたことを顕していた。

「ご臨終です」

おーっほっほっほと満足そうに高笑いし、フリーザは背後に出現した黒髪の美青年に問いかける。

「リボンズさん、破壊神ビルスは消えましたか？」

フリーザ軍参謀、リボンズ。

数年前フリーザの前に現れ、その桁外れの知力、技術力によって有用性を示し続けた彼は、軍内でも異例のスピードで出世を続けた。

彼自身の戦闘力は大したものではないのだが、とにかく頭が切れるのだ。そしてフリーザさえも知らない膨大な知識量を持つ彼の頭脳は、軍内では非常に希少だった。

「ええ、たった今、消滅しました。こちらの動きに気づき天使と共に動いていたようですが、何分距離が遠すぎたようです」

「ふふ、ブザマだね。神ともあろうものが、この僕を見くびるからそうなるんだ」

リボンズというこの部下——彼はまさしくエンジェルだと、フリーザは上機嫌に笑う。

彼が来て以来、フリーザ軍の活動効率は飛躍的に上昇しており、フリーザもまた彼の言葉に耳を傾けてみた結果、破壊神ビルスの死と言う最高の結果を得ることができたのだ。

「破壊神ビルスを殺す方法、お教えしましょうか？」と彼が話を持ち

かけてきた時は、天使の囁きかと疑ったものだ。そしてそれは、間違いない事実だった。

彼の語る破壊神の弱点とは、対となる界王神を殺すことである。破壊神と創造神は二人で一つの存在である為に、どちらかが欠ければもう片方が消滅する仕組みになっているという話だった。

界王神もまた当初のフリーザより高い戦闘力を持っていたが、それでも破壊神と比べれば遥かに劣る為、フリーザがほんの少しだけ鍛えれば簡単に倒せる相手だとリボンズは語った。

しかもその界王神は先日から魔導師バビディを搜索する為、頻繁に下界へ降りており、彼を殺すなら今のタイミングがベストだという情報までもたらしてくれた。

破壊神ビルスの脅威は、父コルドから言い聞かせられており、フリーザ自身もその身で味わされたことがある。かの神が表に現れることは滅多にないが、フリーザは常々その存在を目障りだと感じていたものだ。

生まれながらの天才であるフリーザは今までトレーニングなどしたことがなかったが、「フリーザ様なら数日やれば十分でしょう」というリボンズの言葉を信じて試しに鍛えてみれば、これが想像以上の効果をもたらした。

あまりにも呆気なく、父コルドや兄クウラさえも飛び越えた力を身につけたのだ。

こういうのは私らしくありませんがねえと自身の飛躍を実感しながらもトレーニングを切り上げたフリーザは、リボンズの案内の下、界王神の殺害へ向かい——今に至る。

界王神の遺体を前に、フリーザは壇上で演説するように両手を広げながら言い放った。

「そうです！ 宇宙の頂点に立つのは神ではありません。この私……フリーザ様だ！」

呆気なさすぎてトレーニングの成果を試す戦いにもならなかったのが、唯一の不満か。

たった数日でこれほどにまで強くなりすぎてしまった私なら、界王

神狙いではなく直接破壊神を殺しに行っても良かったですねえと思
いながら第一形態に戻ったフリーザは、今回の神殺しの立役者である
リボンズの姿を一瞥する。

そのリボンズは今、まるで砂漠のハイエナのように界王神の遺体へ
手を伸ばすと、彼の両耳についていた耳飾りをテキパキとかすめ取っ
ていた。

「おやりボンズさん、遺体漁りとは貴方も趣味が悪いですねえ」

「申し訳ありません。このイヤリングが、一目見た時から気になっ
いたので」

「ホッホッホッ、構いませんよ。今回の報酬として、それも貴方に差し
上げましょう」

「ありがとうございます」

目の上のたんこぶが取り払われたことで、今のフリーザはすこぶる
機嫌が良かった。

普段なら意地汚いですよと部下の品の無い行動を咎めていたとこ
ろかもしれないが、元々リボンズのことを気に入っていたのもあり今
回は不問とする。

実を言うといい最近、彼が褒めてくれたエクササイズ法によって、
このフリーザの身長が3cm伸びたのだ。

普段の働きぶりももちろんだが、そういった功績も残してきた部下
には相応の寛大さを示すのが帝王の器だとフリーザは考えていた。

そんなフリーザの目に人当たりのいい微笑みで返しながら、リボン
ズ——リボンズヤムチャは次の思考を浮かべた。

——ポタラが手に入ったし、予定を変更しようか。ヤムチャ・テイ
エリアーデも、そろそろ用済みかな。

原作で言うところのラディッツ戦は、孫悟空とラディッツが共倒れになるという概ね原作通りの結末を辿った。

その戦いに、ヤムチャは参戦していない。ヤムチャもまた、天下第一武道会が終了してから二年間神様に修行をつけてもらっていたこともありラディッツの「気」は感じていたものの、戦いの現場へ向かうには距離が遠く、間に合わなかったのだ。

彼が到着した頃には既に決着がついた後で、一年後にサイヤ人という恐ろしい敵が二人現れることをピッコロから聞かされることとなった。

そんなヤムチャは今、あえてクリリンや天津飯たちとは行かず、ブーアルと共に訪れた荒野にて一心不乱に個人での修行に励んでいた。

「そうか……悟空は一年後に生き返るのか」

悟空は今あの世の世界で「界王」という神様よりも偉い存在の元で修行をしており、一年後にドラゴンボールで生き返らせるという連絡がブルマから電話で超越されてきた。この期に及んでもヤムチャのあがり症は相変わらず健在であったが、流石に何度も話したことがあるブルマやランチ、それも受話器越しでは発症することはなくなっていた。

閑話休題。

やはり孫悟空という男は、一度死んだ程度でへこたれる人間ではないらしい。

死後の世界でもやる気満々な彼の姿が目に見えようであり、ヤムチャは俺も負けていられないなどと自身の修行に精を出した。

一年後に現れるというサイヤ人……悟空の同胞らしいその二人のことはもちろんだが、ヤムチャは何より彼、孫悟空に成長の波から取り残されていく自分を見せたくないという思いが強かった。

故にヤムチャはプーアルに見守られる中で、拳を振るい、神経を研ぎ澄ませていく。

そんな彼らの元へ気配もなく声が掛かったのは、その時だった。

「それは吉報だね」

「っ、誰だ!? 何故俺と同じ顔をしている!」

丘の上に立ちながら、こちらを見下ろしてくるその人物の姿にヤムチャは驚愕に目を見開く。

その声も顔も、ヤムチャの頬に刻まれた傷痕や微妙な髪型の違い以外、その人物はヤムチャとまったく同じ容姿をしていたのだ。

「それは僕が君の兄弟だからだよ」

「兄弟だと……!?!」

兄弟——彼から告げられた言葉にヤムチャが眉をひそめる。

そんなヤムチャに、ヤムチャと同じ顔をした人間が耳当たりの良い声で続けた。

「名前はセル。セル・リジエネ・レジエッタ・ヤムチャ。セルリジエネでいいよ。君と同じ使命を持って生まれた、同タイプのヤムベイドだ」

「使命……ヤムベイド……? つうわああつ!?!」

彼が自らの正体を明かした瞬間、ヤムチャの頭脳に割れんばかりの痛みが響く。

機械惑星のクローンプラントで生まれ、ポッドに乘せられ射出されていく光景。

自身の母体であるビッグゲテスター・ヴェーダによつて、「ヤムチャであれ」と命じられた記憶。

この世界が「ドラゴンボール」という物語の世界であることも、全て——全て、思い出した。

それは、ヤムベイドとして生まれたヤムチャ・ティエリアーデ本来の記憶だった。

「そんな……俺は……僕は……私は……！」

「ヤムチャ様!? 大丈夫ですか、ヤムチャ様！」

今まで自分が人間であることを、ヤムチャであることを疑わずに生きていたヤムチャ・テイエリアーデは泣き崩れるように地に伏した。思えば、ピッコロ大魔王の攻撃を受けた時からその兆候はあった。夢の中で、おかしなビジョンを見たこともあった。

薄々と感じ始めてはいたのだ。自分が普通の人間ではないことに。しかしそれでも、ヤムチャ・テイエリアーデという存在はそんな想像さえも及ばないほどに——酷く、歪な存在だった。

「思い出したようだね、ヤムチャ・テイエリアーデ。さあ、僕達の元へ帰ろう」

真実を思い出したヤムチャテイエリアに、セルリジエネが右手を差し伸べる。

セル……セル・再リジエネ・レジェッタ生・ヤムチャというヤムベイドの存在は、リボンズヤムチャによって送り出された999体の中にはいなかった筈だ。

しかしその名前に「セル」という人造人間編のラスボスの名がついていることから、何らかの因果関係があることが窺える。

そんな「原作知識」が自分の中にあることもまた、ヤムチャには嘔吐感を覚えるほど気持ちの悪い感覚だった。

「……違う」

「ん？」

「サンキュー、プーアル……俺は大丈夫だ」

「ヤムチャ様……っ」

気づけば、ヤムチャはそう呟いていた。

違う。こんなものは認めない。全部まやかしだ。

自分がこれまで生きていた世界は、決して空想の産物ではなく、れっきとした現実だった。

ヤムチャ計画——その全貌を思い出したヤムチャが真っ先に抱いたのは、その計画を果たすべきヤムベイドとしての使命感ではない。

その心に浮かんだのはまるで自分達のことをゲームの駒のように扱う元少年やリボンズヤムチャに対する激しい嫌悪感と、オオカミの咆哮のように熱く滾る反骨の炎だった。

「俺は教えられた！ プールに、老師様に、クリリンやみんなに……そして、孫悟空につ！ あいつらの生き様の、その強さを！」

ヤムチャは、あらん限りの声で叫んだ。

ヤムチャ計画——俺は、そんなくだらない計画に手を貸すつもりはないと。

自分の大切な仲間たちを、そんなものに付き合わせるつもりはないと。

自分たちは漫画のキャラクターではなく、一人の人間だと。

言い切って、ヤムチャは立ち上がり、セルリジエネの瞳を睨む。

「俺はヤムチャだ！ 俺がヤムチャとして生きていたあの時間は、あんたらの手のひらや紙の上の物語なんかじゃなかった！」

だから……そう言って、ヤムチャは拳を握り締め、構えた。

「俺はこれからも、ヤムチャとして生き続ける！ がむしやらなまでに！」

構えた拳を突き出し、中指を立てて宣言する。

それは原作にもある台詞を皮肉としてぶつけた、セルリジエネの裏にいるであろうヤムベイドの親玉に向けての叫びだった。

「あんたらのくだらねえ計画の為にみんなの人生まで歪めるなら、俺は絶対に許さねえ！ 消えろヤムベイド！ ぶつとばされんうちにな!!」

ヤムチャティエリアはたった今、この時を持ってヤムチャとなることを選んだのだ。

物語のキャラクターとしてではなく、自分自身の意志で。

原作でもない。ヤムベイドでもない。彼はただ純粹なるヤムチャとして変革し、ヤムベイドと決裂した。

そんなヤムチャの剣幕にセルリジエネは無表情を返し——次の瞬間、ヤムチャの脳に声が響いた。

『ははははー』

「っ……リボンズヤムチャ！ ヴェーダの力か……！」

宇宙のどこかに隠しているのである。うビッグゲテスター・ヴェーダ。その能力を使い、遠く離れた星からヤムチャの頭脳へ回線を開いたのである。

リボンズヤムチャ。ヤムチャ計画の体現者であり、ヤムベイドの生みの親である彼はヤムチャに言った。

『どうやら君も、あの男に感化されてしまったようだね。孫悟空に……家族の幸せよりも自分の修行を優先して死んでいった、愚かな二次元に！』

「貴様ああっ!!」

孫悟空を、友を愚弄した。

それも人としてではなく、絵のように扱って嘲笑う彼に、ヤムチャの怒りが頂点に達する。

しかしヤムチャの振り上げた手が、誰かに下りることはなかった。彼が動き出すよりも速く、セルリジエネの右手がヤムチャの胸を刺し貫いていたのだ。

ヤムチャというキャラクターが、原作でドクター・ゲロにやられたように。

呆気なく、紙切れのように。

「っ……！」

「ヤムチャ様?! ヤムチャ様！ しっかりしてください、ヤムチャ様あ……！」

『さようなら、ティエリア・アーデ。ヤムチャの役目は、ボクに返してもらおうよ』

グシャツと何かが潰れるような音が響く。

セルリジエネが右手を引き抜くと、ヤムチャの身体は糸が切れたように倒れていった。

間もなく呼吸を停止し、動かなくなる。

泣き腫らしたプーアルが駆け寄るも……既に無機物となっていたヤムチャに、返事はなかった。

そんな彼らの元から踵を返し、セルリジエネが瞳を閉じながら言う。

どこか居たたまれないような雰囲気で放った、リボンズヤムチャへの問い掛けの言葉だった。

「……そう言えば、アニューは呼び戻したのかい？」

『トキトキ都から得られる情報は、十分に集まったからね。脱出の際にトランクスのいざこぎはあったけど、彼女にも脱出してもらった。リヴァイブやブリングたちも一緒だよ』

「ヤムチャマイスターの集結か。予定よりも随分早かったね。テイエリアとも、本来ならナメック星で合流する筈だった……何も、殺す必要はなかったんじゃないかな？」

『それでもないさ。自力で記憶を取り戻し始めていた彼の動きは、少し不穏だったからね。現に彼は、ボクたちに反抗の意を示したじゃない?』

「ふーん……まあ、そういうことにしておくよ」

ヤムチャの遺体にすぎるように泣きつくプーアルの姿を見て、セルリジエネは依然変わらない表情を浮かべる。

そんな彼はパツと見ただけではわからない程度に肩を竦めた後、その場から「瞬間移動」を発動し、臍のように立ち去っていった。

——元少年の企てたヤムチャ計画……それはリボンズヤムチャによる方針の変更によって、この時を境に大きく揺れ動くこととなる。

そしてその歪みは後の「物語」にも、大きな影響をもたらした。

その一つは——孫悟空が原作よりも圧倒的に強い姿で生き返ったことである。

——ヤムチャが消えた。

友であり、最大のライバルと認めていた彼がラディッツよりも遙かに強い何者かによって倒されたという情報は界王星にいる悟空にも伝わり、その事実が悟空に激しい怒りと、より強い発奮を与えたのである。

元々悟空はライバルであるヤムチャの存在により、原作よりもさらに強い刺激を受け、修行に精を出していた身である。

もはや界王星での修行は界王様がドン引きするほど苛烈としたものとなり、悟空は既に死んでいる身でありながら、何度死の淵を彷徨ったかわからないほどだった。

そして自らの身体を過酷に追い込めば追い込むほど、悟空の中にあるサイヤ人の血は彼の身体をより強く進化させていった。

そしてその結果は、原作の展開をもの見事に崩壊させることとなった。

まず一つ、

「ピッコロ、無事か？ 仙豆だ、食べ」

「孫……お前……」

「悟飯を助けてくれてありがとな。後は全部オラがやる！」

「おとうさあんっ……！」

——ピッコロの生存である。

悟空が原作より強くなった分、蛇の道を突破する時間が短縮され、本来なら悟飯を庇って死ぬ筈だったピッコロを致死前に助けることができた。

これによつて後にナメツク星へ行く理由がなくなり、彼らのナメツク星編は始まる前に無事終了することとなる。

さらにもう一つ、

「カ……カカロット、てめえ、なんで俺を……」

「おめえはどうしようもねえワルだけだよ……身動き一つできねえ奴に、わざわざとどめを刺すことはねえだろ」

「動けないサイヤ人を助けるとは、やはり貴様は出来損ないだな、カカロット。弱い奴は死ぬ、それがサイヤ人のルールだ！」

「違う……オラは地球人だ！」

——ナツパが生き残った。

原作よりも強い姿で帰ってきた悟空は、ナツパを投げ飛ばしてから放たれたベジータの攻撃に反応し、ナツパを担いで超スピードで救出したのである。

それは誰より助けられたナツパが驚いた展開であり、彼は愕然とした目で悟空の姿を見上げていた。

そんな悟空とベジータの限界を超えた熱い戦いは白熱を極めたが、次第に悟空が優勢に進んでいった。

「オラは赤ん坊の頃地球に送られて、本当に良かったと思ってるぞ！」

おめえみたいにならずに済んだからな！」

「馬鹿な……っ、貴様、この俺の戦闘力を！」

「オラはもう、人の命を見捨てたりしねえっ！ 界王拳!!」

原作では三倍でようやくベジータの戦闘力180000を超える筈だったところを、悟空は二倍の界王拳で戦闘力200000を超えてみせた。

そんな彼の脳裏に焼き付いているのは、今の自分のように拳を連打していく宿敵ともの姿だった。

「そうだろう？ ヤムチャー！」

天下一武道会でのヤムチャとの死闘を思い出しながら、悟空が叫ぶ。

謎の男によって殺されたという彼は、どういうわけか自分と一緒に生き返ることができなかつた。神様の話によれば、魂があのお世にないとのことだ。

彼の遺体も、まだ見ていない。

だからか、悟空はまだ彼の——ヤムチャの生存を信じていた。

信じているが、この戦いには来れないのであろうヤムチャの分まで背負うかのように、悟空はベジータを圧倒していく。

そして追い詰められたベジータは原作通り大猿へと変身し、十倍になつた戦闘力で今度は悟空が圧倒される側となつた。

「尻尾をなくしたことを後悔するがいい！」

「大猿の化け物……!? なんてこった……じつちゃんを殺した化け物は、オラだったんか……!」

大猿ベジータを相手にやや粘りを見せた悟空だが、6倍まで高めた界王拳でも力負けし、窮地に陥る。

その際、原作ほど力の開きがない分大猿ベジータが油断のない機敏な動きで飛び回り、岩陰で尻尾を切る隙を窺っていたヤジロベエが動くに動けなかったのは皮肉な状況だった。

やがて万策尽き、界王拳の反動で息も絶え絶えとなった悟空に向かって、大猿ベジータは地球ごと全てを吹き飛ばそうとギヤリツク砲の構えを取る。

「この地球ごと……宇宙の塵になれえ！」

そしてその瞬間——悟空の身体から黄金色の光が爆発した。

「そんなこと……させねえっ!!」

「なに!？」

悟空の黒髪が逆立ち、黄金色のおびただしいオーラが広がっていく。

界王拳とは違う。大猿とも違う。

一目見ただけで明らかに違うとわかる悟空の変化に、たった一つだけ思い当たる節のあったベジータが驚愕した。

「貴様、その姿は……まさか!？」

落ちこぼれの下級戦士が……スーパーサイヤ人になったというのか!？」

そう叫ぶ大猿ベジータの腹を、黄金色に輝く悟空の鉄拳が打ち抜いた。

そんなサイヤ人編のクライマックスパートを、ビッグゲテスター・ヴェーダに増設した大広間にて巨大なウインドウ画面から眺めながら、この場に集結した「ヤムチャマイスター」たちは思い思いの感想

を口々に語っていた。

「リボンズ、あの孫悟空の変身は何かしら？」

「擬似超サイヤ人……いわゆる、超サイヤ人の不完全体さ」

「あー、思い出した！ スラッグの映画に出てきたアレね！」

「ふん……まだ、我々には遠く及ばん」

「ブリングの言う通りだな」

「それでもテイエリア・アーデー一人の違いで、孫悟空がここまで強くなるとはね」

「君が恐れていたわけだ。早めに処分して良かったね、リボンズ」

この時点では原作よりも強くなっている孫悟空。

当初の計画よりも速く処分することになった、ヤムチャ・テイエリアーデー。

そんな光景を前にして、これからどう計画を動かしていくのか……どこか微笑ましいものを見るような目で、セルリジエネがリボンズヤムチャの姿を見やる。

しかしリボンズヤムチャの目線は今、広間に映し出されているウインドウ画面にのみ注がれていた。

「……孫……悟空……」

彼が意図せず呟いたその名前には、様々な感情が入り乱れた混沌の思いが込められていた。

転生したヤムチャが撃ち落とせない件

ヤムチャ・アニュー。

トキトキ都に潜入し、タイムパトロールとして活動していたヤムベイドである彼女は、ビッグゲテスター・ヴェーダにとって最も有益な情報をもたらしてくれた。

タイムパトロールは時間犯罪を取り締まるという役割上、各時代へのタイムトラベルを合法的に行うことができる唯一の組織だ。それ故に彼女はこの時代だけでは得られない情報、戦闘経験を積み重ね、それをビッグゲテスター・ヴェーダへの糧としてくれた。

そんな彼女のことでもリボンズヤムチャにとって誤算だったのは、彼女がタイムパトロールの同僚であるトランクス（ゼノ）と恋仲になったことだろう。

……驚いたことに、彼女はまるで乙女ゲームの主人公のように、彼が抱えていた誰にも知られていなかった心の闇に気づきそれを払ってみせたのである。それがきっかけとなって彼は彼女のことを同僚としてではなく一人の女性として見るようになり——その件に関しては後ほど語るとして、ここでは割合する。

そんな彼女はこちらへ合流する際、あちらで構築した複雑な人間関係によるいざこざで数人のヤムベイドを浪費することになったものだが……彼女のおかげでそれまでトランクスにこちらの動きを疑われなかったのも事実である以上、彼女を女性型として作ったことが間違いだとは思わなかった。

それに……と、リボンズヤムチャは自身の後ろに立つサイヤ人の姿を見やり、微笑を浮かべる。

ヤムチャアニューがタイムパトロールとしての活動を隠れ蓑に、彼をこの世界に連れてきてくれたことは仮に100体のヤムベイドを犠牲にしたとしてもお釣りが来る功績だった。

孫悟空の父親であり、ドラゴンボールゼノバース、ヒーローズ等のゲーム作品などではフリー素材ばりに酷使され、あらゆるIF世界で

大活躍をしていた彼。

息子に負けず己の道を極め、血塗れになりながらも戦い続けていく求道者としての姿は、さしずめ「ミスター・グドー」と呼ぶべきか。そんな彼に、リボンズヤムチャは振り向いて提案する。

「仲間や奥さんの仇であるフリーザと、決着をつけたくはないかい？」と。

——ナメック星編。

孫悟空が原作よりもパワーアップしてしまった影響により、サイヤ人編で発生した地球戦士の犠牲者は実質餃子一人だけだった。

一回目の死でありドラゴンボールを使えば生き返れる天津飯は、「餃子を残して自分だけ生き返るわけには……」と自らの生き返りを渋る場面があつたが、そんな彼の背中を長年寄り添ってきたヒロインのように餃子がそつと押してあげた。

「天さん、僕は生き返れないけど……きつとまた、生まれ変わる。だから天さんは生きて。生きれなかった、僕の代わりに……」

やがて別の生命に生まれ変わる餃子と、また会うために。餃子と交わした約束に、天津飯は男泣きする。そして、いつか訪れるその日の為にブザマな姿は晒せない、天津飯は涙の覚醒を遂げた。彼はなんと、餃子の能力を受け継いだかのように超能力を使えるようになったのだ。

その天津飯は地球のドラゴンボールで生き返った後、これまで以上に鬼気迫る勢いで修行を行い、そんな彼の姿勢には共に界王星での修行で思いついた重力トレーニングをしている悟空さえも唸るほど

だった。

ピッコロは死ななかった為、今は悟空たちの家に帰った悟飯の元へちよくちよく修行をサボっていないか見張っている、という名目で見守りに来ている。

本人は今でも悟空を殺し、悟飯を魔族にするつもりだと言っているが……彼が悟飯と暮らしたことで大魔王時代とは明らかに変わってきているのは、もはや語るまでもないだろう。

——そんな形で、地球では東の間の平和が訪れていた。

ピッコロが生きており、神様も依然健在である以上、彼らにはドラゴンボールを求めてナメック星へ行く理由もない。

故に、原作で言うところの「ナメック星編」はもはや始まりさえしなかった。

しかし、フリーザやベジータたちはそんな地球とは関係なく暗躍する。

彼らによつて多くの犠牲者を生むこととなるナメック星編は、ヤムチャ計画からすり替えられたリボンズヤムチャの計画によつて酷く歪められた。

悟空たち地球の戦士がナメック星に来なかったことで、フリーザは目的通りドラゴンボールを7つ揃えることに成功した。

途中、ベジータとサイヤ人編を生き残り、再びベジータの部下に戻ったナツパの裏切りによつて事態を引つ掻き回されたりもしたが、参謀リボンズの知略や派遣先から呼び戻したギニュー特戦隊の働きもあり、フリーザは数日掛けて遂に7つのドラゴンボールを手中に収めたのである。

しかし、ドラゴンボールを7つ集めただけでは願い事は叶えられない。

ドラゴンボールから神龍ポルンガを呼び出し、願い事を言う為には特殊言語であるナメック語を使う必要がある、大半のナメック星人たちを殺し尽くしてしまったフリーザは生き残りのナメック星人を探す為、ドラゴンボールをギニューに預け、その場から飛び立っていったのである。

——それこそがリボンズ……リボンズヤムチャの策略だと知らずに。

「プピリット・パロー！」

フリーザがドラゴンボールをギニューに預け、飛び立った跡を見計らい、リボンズヤムチャは流暢なナメック語で呪文を唱え、神龍ポルンガを召喚した。

リボンズヤムチャはこの時のために、ナメック語を習得していたのだ。

リボンズヤムチャがそれをフリーザに黙り、いなくなった後で唱えたことに謀反の意志を読み取ったギニューたち特戦隊が一齐に牙を剥いたが、次の瞬間には彼らの身体は横たわり、呆気なく意識を失っていた。

リボンズヤムチャの元に降り立った六人のヤムベイドが、彼らの意識を一瞬にして刈り取ったのである。

ヤムチャ・リヴアイヴ。

ヤムチャ・ヒリング。

ヤムチャ・ブリング。

ヤムチャ・デヴァイン。

ヤムチャ・アニュー。

セルリジエネ・ヤムチャ。

それぞれに「復リヴアイヴ・リバイバル活」、ヒリング・ケア「癒し」、ブリング・スタビティ「安定」、デヴァイン・ノヴァ「神」、

「アニュー・リターナー、リジエネ・レジエッタ
「新たなる帰還者」、「再生」というコードネームを与えられた彼らは、ヤムベイドの中でも特に優れた能力を持ち、言うならばヤムチャの特戦隊だった。」

そんな彼らを、リボンズヤムチャは「ヤムチャマイスター」と呼んだ。

「最初からあたしらでドラゴンボール集めれば良かったのにー」

「同感だな」

「だが、それでは物語にならない」

「そうだね、ある程度は彼らの物語を見守らないと。それが計画の為に生まれてきた僕たちの役目だ」

ビッグゲテスター・ヴェーダが生み出した最高の肉体を持つ彼らの戦闘力は、一人一人が超サイヤ人を凌駕している怪物である。

人を超えた存在——いわばヤムチャの変革者である彼らは、ヤムベイドを超えたヤムベイターとも自負する能力者たちだった。

そのヤムチャマイスターの全員が招集され、彼らによって邪魔者が排除された場所にてリボンズヤムチャが悠々とポルンガと向き合った。

ナメック星のドラゴンボールを手に入れ、願いごとを言う。

それこそが、元少年が企てたヤムチャ計画の第三段階であった。

しかし、リボンズヤムチャがこの時言い放とうとする願い事は、本来の計画にはないものだった。

この生の中で自らが本当になすべきことを知ったりリボンズヤムチャは、己が存在意義であるヤムチャ計画さえも取り込み、自らの計画へと書き換えていたのだ。

その為に、ヤムチャは本来のヤムチャ計画とは違う願いをポルンガに告げた。

「君の持つ力の全てで、この第7宇宙を外の宇宙から隔離してくれ」

それはポルンガにとって、過去最大に難易度が高い複雑な願いだろう。

ナメック語でそう告げたりリボンズヤムチャに対して、ポルンガは逡巡するように数拍の間を空けて返した。

「その願いは、私でも簡単に叶えられる願いではない」

「君なりに、最善を尽くしてくれればいいよ。とにかくこの宇宙を外側から見えなくし、遠くへ飛ばし、入れなくしてくれればいいんだ。十二の宇宙から、上手く除外できないかな？」

「……わかった。やってみる」

地球のドラゴンボールとは違い、「それは私の力を大きく超えた願いだ」とにべもなく拒否するのは流石本場の神龍と言ったところか。

やはりこの星に来て良かったと、リボンズヤムチャは改めて思った。

そんなリボンズヤムチャに、セルリジエネが訊ねる。

「面白い願いだね、リボンズ。そんなに外の宇宙が怖いのかい？」

「ザマスにあれだけ暴れられても動かなかった全王や大神官が、ボクたちのことで動くことはまずありえない。でも、ビルスの死に気づいたシャンパがこちらの様子を見に来る可能性はなきにしもあらずだ。いつかは彼らと戦うことを想定すれば、ボクたちヤムベイドが神を超えるまで時間稼ぎが必要だろうか？」

「神を超える？ あはは！ さっすがリボンズ！ 燃えてくるね、面白いじゃないさ！」

「君はやはり、神を超えるつもりなのか。しかしそれは、ゲンサクの孫悟空でさえ成し遂げられるか怪しい偉業ですよ？」

このような願い事をしたリボンズヤムチャの思惑に共感し、女性的な外見をしたヤムチャヒリングが愉快そうに笑い、セルリジエネが薄く笑む。ヤムチャアニューとヤムチャブリング、ヤムチャデヴァインの三人は沈黙しているが反目しているわけではなく、事の重大さを理解するヤムチャリヴァイヴが問い詰めるようにリボンズヤムチャに言った。

リボンズヤムチャは肩を竦めながら、当然のことのように答える。

「それは愚問だよ、リヴァイヴ。ボクらは「原作」という枠組みから外れた上位者であり、絶対者だ。神と言ってもボクたちから見れば、所詮は二次元の存在に過ぎない。負けるつもりはないよ」

涼やかな瞳の中に、確かな野心の火を宿す。

それに……と続けて、リボンズヤムチャは言った。

「この世界に必要な神は、いつだって一人さ。このボク……リボンズヤムチャだよ」

あるいはそちらの方が、彼の本音なのだろう。

彼と同じ遺伝子情報を持つ彼らヤムベイドたちは、そんな彼の胸中を理解し、同調していた。

ただ一人、セルリジエネを除いて。

「……来たよ、リボンズ。僕は先に帰るね」

こちらへ猛スピードで接近してくるフリーザの「気」を感知したセルリジエネが、そう言い残しながらそそくさと自分だけ「瞬間移動」でこの星から立ち去っていく。

「願いは叶えてやった。では、さらばだ」とポルンガがリボンズヤムチャの願いを叶え、空に舞い上がったドラゴンボールが石になって散らばったのはその時だった。

本来なら願い事は三つ叶えられる筈だったポルンガが、たった一つの願い事で消えてしまったのは、原作のように最長老が死んだからではない。

今しがたりボンズヤムチャが告げた願いを叶える為には、三分分のエネルギー全てを消費しなければ実現出来なかったからであろう。

元よりリボンズヤムチャは、他の願いをこの場で叶える気はなかった。尤も、不老不死のような「ありきたりな願い」程度なら、わざわざドラゴンボールに頼らずともビッグゲテスターを手中に収めた時点でほとんどノーリスクで叶えられるからだ。

故に、もはやこの星に留まる理由はなくなつた。自分もセルリジエネのようにさっさと瞬間移動で去ろうと思つたりリボンズヤムチャだが、それでも元上司の最期ぐらいは見届けてやろうかなと気を効かせてやった。

「遅かったですね、フリーザ様」

「……リボンズさん、やってくれましたね」

自分が立ち去った後で突如暗くなった空に、現れた巨大な龍。戻った頃にはドラゴンボールは全て石になっており、龍はその場から消えていた。

そして彼の周りには地面に這いつくばって倒れているギニュー特戦隊の面々と、彼に似た面影を持つ青年たちの姿がある。

その状況を目にすれば、リボンズという部下が何をやらかしたのか疑う余地はなかった。

やってくれましたね、とフリーザは表面上こそ常の余裕を保ったまま、冷静に口を開く。

しかし次の瞬間、彼の形相は阿修羅すら凌駕し、両の目を血走らせながら叫び出した。

「許さん……絶対に許さんぞ虫けらども！　じわじわとなぶり殺しにしてくれる……！　一人残さず生かしては返さんぞ覚悟しろッ!!」

対界王神に備えて83万まで鍛え上げていた戦闘力を一気に解放し、フリーザが本性を露す。

しかしそれを見ても目の前の青年は涼しい顔一つ崩さず、隣の女性に至っては拍手をしながらニヤニヤと笑っている。

そんな彼らの姿が余計に神経に障り、フリーザの「気」はさらに増大していき、弾けた。

「下等生物どもが……っ、このフリーザ様を謀りやがって……！　私は三回の変身を残しているのですがねえ……全員まとめて、最終形態で消し飛ばしてくれる!!」

第二形態、第三形態を飛ばして一気に最終形態へと変身するフリーザ。

もはやなりふり構ってはおらぬとばかりに出し惜しみをしない姿は、それほどまでに自分がリボンズという虫けらに出し抜かれたことが悔しかった証である。

リボンズの戦闘力はおそらく、高くても1000程度であろうとフリーザは見立てている。彼の護衛として共に軍に加わったヒリングという女性のこともフリーザは知っており、その戦闘力が5万にも満

たないことも知っていた。

他の四人のことは初めて見るが、おそらくはヒリングと同程度だろう。いずれも今のフリーザが最終形態で相手をするには、あまりにもオーバーキルが過ぎる相手だ。

しかしそれを辞さぬほどに、この時のフリーザはマジギレしていた。

そのフリーザを前に、リボンズ——リボンズヤムチャは言い捨てる。

「そう言う君の役目は終わったよ」

君は界王神様を殺した、言うならば「神殺しの大罪人」だ。

白々しくそう言っつて、リボンズヤムチャは言葉を続ける。

「罪を犯した子には罰を与えないとね」

「罰ですつて？ ふふ、貴方が、この僕に？ それは見物ですな」

最終形態になったことで少し精神が冷静になったフリーザに、リボンズヤムチャは尚も冷笑を返す。

そしてリボンズヤムチャは、彼に対して死刑宣告を言い渡した。

「君を裁く者が現れるよ」

「裁く者……？ まさかー」

意味深に告げられたリボンズヤムチャの言葉に、フリーザは思い当たる節を探る。

裁く者——それはこのフリーザの力を妬んだ兄クウラか、はては破壊神ビルスに手を出すなどという言いつけを破ったことに気を悪くした、父コルドか。

……いいだろう。どちらが来ても相手になってやろう。丁度、そろそろうるさいと思っていましたしね。

小賢しい策謀に長けたリボンズのすることだ。大方、この時の為に僕の肉親を味方につけていたのだらう。そう推測したフリーザであったが——現れたのは、彼にとって予想だにしない人物だった。

——それは空間を疾走する流星の如き、黄金色の光だった。

求めるべき怨敵の姿を視認していた彼は、元来堪え性のない性格である。

そんな彼は今まで燻り続けていた感情を解放しながら、一直線に加速していく。

リボンズヤムチャも、彼の仲間であるヤムベイドという連中も自分の到着に気づくとその場から立ち去り、彼の怨敵フリーザと自分だけをこの場に残してくれた。

最高のお膳立てだ。

フリーザと一対一で戦い、そして勝つ。それこそが自分が果たしたいと思っていた——もはや絶対に果たすことはできないと諦めていた、この生の悲願だったのだから。

「会いたかった……会いたかったぜ！ フリーザアアア!!」

その身に闘気の全てを昂らせた彼——超サイヤ人2のバーダックが、万感の思いを込めてフリーザと相對する。

しかしその手で繰り出したのは、長年待ちわびた恋人へのハグなどではない。どこまでもサイヤ人らしく乱暴な、拳の一突きだった。

「な、なんですか貴方は……?」

「ギネと惑星ベジータの仇、討たせてもらうぜ！ この超サイヤ人で！」

「ス、スーパーサイヤ人!? まさか……まさか、貴様っ!」

自分を裁く者——超サイヤ人。

それを聞いて、フリーザは納得と同時に激怒を浮かべる。

たかがサイヤ人が自分を裁くなどというリボンズの大ボラも気に食わなかったのだが、もはやナツパとベジータ以外存在しないと思っていた……自分が滅ぼした筈の下等な猿野郎がまだ生きていたこと自体が、彼の神経に障った。

そして何より、この男の「目」だ。

「貴様……思い出したぞ！ この僕に最後まで抵抗してきたあのサイヤ人だな！」

「覚えているとは光栄だな！ やはりてめえは、この俺の手でぶっ潰さなきゃならねえみてえだ！」

「っ！」

一撃目の拳を右腕で受け止められたバーダックは、次に膝蹴りを繰り出しフリーザのガードを力任せに破っていく。

そしてがら空きになった彼の胸に、渾身の肘打ちを叩き込んだ。

そうだ！ とバーダックが叫ぶ。

「ぶっ殺し合う運命だったあつ！」

「ぐうっ!？」

戦闘民族らしい粗野な笑みを浮かべながら、バーダックは嬉々としてフリーザを殴り飛ばす。

今や界王神をも超えたフリーザの最終形態が、一方的に圧されているのだ。その事実には驚愕と怒りを覚えたフリーザが、身体中の筋肉を膨らませながら対抗していく。

ぶっつかり合う拳と拳。

容赦の無い二人から迸るエネルギーの奔流に煽られ、天変地異を起こすナメック星。

その荒れ狂う星の空でお互いの拳を塞ぎ合いながら、バーダックが叫んだ。

「何度でも言うぜ、フリーザ！」

「なにを……！」

「サイヤ人を滅ぼしやがった貴様だけは、絶対に許さねえ!!」

「偉そうなことを言いやがって……！」

バーダック——目の前のサイヤ人が本当に自分の恐れていた「伝説の戦士」であることを理解したフリーザが、冷静さをかなぐり捨てた目で睨み、その尻尾で彼の首を締め上げようとする。

しかしそれを両手で受け止めたバーダックが、彼の尻尾を思い切り引きちぎった。

「あぐっ……！……このっ……戦うことしか能の無い猿野郎が！」

フリーザはその尻尾に激痛が走りながらも体勢を立て直し、フルパワーでの頭突きをバーダックに喰らわせる。

そして彼は、惑星ベジータを滅ぼした自らの正当性を示すように言い放った。

「貴様らサイヤ人のやってきたことが、正しかったとでもいう気か!」「そんなことはどうでもいいだろう!」

頭突きを喰らった額——かつて同僚から託された血染めのバンダナから血流を流しながら、純粹なる青い瞳でバーダックはフリーザを睨み、迷いもなく言い切った。

自分の息子であれば、「だから滅びた」とサイヤ人の末路に対し、因果応報だと切り捨てたところだろう。

しかし、バーダックは違う。

サイヤ人は戦闘種族だ。これがもし自分が望んだ戦いの中で死んでいったのであれば、後腐れなく滅びを受け入れられたと彼は考えている。

だがフリーザは別だ。

彼の為にサイヤ人は散々こき使われ、ゴミのように捨てられた。そして何も知らない同胞たちを、一発の騙し討ちでまとめて消し去っていったのだ。

その卑劣な手口が、気に入らない。

妻のギネを殺したのも、気に入らない。

そしてさらに気に入らなかったのは、あのヤムチャアニューという女から聞かされた話——そのフリーザが後にバーダックの息子であるカカロットによって倒された後、そのカカロットによって数十年後、再びこの世に生き返るといふ未来の出来事だった。

こんな父親だ。カカロットが未来でやらかすことに、説教くれるような高尚な気は無い。

ヤムチャアニューの言葉を鵜呑みにする気も無いし、そのことでカカロットに失望したわけでももちろんない。

ただバーダックという男が今もなおフリーザを憎む理由としては、この怒りを風化させない理由としては、それだけで十分だった。

「てめえがこの世に生きてんのが気に入らねえ! 俺たちが殺し合う理由はそれで十分だろう!」

崩壊していくナメツク星。

そのひび割れた地には奇しくも原作通り、胴体を真つ二つにされたフリーザの姿が横たわっていた。

フリーザは超サイヤ人——バーダックとの戦いに引き分けたのである。

彼らは互いの最終攻撃でそれぞれの肉体を削り合い、致命傷を受けたのであったのである。

力を使い果たしたバーダックはやり切ったような顔でナメツク星のマグマへと消えていき、フリーザは真つ二つになって地に崩れ落ちた。

そしてその時になって、裏切り者であるリボンズ——リボンズヤムチャが這いつくばるフリーザの元へ現れたのである。

「ドラゴンボールは君の願いではなく、ボクの為に使わせてもらったんだ」

「きさまア……！　この俺の不老不死をツツ……！」

フリーザの命はもはや風前の灯火であり、このまま放っておいても程なくして死ぬだろう。

しかしそれでもなお衰えない、寧ろ肥大化しているような気さえする帝王の威圧感を撒き散らしながら、フリーザは憎悪の目をリボンズヤムチャに差し向けた。

リボンズヤムチャはそんな彼の視線に対し、やれやれとでも言いたげな呆れた顔を返した。

「そう言う物言いだから、器量が小さいのさ」

その手に気攻波を溜めながら、リボンズヤムチャは肩を竦める。

この死に体のフリーザに、とどめを刺すつもりなのだろう。

「フリーザ軍の行く末は、ボクに任せてもらうよ」

冗談ではない。

貴様などに殺されるぐらいなら、俺は……！　そう齒軋りし、フリーザは残るありったけの力を込めて、その拳を地面へと突き刺した。

「リボンズウウウーッ!!」

怨嗟の叫びを最後に、フリーザは——ナメツク星ごと全てを消し去った。

やはり宇宙の帝王は伊達ではない、と言ったところか。

原作では孫悟空に命乞いをしていた彼だが、流石の彼も戦つてすらない人間に生き恥を晒すのは我慢ならなかったのだろう。

ナメツク星は原作通り、爆発して消滅することとなった。

リボンズヤムチャを巻き込んでフリーザは自害し、星ごと自分たちの墓標にしてみせたのである。

ただ、そんなフリーザにとって誤算だったのは、リボンズヤムチャがヤードラット星人の秘術である「瞬間移動」を扱えたことだった。

ヤードラット星に送り込んだヤムベイドの働きにより、ビッグゲテスター・ヴェーダには「瞬間移動」の習得方法なども情報としてインプットされている。それを参考に予め瞬間移動を習得していたリボンズヤムチャは、一足先にビッグゲテスター・ヴェーダへ帰還していたヤムチャマイスターたちの元へ退避することで、星の爆発から逃れ

たのである。

「ねえ、そう言えばバーダックはなんで生きてたの？」

「……私がタイムパトロールをしていた頃、過去の世界から連れてきたのよ」

「ボクがそう命じたんだ。彼もある意味、原作という枠組みから超えた存在だからね」

「あ、リボンズ、おかえり」

まさに、たった一人の最終決戦である。

フリーザと相打った孫悟空の父、バーダック。

彼はこの世界の人間ではなく、ヤムチャアニューが担当していた「トキトキ都」でのみ観測できる歪んだ時間軸から連れてきた人間だったのだ。

異なる時代の時間軸から超戦士を引き抜き、この世界の歴史を狂わせた。リボンズヤムチャが今回フリーザに対して行ったのは、もはやどう取り繕っても言い逃れできない盛大な時間犯罪であった。それこそ、ザマスなら助走をつけて殴り掛かった後宇宙になって高笑いする案件であろう。

しかし自分こそが絶対者であり、唯一無二の神なのだと悟っているリボンズにとって、もはや旧時代の神が定めた法などどうでも良かった。

「フリーザは死んだのか？」

「うん。帝王らしい最期だったよ」

寡黙なデヴァインヤムチャの問いに、リボンズヤムチャが帝王の最期を簡潔に語る。

どこまでも強く、どこまでもしぶとい。憎悪に滾った瞳は夢に出てきそうだと軽く語るリボンズヤムチャであったが、その嘲笑の裏では悔れない男だったと思えば彼の死に安堵している自分がいた。

トキトキ都——メタ的に言えば、「ドラゴンボールゼノバース2」というゲームの世界観に当たる時間軸から連れてきたあのバーダックの戦闘力は、低く見積もっても魔人ブウクラスには匹敵していた筈だ。

そのバーダックを相手に引き分けたのだから、フリーザという男の異常な底力がなおさら際立つ。この宇宙で最も名の知れた極悪人である彼の傍は、活動の隠れ蓑にするにはうってつけの場所だったのだが……あれが将来ゴールデン化することを思えば、やはりここで始末しておいて正解だったとリボンズヤムチャは改めて自分の計画が正しかったことを再確認した。

そんなリボンズヤムチャは大広間のソファアに腰を下ろした後、この場にいるヤムベイドが五人しかいないことに気づいた。

「リジエネがいらないね」

「あれ？ さっきまでそこにいたんだけど」

セルリジエネがいらない。

セルリジエネ——その正体は、ドクター・ゲロがセルを製作する過程の中で、ヤムチャ・テイエリアーデから採取した細胞の異常性に気づき、その異常性を研究する為に生み出したヤムチャのクローン体である。

オリジナルのヤムチャと特に酷似した容姿を持つ彼だけは、ビッグゲテスター・ヴェーダによって生み出された他のヤムベイドとは異なる出自であり、性質もまた違っていた。

しかし、元少年が企てた本来のヤムチャ計画の中には、彼がドクター・ゲロの手で生まれることも想定されており、自身の計画に含まれていた。そう言う本質的な意味では、彼もまた間違いなく「ヤムベイド」だった。

だがセルリジエネというヤムベイドはビッグゲテスター・ヴェーダによって生まれていないため、生誕した際にリボンズヤムチャによる命令を受けていない。

それ故に彼は野良猫のように自由奔放な性格をしており、リボンズヤムチャが唯一思考を読み取れないヤムベイドだった。

「……なるほど、そういうことか」

彼の危険性にはとづくに気づいていた。

しかし彼の立ち位置があた「セル」に当たるならばと、リボンズヤムチャはこれからの計画に使えろと判断しあえて手元に置いていた

のだ。

しかしフリーザが死んだ今になってこちらが掛けた招集を拒否した彼の魂胆を推測し、リボンズヤムチャは思わず苦笑を浮かべた。

……流石はセル。原作通り、演技と潜伏は上手いようだ。

想定はしていたが、このタイミングで動くとは思わず、リボンズヤムチャは一杯喰わされたなど大広間に浮かぶウインドウ画面を眺めて笑った。

爆発し、消えゆくナメツク星を映していたその画面には、ほんの一筋——キラリと瞬いては画面の端へと飛んでいく、小さな光芒があった。

リボンズヤムチャは、その光を見逃さなかった。

それは消えゆくナメツク星から脱出していく——宇宙船である。

「リボンズ？」

「裏切りが得意な子は、ボクだけじゃなかったってことさ」

ドクター・ゲロ製のヤムベイドが、こちらに従順な筈もない。寧ろこの方がそれらしいだろうと思いつながら、リボンズヤムチャはあえて宇宙船の脱出を見逃してやることにした。

それが一時でも「親」の上を行ってみせた、「子」に対するせめてもの情けというものだろう。

そんなリボンズヤムチャはその宇宙船に乗っているであろうセルリジエネと、おそらく生き返っていたのであろうもう一人のヤムベイドに対して呟いた。

「ボクらを超えられるかいリジエネ？　そして……ヤムチャ・ティエリアーデ」

ヤムチャによる原作の改変。

今この時、新たな変革期が訪れようとしていた。

爆発し、消滅していくナメック星。

炎と化していくその星から飛び出していく一機の宇宙船の中には、総勢20人以上もの人々が敷き詰められていた。その中にはナメック星人たちだけではなく、フリーザとの対決によって意識不明の重体になっていたベジータと、ナッパも一緒である。

詰め込めるだけの人間を可能な限り詰め込んで脱出したつもりだが、それでもあの星に残していった者達のことを思うと心苦しい思いはあった。

そんな思いを胸に抱えながら——ヤムチャ・ティエリアーデは故郷である地球を目指して宇宙船を操縦していた。

「助けたナメック星人はデンデを含め25人。ゲンサクもこのぐらいの人数だったかな？」

「そういうことを言うんじゃない。俺達の生きている世界はゲームでも漫画でもないんだ」

「わかっているよ、ティエリア」

「ヤムチャだ。名前の意味はわからないが、俺はティエリアって名前が似合う雰囲気じゃないだろ」

「そうかい？ 僕は呼びやすくして素敵な名前だと思うけど」

「お前のは呼びにくいんだよ。レジエネ・リジエッタ」

「リジエネ・レジエッタ」

ヤムチャが操縦桿を握る席の隣には、足を組み、背もたれに腰を預

けながら天井を振り仰いでいる青年の姿がある。

まるで双子のようにヤムチャと酷似した顔を持つ彼の名は、セルリジエネ。リボンズヤムチャたちを裏切り、ヤムチャの「偽装死」に貢献した人造人間ヤムベイドだった。

——そう、あの日、彼がリボンズヤムチャに見せつけたヤムチャ・テイエリアーデの死は、彼によって仕組まれたトリックだったのだ。

あの時点からセルリジエネはリボンズヤムチャに対して反旗を翻す気満々であり、逆にヤムチャ・テイエリアーデのことを「味方として」気に掛けていたのである。

溜め息を吐くように眉間を抑えながら、今回の出来事についてセルリジエネが呟いた。

「しかし驚いたよ。リボンズがまさかあんな願い事をするなんてね……もう少し遅かったら、君がトキトキ都から帰ってこれなくなるどころだったよ」

「ああ、この宇宙を隔離してくれて願いだろ？ 正気の願いじゃねえよな。夢もロマンもありやしねえ」

ヤムチャ・テイエリアーデは姿を眩ましたサイヤ人編の間、リボンズヤムチャによって呼び戻されたヤムチャアニューと入れ替わるように「トキトキ都」を訪れていた。

諸事情から事前にタイムパトロールのトランクスのとの接触到に成功していたセルリジエネが、彼にヤムチャを託し、トキトキ都で匿ってもらっていたのだ。

——全ては、リボンズヤムチャのろくでもない計画を阻止するため

に。
そしてヤムチャ・テイエリアーデの力を極限以上まで高める為には、トキトキ都の存在が最適だったのだ。

そんなセルリジエネの狙い通り、トキトキ都で匿われていたヤムチャは目当ての人物と接触し、修行をつけてもらうことに成功した。

その人物とは——老界王神である。

ヤムチャ・テイエリアーデはリボンズヤムチャの目が自分やトキトキ都から離れている間、彼の力で自身の潜在能力を限界以上まで引き出してもらったのだ。

そうしてアルティメットヤムチャとなった彼は、ヤムベイドを超えた真のヤムベイターとなつてこの世界への帰還を果たしたのである。

「新しい力は馴染んだかい？」

「いや、まったく。あつちの老界王神様にも、急いでやってもらったからな……まだ不完全だ」

「じゃあ身勝手の狼牙・兆つてところかな」

「勝手に名づけんなよ」

この宇宙でヤムベイド——いや、リボンズヤムチャの恐ろしい企みを知っており、それに対抗しようとする者は今はまだ彼とセルリジエネだけだ。

だが、必ず阻止してみせる。

元少年が企てた、あまりにも無垢すぎる無茶で危険な計画を。

リボンズヤムチャが歪ませた、野心に満ちた恐ろしい計画を——。

来るべき新たなる戦いへ……希望を胸に、彼らの宇宙船は北の銀河を飛翔していった。

2nd season 「そのヤムチャをヤムチャする」

ヤムチャ再臨

——フリーザが、超サイヤ人に殺された。

リボンズヤムチャによってそう告げられたフリーザの死に、父コルド大王と兄クウラは報復に動いた。尤も、クウラの場合は彼自身のプライドの問題でありフリーザの仇討ちという意識はなかったのだが、彼らは共に地球へ赴き、フリーザを倒したというサイヤ人を殺しに行ったのである。

その際、リボンズヤムチャが事実を捻じ曲げて報告したのは言うまでもない。

正しくはフリーザを殺したのはフリーザ自身であり、彼をそこまで追い込んだサイヤ人とはバーダックのことだ。

しかしリボンズヤムチャは、フリーザの死は全て地球という辺境の惑星に住む孫悟空による仕業だと偽りの情報を与え、彼らを誘導したのである。

そんな二人はリボンズヤムチャの目論見通り地球へ飛び立ち——帰ってくることはなかった。

時はフリーザが死んだ二年後の、エイジ764。

孫悟空という男こそがフリーザを殺したサイヤ人だと偽りの情報を受けて地球を襲ったクウラはその時、本当に超サイヤ人に覚醒してみせた悟空によって太陽へと叩き込まれた。

原作と違ってナメック星に行かなかった悟空だが、彼の戦闘力はナメック星での戦いを経験せずとも原作と同等以上の実力を身につけていたのである。

——と言うのも、地球ではクウラたちが来る前までの間に「ターレス」や「スラッグ」という巨悪たちが立て続けに襲来し、彼らとの死闘を繰り返していく中で悟空たち地球の戦士は原作のナメック星編

に勝るとも劣らない大幅なレベルアップを遂げていたのである。

「いい加減にしろ……この星を滅茶苦茶にしやがって。貴様ら一体いくつ星を壊せば気が済むんだ」

「なにっ!? ぐっー!」

「おめえはもう謝つても許さねえぞ! このクズ野郎!!」

彼ら劇場版悪役キャラたちがそのように、戦闘力の辻褄を合わせるようにことごとく悟空たちの踏み台になっていった裏には、常にリボンズヤムチャたちヤムベイドの暗躍があったことは誰にも知られていない。

そのように悟空たちをある意味助けるような手を打っていたのは、リボンズヤムチャが己の計画の為、原作主人公である孫悟空が原作よりも弱くなるような事態を避けたかったからだ。

故にリボンズヤムチャは、悟空たちがギリギリのところまで困難を切り抜けていくであろうことを計算に入れた上で彼ら劇場版悪役キャラたちを送り込んだ。

仮に悟空が彼らにやられてしまったのなら、所詮はそれまでの存在だったと切り捨てる心積もりでだ。

「フリーザだけではなかった……甘かったのはア!」

フリーザの兄クウラはこの世界において、孫悟空が初めて超サイヤ人に至る覚醒のきっかけになってくれた。

そして劇場版の流れ通り、クウラはかつて赤ん坊のサイヤ人を殺しておかなかった己の甘さを呪いながら、あえなく太陽の熱に溶かされて消えていった。

だが、ここで原作にはない展開が巻き起こる。

それまで一対一で悟空を殺すことに拘っていたクウラの意を汲み、地球の外で自らの宇宙船を漂わせながら静観していたコルド大王が、彼の最期を見届けた後で出陣したのである。

コルドの戦闘力は最終形態のクウラと比べればやや劣るが……クウラとの激戦で力を使い果たし、超サイヤ人の状態が解けてしまった今の悟空に、彼との連戦に耐えうる体力は残っていなかった。

「今の貴様では、私を倒すことなどできんということだ！」

「お父さん！」

「ぐっ……ぐっ……」

卑怯者と罵られようとも、コルド大王は勝つ為ならばフリーザ以上に狡猾な男だった。

もはや成す術のない悟空に対して、彼はその凶腕を振り上げる。

——しかし、その腕が満身創痕の悟空の身体を貫くことはなかった。

横合いから猛スピードで割り込んできた一人の男が、彼の攻撃を阻止し、逆に彼の身体を突き飛ばしたのである。

悟空は自身の前に現れたその男——「亀」と描かれた山吹色の道着の後ろ姿を見て、始めに驚きを、次に歓喜を抱いた。

「ヤムチャ」

——遂に現れたか。

地球の様子をビッグゲテスター・ヴェーダの遠隔ビジョンを介して眺めていたリボンズヤムチャが、微笑みを浮かべながら新たな役者の登場に喜ぶ。

「ヤムチャ・ティエリアーデ」

約四年ぶりに地球へ帰ってきたヤムチャ・ティエリアーデが、再び表舞台に姿を現したのだ。

彼のオリジナルであるリボンズヤムチャと会ったことがあるコルドは、彼の瓜二つの容姿に驚いたものの、即座に別人と見抜き邪魔者を蹴散らそうと拳を振るう。

——しかし、蹴散らされたのはコルドの方だった。

コルドと相對したヤムチャ・ティエリアーデはその内なる気を開放すると、彼に足払いを掛け、体勢を崩した敵に続けざまの連打を浴びせたのである。

「これは……」

「リボンズ、あの力はなーに？」

いつの間にやらリボンズヤムチャの座るソファアーの上に身を乗り

チャの手に掛ければ即座にその自由意志を奪い、肉体をコントロールすることだつて容易である。

それはヤムベイドを超えた力を持つヤムチャヒリングたちヤムベイター、「ヤムチャマイスター」も同様だった。

現にタイムパトロールから脱出させたヤムチャアニューは、リボンズヤムチャがその権限を使うことによって彼女をトランクスの元から引き離したのだから――。

唯一例外な存在は元からビッグゲテスター・ヴェーダによつて生み出されたわけではないセルリジエネ……セル・リジエネ・レジエツタ・ヤムチャと、オリジナルのヤムチャである自分だけだ。

解せない……リボンズヤムチャは数年ぶりに、その表情から余裕を消した。

ヤムチャ・ティエリアーデ――彼はヤムベイドの分際で、ビッグゲテスター・ヴェーダとのリンクを完全に遮断している。

故にヤムベイドの身でありながら、リボンズヤムチャと意識情報を共有することができないのだ。

リボンズヤムチャが彼の生存に気づけなかったのも、それが原因だった。

始めは、彼と同行しているセルリジエネが何らか細工を施したのだと思つていた。

しかし、アレは違う。

リボンズヤムチャは彼の戦う姿を見て、彼に対する認識の齟齬を認める。

ヤムチャ・ティエリアーデ――彼もまた、変革を始めているのだ。

ヤムチャティエリアはヤムベイドとして生まれた自らの本質そのものを超えることによつて、その身をビッグゲテスター・ヴェーダとのリンクから断ち切つたのである。

本質を超える――そこに考え至つて、リボンズヤムチャは彼の身に何があつたのか悟る。

「老界王神の力……？ いや、あの男はまだZソードに封じられている筈……そうか、「トキトキ都の老界王神」なら……」

セルリジエネ——おそらくあのヤムベイドがヤムチャティエリアの死を偽装した後、何らかの方法を使ってあらゆる時間軸から外れた場所である「トキトキ都」へ彼を送り込んだのだろう。

それは丁度、リボンズヤムチャがヤムチャアニューをこちらに呼び戻した頃と同じタイミングで——

「……我慢ならないな」

「リボンズ？」

これは、「神」らしからぬ失態である。

あの時、ほんの少しでもヤムチャアニューの帰還を遅らせておけば、ヤムチャティエリアの生存に気づき即座に始末することができたのだ。

計画を急いだが、ほんの僅かな綻びを生んだようだとリボンズヤムチャは溜め息を吐いてウインドウ画面を見上げた。

——そこでは既に、二人の決着がついていた。

おそらくトキトキ都にいる老界王神によって潜在能力を限界以上まで引き出されたのであろうヤムチャが、這いつくばるコルドの前で無傷で仁王立ちしている。

アルティメットヤムチャとは、言い得て妙な表現だろう。

心なしかその髪型も、後のアルティメット悟飯に似ている気がした。

「ヤムチャ……」

「ああ、わかってる。力の差はわかっただろう？ 荷物まとめて家に帰るんだな！ もう二度と悪さすんじゃないぜ」

「……うっ……ぬうっ……！」

コルドを完膚なきまでに叩きのめしたヤムチャは、彼に慈悲を与えて見逃そうとする。

命を奪うことに拘らないのは、後ろにいる孫悟空の影響か。

しかし、そこはやはりあのフリーザの父親である。

コルド大王は「まあそうなるわよね」と呟くヤムチャヒリングの言葉の示す通り、大人しく帰るフリをした後で振り返り、当たり前のように騙し討ちを仕掛けた。

息子フリーザが辿った最期のように、その手を地面に突っ込み地球ごと全てを吹き飛ばそうとしたのだ。

「……馬鹿野郎が」

ヤムチャは、そんな彼の凶行を許さなかった。

命を無駄にすんじゃないやねえよ……そう呟きながら、彼の身体を今度こそ容赦なく、バラバラに引き裂いていく。

それは予め周囲に展開していたヤムチャの練気弾——「練気狼牙^{ファング}」によるとどめだった。

その殺傷能力は、ヤムチャ自身の戦闘力と比例しており四年前とは比べ物にならない。

まるで歴戦の最強キャラのような佇まいをするヤムチャティエリアの風格を見て、ヤムチャヒリングが「ヒュー、カッコいいじゃないさ！」とはやし立てた。

——だがその直後、彼の姿を映していたウインドウ画面の映像は唐突に途切れた。

「ここいらでお遊びはいい加減にしてもらうぜ、ヤムベイター。いや……リボンズヤムチャー！」

ヤムチャティエリアが画面に向かってそう叫んだ瞬間、暗転し何も映さなくなる。

彼の声が聴こえた瞬間、それまで後ろのソファアークラシック音楽を聴いていたヤムチャリヴァイヴがヘッドホンを外し、ヤムチャブリングとヤムチャデヴァインもまたこちらに振り向いて眉をひそめた。

「リボンズ……あたし、あいつ嫌い」

「奇遇だね、ヒリング。ボクもだよ」

「苛立っているね。僕が行って片付けてこようか？」

「いいや、その必要はないよりヴァイヴ。彼のことは三年後、人造人間編に当たる時期までは泳がせておくよ」

「何故？」

「彼がいた方が、面白いデータが取れそうだからね。ドクター・ゲロも研究が上手く行かなくてストレスが溜まっているみたいだし、上手く行けばボクたちが予定より早期に神を超えられるかもしれない」

ヤムチャテイエリアは今、こちらの監視に気づき「ドクター・ゲロ製」の超小型昆虫型カメラを撃ち落としたのである。

彼はやはりこの四年の間に、あらゆる面で大幅な進化を遂げているらしい。

そんな彼の、中指を突き立てた姿を映像の最後に見て……ビツグゲテスター・ヴェーダへと送られていくヤムベイドたちの思考は一つだった。

『ヤムチャのくせに……』

ここで彼を一斉に取り囲んで袋叩きにするのは簡単だが、それでは計画に支障をきたす恐れがある。

今の彼の力が未知数であることも、こちらが迂闊に動けない理由の一つだ。

尤も、潜在能力を限界以上まで引き出したところで所詮はヤムチャ。今もなお進化を続けているヤムベイターたち「ヤムチャマイスター」には遠く及ばないと、リボンズヤムチャの心中は冷静だった。

ただ、大いに不愉快ではある。そう言った意味では彼が寄越してきた煽りの言葉は、リボンズヤムチャに効いていなくもなかった。

狂気の科学者は機械惑星から提供されたデータを基に新たな傑作を生み出し、仮面の求道者は本部から伝わってきた目新しい情報に喜悅の笑みを浮かべる。

——そうか、アイツもこの姿になってくれたか……

修練を積み上げ、フリーザと相打った四年前よりもさらなる力を身につけた仮面の男の黒髪は今、黄金色に輝き、天を突くように逆立っていた。

超サイヤ人——伝説と謳われたかの戦士は、誇らしきと闘気の二つを宿らせた笑みを溢しながら宇宙船内の通路をカツカツと歩いていく。

——アイツの父親で、こんなに嬉しかったことはない。今の俺には、もはや何も残っていない。

守るべき愛する妻は母星と共に死に絶え、怨敵であるフリーザもこの世から去った。

愛も憎しみも失った彼に残っているのはもはや、その血が刻み続けてきた「宿命」だけだ。

仮面の男——いつしか周りから「ミスター・グドー」と呼ばれるようになっていた彼は、次なる目的地を青の星へと定める。

誰かに命じられたわけでもなく、ただ……己の意志で。

——死んだと思っていたヤムチャが生きていた。
カメハウスに集まった一同が、全員で彼の帰還を温かく迎え入れる。

悟空やクリリン、天津飯たち地球の戦士たちは大いに喜び、ブルマもまた涙を流して喜んでいたものだ。

中でも最も喜んでいたのは、ヤムチャと誰よりも長い付き合いであるプーアルだろう。

四年ぶりに再会した彼はその感情に任せながら抱き着くと、ヤム

チャはそんな彼の質感のいい毛皮をよしよしと撫でつけた。

「ヤムチャ様、ずっと会いたかったです……！」

「置いてきぼりにして悪かったな、プーアル。みんなにも黙っててくれて助かった……ありがとな」

「黙っててくれた？ プーアル、あんたもしかして、ヤムチャが生きてたこと知ってたの!？」

「あ……」

実のところ、悟空を始めヤムチャが生存していたという事実を信じていた者は多い。というよりも、遺体を確認していなかった一同は誰もがそう心に信じたかったのだ。

だがその生存を「知っていた」人物となると、この場にはプーアル一人しかいなかった。

——そう、プーアルだけは知っていたのだ。

ヤムチャが……ヤムチャという男が、第21回天下一武道会が開催するあの日からヤムチャ・テイエリアーデという「ヤムベイド」と入れ替わっていたことを。

ヤムチャが本当は、人間ではなかったという衝撃の事実を。

そして……オリジナルのヤムチャが今、リボンズという人格を宿し、とてつもなく大きな野望を抱いているということ。

セルリジエネと出会い、全てを思い出したヤムチャ・テイエリアーデによって、プーアルにだけは全てを教えられていたのである。

今まで。

誰にも言わないように口止めされながら。

尤も、彼に口止めするように言ったのはヤムチャ・テイエリアーデではなく、彼の協力者であるもう一人の「ヤムチャ」だ。

「僕がそう頼んだんだ。どこに「彼」の目が潜んでいるかわからないからね」

「っ……あ……！」

「ヤムチャさんと、同じ顔だ……」

気配を消しながらその場に現れたもう一人のヤムチャ、セルリジエネの姿に一同が驚く。

超サイヤ人のように逆立った髪型——原作で言うところの「人造人間編」の髪型をしているヤムチャティエリアと区別するように、彼の髪型はロン毛時代のヤムチャをしていた。

その上、さらにわかりやすいように伊達メガネを掛けてイメージチェンジをしている。しかし彼がヤムチャと同じ顔をしていることは、ヤムチャとの付き合いの長い者たちには即座に気づかれてしまった。

唐突に現れた彼の存在を疑うように見やる一同の前に出て、ヤムチャが語る。

「紹介しよう。コイツはセルリジエネ。俺のなんというか……一応、兄弟みたいなもんか？」

「よろしくね、Z戦士のみんな」

「ゼット戦士？」

「ああ、そうか。作中じゃそんな呼ばれ方はされていなかったね」

人当たりの良さそうな、ブルマ好みの笑みを浮かべるセルリジエネから飛び出した妙なフレーズに、彼らは一様に首を傾げた。

その後ろで、腕を組んで佇んでいたピッコロがヤムチャに問い掛けた。

「……何か俺達に、とんでもないことを隠しているようだな。話せ」

「ああ、順を追って説明するよ」

ヤムチャとは天下一武道会で敗れた因縁のあるピッコロが、しかしあの時とは違う目でヤムチャを見据える。

度々訪れた劇場版悪役キャラたちの襲来によって、既に彼の性格はネイルとの同化がなくなるとも原作のようにいい方向へと変わっていた。

そんな彼も含めて、ヤムチャは全員に語った。

今の彼らになれば、安心して話すことができる——確固たる信頼を持った上で、全てを明かすことに決めたのである。

「この世界は、試されている……奴らヤムベイター——リボンズヤムチャによって」

ヤムチャドライブ

悟空たちは衝撃の真実を知ることとなった。

ヤムチャが本当は「ヤムチャ・テイエリアーデ」という名の人造人間、ヤムベイドであること。

その生みの親であるオリジナルヤムチャ、「リボンズヤムチャ」によってこの世界が狙われているということ。

そして、リボンズヤムチャがかつて生きていた外の世界では、この世界が「ドラゴンボール」という物語であり、創作だったということ。

いずれの話語るにも、ヤムチャにとって並大抵の勇氣ではなかった話だ。

自分が何者であるのか、普通の人間ではなかったこと。ヤムチャ自身は折り合いをつけた上でここへ戻ってきた身だが、彼らにどう受け止めてもらえるかは不安だったのだ。

ただ……幸にもここにいる人間は、それらのことを気にするような者たちではなかった。

「ふーん、色んな世界があるんだなあ」

——とは、話を聞き終わった孫悟空が開口一番に放った言葉だ。

ヤムチャの話を聞いて、その内容をしっかりと理解しておきながらも、主人公である悟空を含め彼らの反応はどこまでも軽いものだった。

「まあ、そんなことはどうでもいいさ。それよりリボンズヤムチャつてのが問題なんだろう？ 強えんかそいつら？」

「どうでも良くなんかないでしょ！ あんた相変わらず軽いわね。主人公のくせに」

「じゃあブルマは気にしてんのか？」

「それは気にするに……あれ？ うーん、言われてみると割とどうでもいいわね。物語なんて言われてもピンと来ないし……あつ！ 女優さんになったと思えばちよつと嬉しいかも！」

「はは……悟空やヤムチャさんは凄そうだけど、俺の活躍とかしよば

「そうだな」

「いや、そんなことはないよ？ 孫悟空の一番の仲間だったクリリンは、この中でも人気キャラの一人だった」

「わし！ わしはどうだったんじや？」

「亀仙人は悟空たちに最後まで影響を与えていた、いい師匠キャラだったよ」

「ただのスケベ爺さんじゃなかったのね」

「この世界が物語の世界であることを聞いて、彼らは思い思いに自らのポジションに対して口を開く。」

「言われてみれば創作の世界と言われても、確かに実感を持つことは難しいかもしれない。」

「ヤムチャ自身、ヤムベイドとして与えられたこの「メタ知識」を思い出した後も、彼らのことを物語のキャラクターだという認識で見たことは一度もなかった。」

「彼らはどこまでいっても自分が共に競い合ってきた仲間であり、ライバルである——そこに二次元や三次元などという垣根はどこにもなかったのだ。」

「だが……」

「な、なあ、お前ら……」

「どうしたヤムチャ？」

「俺、今すっげえ勇気出して話したんだけどさ……俺のこと、もっとう、ないのか？」

「言い淀むヤムチャの心には、自分自身の真実を知った時から抱えていた迷いがあった。」

「自分がリボンズヤムチャの手でビッグゲテスター・ヴェーダという機械惑星によって作り出され、今まで本物のヤムチャとして成り代わっていた人造人間であることを。」

「ヤムチャは四年前、セルリジエネに対して自分がヤムチャであると頑なに言い切った。あの言葉は、確かに本当の気持ちだ。」

「しかしそれでも……今まで自分の周りにいた仲間たちがどう思うのかと、ずっと不安だったのかもしれない。」

そんなヤムチャの心情を、一瞬だけ察したように悟空が眉を動かした。

普段は飄々としているように見えて、こう言った時には聡いところがある彼だ。そんな悟空が頭を掻きながら、困ったように笑いながら言い返した。

「って言われても、ヤムチャはヤムチャだろ？ なあ？」

「もちろんよ。そのヤムベイド？ とか言うのでも、今まで私たちと付き合ってきたヤムチャはあんたなんだし、何か変わるわけじゃないわよね。……寧ろそういう、ちよつと普通じゃない人って私好みよ？」

「ブルマ……」

どこまでも純粋な目でそう返す悟空に、追従するように言い放つブルマ。

特に長い付き合いである彼らの後ろではウーロンもうんうんと頷いており、彼らの後に天津飯が続いた。

「ここがお前の言う物語の世界だろうと、誰に見られていようと、俺たちが今まで積み重ねてきたものは何一つ変わりません。ヤムチャ、お前が積み重ねてきたものもな」

「天津飯……」

「そうじゃな。お前も悟空と同じじゃ。生まれがどうだろうと、今は誰よりも立派な地球人なんじゃ。あまり気にするでない」

「まあ、ここに居るのは俺以外普通じゃない人ばっかつすからねえ」

「そうですか？ クリリンさんもお鼻のところとか変わっていると思うんですけど……」

「馬鹿、生意気言うんじゃない」

「みんな……」

誰一人、だ。

彼らは誰一人として、ヤムチャの正体を知ったところで拒絶する者はいなかった。

ピッコロまでもが「ふん」と何かを言いたげな顔でそっぽを向いたところを見て、ヤムチャの胸から強く熱いものが込み上がってきた。

「ほら、だから言ったじゃないですかヤムチャ様」

笑顔で寄り添うように、プーアルが言う。

ヤムベイド——ヤムチャ・ティエリアーデではない。

ここにいる皆が、彼のことを「ヤムチャ」として受け入れたのだ。

「……そうだな、プーアル。こいつらは、そういう連中だった」

これでは、一人悩んでいたのが馬鹿みたいだ。

そんな己の弱さ、ヘタレさ加減に苦笑しながら「ヤムチャ」がプーアルの頭を撫でる。そんな彼の姿を、セルリジエネが微笑ましそうに眺めていた。

「ここで俺は変わる……」

この、普通じゃない奴らの中で。

「俺自身が、ヤムチャになる……」

ヤムチャでいい。

ヤムチャでいたい。

そんな己の心を真っ直ぐに肯定してくれた皆の思いを受けて、ヤムチャ・ティエリアーデはこの時、ヤムチャになった。

ゲンサクではなく、二次元でもなく——俺とヤムチャは変わる。

そう在りたいと、ヤムチャは誓った。

どこか憑き物が落ちたような顔で微笑むヤムチャに、同門の兄弟子であり弟分であるクリリンが訊ねた。

「そう言えば、ヤムチャさんはどうだったんですか？ その……」ドラ

ゴンボール」のヤムチャさんは」

「俺か？」

「きつと美味しいところを持つていくキャラだったんだらうなあ、俺と違って」

「はは、そんなことはないさ」

まさかクリリンからゲンサクのヤムチャについて問われるとは思わず、ヤムチャはつい苦笑を浮かべてしまう。

その様子を見て同じく原作知識を持つセルリジエネが、さてどう答える？とでも言わんばかりに好奇心旺盛な目を覗かせていた。

あつ、私もそれ気になる！と、興味津々に話に入ってきたのはブル

まだ。

そんな彼らの前で、ヤムチャは気恥ずかしい思いになりながら答えた。

「俺はな……」

そしてヤムチャは——ヤムチャを語った。

ヤムチャによって明かされた新たな脅威、ヤムベイド。

その親玉であるリボンズヤムチャという男は、かつてこの世界を「物語」として観測していた違う次元の存在だった。

そんな彼は自身がヤムチャというキャラクターに生まれた生の中である野望を抱く。

——それは即ち、彼の観測していた「物語」を自分色に染め上げるというものだった。

上位次元から来た存在である自分は絶対者であり、支配者だ。

そういった傲慢な思想を抱いた彼は手始めにこの宇宙の神「界王神」を殺害し、宇宙の支配者であるフリーザ一族を謀殺してみせた。彼は自分こそが神となり、この世界を支配しようとしているのだ。今の段階では、犠牲者はまだ少ないかもしれない。

しかし「界王神を殺した」という話がヤムチャから飛び出してきた時点で、宮殿から話を聞いていた地球の神様や、界王星から様子を窺っていた界王様が過呼吸になったほどである。

それが事実なら、リボンズヤムチャという者はこの宇宙にとってとつもない災厄をもたらしかねない存在だと。界王神殺しを企てた

時点で、彼らが警戒するには十分な相手だった。

「奴の目的は多分……悟空、お前だ」

「ん、オラか？」

「奴はどこまでいっても、この世界を物語の世界としか見ていない。だからまずはゲンサクの流れを変える為に、物語の主人公だったお前の人生を捻じ曲げようとする筈だ」

「……そうすつと、どうなるんだ？」

ヤムベイドとして「ヤムチャ計画」の全貌を知るヤムチャは、次に起こすであろうリボンズヤムチャの行動を予測する。

そして周囲にスパイカメラがないことを確認した上で、彼は言った。

「殺しに来るだろうな。多分、「人造人間編」が始まる三年後あたりに」
リボンズヤムチャは間違いなく悟空を殺しに来る。彼の目的がゲンサクを自分色に染め上げることならば、どうしても主人公である孫悟空の存在が邪魔になるからだ。

ここにいる者たちにはゲンサクだの登場人物だのということは一切ピンと来ていない様子だが、自らを上位次元の存在であると認識しているリボンズヤムチャはそういった偏った見方でしか人を見れない男だった。

穏やかではないその話を聞いて、しかし悟空はサイヤ人らしい好戦的な笑みを浮かべる。だが、話に聞きリボンズヤムチャの「今更な」行動を怪訝に思ったのか、彼は至極尤もな疑問を投げかけた。

「オラの命を狙ってくるってことか……ん？　なら、なんで今までそうしなかったんだ？　ヤムベイドって奴がみんなおめえぐらい強えなら、子供の頃とかに襲われたらひとたまりもなかったんじゃないやねえか？」

話に聞くような狡猾で頭の回る人間であれば、わざわざ悟空が超サイヤ人になった今のタイミングで殺しに来るよりも、もっとやりやすいタイミングはいくらでもあった筈だ。

RPGのラスボスが、強くなった主人公としか戦わないのとは道理が違う。殺害に打って出るには粗末な計画に思えるそのやり方を不

思議がる彼に、ヤムチャは言い辛そうに間を空けながら答えた。

「……奴は、お前をかませ犬にしようとしているんだ」

「かませいぬ？」

おそらくは、それこそがリボンズヤムチャの計画の根幹なのだろう。

そう思いながら、呆れたようにヤムチャが語る。

「さっき言ったけどな……ゲンサクでのヤムチャは、あんまりいい役回りじゃなかったんだ。よく新しい敵に倒されたり、敵の強さを引き立てる損なやられ役だったからな」

「おめえを見てると信じられねえけど……それが、どうした？」

「……リボンズヤムチャはあのベジータと同じか、それ以上にプライドの高い奴だ。だからアイツは、自分がそんな「かませ犬」の立場になるのが嫌で……逆に、そのかませ犬に引き立てられる立場だったお前が許せないんだ」

かませ犬とは、弱すぎる者では務まらない役回りである。

そして引き立て役とは、ある程度強くなくては務まらない。

リボンズヤムチャが今までであえて悟空たちに攻撃を仕掛けてこなかったのは、弱すぎる相手では踏み台にもならないというセル戦での超ベジータにも似た理由だった。

しかし原作の超ベジータと決定的に違うのは、リボンズヤムチャの場合はそれが「主人公」という悟空の立場に対するコンプレックスを拗らせた結果であるということだ。

悟空をかませ犬にして己の計画を果たそうとするのは、彼なりの意趣返しのもりなのだろう。彼を近くで監視していたことのあるセルリジエネが、ヤムチャの説明を引き継ぐように補足した。

「主人公である君を丁度いい強さの「かませ犬」に仕立て上げた後、そんな君を踏み台にして高みへと昇りつめていく。それが、彼の思惑なんだろうね」

「んー、よくわかんねえなあ」

「俺にだってわかんねえよ、あいつの考えることは。ただ、ここにいるみんながまだ攻撃されていないのは、あえて見逃されているようなも

んだと思っいいい」

あるいはある程度強くなった悟空たちと戦うことによって、リボンズヤムチャには何か己をより強くするための算段をつけているのかもしれない。おそらくは、その線も高いだろう。

オリジナルヤムチャに生まれ変わった少年も、厄介な人格を作ってくれたもんだとヤムチャは苦虫を噛み潰した。

「……気に入らんな」

まるで、自分たちが彼の敷いたレールを渡らされているような……そんな感覚を抱いたのだろう。それまで黙ってヤムチャの話を聞いていたピッコロが、嫌悪感を露わに呟いた。

その言葉に、ヤムチャが「初めて気が合ったな」と笑みを返した。

「だろう？ 俺はムカつくからぶっ飛ばしてやろうと思ってるんだが……あんたもこの話に乗らないか、ピッコロ？」

「いいだろう。俺はこの地球の神のように、高いところから見下ろしている輩が嫌いなんだな」

「オラもやるぜ、ヤムチャ。要するにそのリボなんとかって奴は、オラが強くなるのをわざわざ待っててくれるぐらい自信があるってことだろ？ オラを殺しに来るってんなら、受けて立つぞ」

「ほんつとうに相変わらずだな、お前は。頼もしい奴だよ」

「ってことでヤムチャ、仙豆も食ったし、今からいっちょやんねえか？

さらに強くなったおめえを見てからよ、ワクワクしてんだ！」

「ああ、久しぶりにやるか。俺も超サイヤ人になったお前にどこまで食い下がるのか、試してみたかったからな！」

「呆れた……もう日が落ちるつてのに、あんたらまだやるわけ？ ヤムチャも久しぶりに会った彼女には、もっと話すことあるでしょ！」

「あ、あれ？ 俺たちって別に付き合ってますんでしたよねっ!？」

「……ふん、いいわよ。あんたなんかよりイイ男見つけてやるんだから」

ヤムチャが真実を語った後も、彼らは至って平常運転だった一コマである。

それからの三年、地球はヤムチャの仮説通り、しばらく平和な時が続いた。

その間、原作の流れと決定的に違う展開が幾度となく訪れたこともあったが……その全てにはやはり、いずれもヤムチャを含むヤムベイドたちが起こした行動が関わっていた。

相違点1、「ナツパとベジータ」。

サイヤ人編を生き抜いた後、再び上司と部下の立場に戻りナメック星で暗躍していた二人。

ナメック星でのベジータは概ね原作通りの動きをしていたが、本来存在しないナツパは星を訪れていないクリリンと悟飯の代役をするような立ち回りでベジータを支援していた。

ただし、悟空がナメック星に来なかったことが影響し、彼らがギニュー特戦隊の面々を突破することは叶わなかった。原作通りグルドを瞬殺するところまではいけたのだが、やはりリクームが鬼門だったのだ。

尻尾を残していたナツパが大猿となることで、一時はどうにか食い下がることのできた二人だが、数人がかりとあっては分が悪く、二人はせっかくな手に入れたドラゴンボールを全て持つていかれることとなった。

ただ、ベジータもナツパも純粹エリートサイヤ人は伊達ではなかった。命からがらに特戦隊の目を盗み、辛くも生還することに成功する。

しかし逃走の最中、上空で繰り広げられるバーダック対フリーザの異次元の死闘を目にして力尽き意識を失ったのが、二人が過ごしたナメック星編の最後だった。

——その後、二人はナメック星の様子を見に来ていたヤムチャ・ティエリアーデに拾われ、同じく救出されていたナメック星人の生き残りと共に彼の宇宙船で地球へ向かうことになった。

しかし爆発するナメック星を脱出した後、ベジータとヤムチャだけは途中で宇宙船を降りることとなった。

始めはベジータが言った「地球人やナメック星人などと同じ船に乗ってられるか!」というわがままもといプライドたつての要望だったのだが、それを聞いたヤムチャが「お前が降りるなら俺も降りるわ」と言い、二人は地球の前に立ち寄った「ヤードラット星」で途中下車したのである。

残ったセルリジエネとナメック星人たち、そしてナツパは一足先に地球へと向かい、無事にたどり着いたのが一年前のことだった。

フリーザが死んでからクウラたちが地球を襲うまでの空白期間、ヤムチャはヤードラット星でベジータと修行していたのである。

ヤムチャがこれを語った時、「今のが一番おどれえた!」と返したのが悟空である。

「だ、大丈夫だったんですか? あのベジータと一緒にいたなんて……って言うか、リジエネさんは前から地球にいたんですね」

「僕は普段から「気」を消しているからね。君たちが相手でも、そうそう見つかるへまはしないさ」

ベジータの恐ろしさを知るクリリンや悟飯などは、「こいつマジか……」とでも言いたげな目でヤムチャを見つめていた。

そしてナメック星人たちが地球でひっそりと暮らしていたことは、ピッコロと悟飯だけは気づいていたようであり、既に彼らと会っていたらしい。

尤もヤムチャがそれに一枚噛んでいたことまでは、聞かされていなかったようだが。

「この前友達になったんです、デンデくんって言うんですけど」

「へえ、それは知らなかったなあ。今度会ってもいいか?」

「うん! みんないい人ですよ!」

後に地球の神となるデンデとのファーストコンタクトは、地球で行われることとなった。ドドリアに殺されずに済んだのは、その時の彼がデンデではなく「気」を消していなかったナツパの存在に注意が向いていたからである。

デンデを含むナメック星人たちの生き残りは辺境の場所に自分たちで村を作って暮らしているらしく、ベジータはヤムチャと共にヤードラット星で修行した後、今は他所の星でフリーザ軍残党を潰し回っているらしい。

ならば、ナツパはどうしているのか？ ヤムチャは彼を相手にした結果、餃子が死ぬことになったあのサイヤ人も地球にいるのかと某日天津飯に問い詰められ、セルリジエネが答えた。

「彼はもう、この地球で暴れ回ることはないんじゃないかな？」
「なんだと……？」

いつの間にかブルマの家に居座っていたセルリジエネが、ソファアの上で子猫を撫でながらナツパの近況を語る。

ナツパは確かに地球にいる。

しかし彼は、既に彼らの知るナツパではなかった。

「ナツパさん、今日もたくましいわねえ」

「ほんと、相変わらずいい筋肉だわ。家のお店で働かない？」

ヤムチャとセルリジエネによる案内の下、天津飯とクリリンがナツパのいる場所へと足を運ぶと、そこには——いた。

田舎町の商店街で、恰幅の良いおばちゃんたちと談笑しているサイヤ人の姿がそこにあった。

「うちのガキ共が早く買ってこいってうるさいですからねえ、すみません。がそろそろお暇させてもらいます」

「あら！ それは呼び止めてごめんなさいね」

「いえいえ、俺もつい調子に乗っちゃまって話し込んじゃって！」

「まあ、お茶目さん！」

……えっ、あれナツパ？ ナツパナンデ？ ただの感じのいいおつちちゃんじゃねえか！

農夫の格好をしており、何の違和感もなく田舎の商店街に溶け込んでいるナツパの姿を見つけた時、天津飯たちは口をあぐりとさせて硬直していた。

——そう、ナメック星から人知れず地球に降り立っていたナツパは、何故かものすごく穏やかになっていたのだ。

「どうやら彼は、ナメック星での戦いですっかり心を折られてしまっ
たらしい」

ベジータに見捨てられ、消されそうになったところを下級戦士の力
カロットに助けられた。

その後はナメック星のドラゴンボールを手に入れる為に、半ば強制的に再びベジータと組むことになった。

しかし二人で訪れたナメック星は苦難の連続であり、ザーボンやギ
ニュー特戦隊との対峙では何度となく殺されかけた。

あまりにも惨めな戦い。

逃げることしか出来ない哀れな自分。

その時点でもはや、サイヤ人のエリート戦士として積み重ねてきた
彼の自信は粉々である。

どうにか逃げ果せ、命だけは助かることができた。しかし、そこで
彼が見たのが……

伝説の超サイヤ人と、自分たちが打倒を掲げていたフリーザによる
異次元の激突である。

自分が滅多打ちにされたギニュー特戦隊すらも足元に及ばない、あ
まりにも圧倒的な力のぶつかり合いだった。

薄れゆく意識の中、微かに目を開けていたベジータなどは伝説の戦
士の姿に死の恐怖と決定的な挫折を感じ、涙すら流していた。

だが涙を流すことができたベジータはまだ、強い心を持っていた。
同じく彼らの姿を見たナツパは——何もかも諦めてしまったのだ
から。

——もういいや。こんな化け物がいる宇宙で、戦闘民族なんて恥ず
かしくてやってられるかと——。

より圧倒的な存在を目にした彼は己の矮小さを思い知り、ポツキリ

と心が折れてしまったのである。

ナツパは確かに生き残った。しかし、サイヤ人としてのナツパは間違いなく死んでしまったのだろう。

心が折れてしまった今のナツパには、再び地球を訪れたところでもはや暴れ回る気はなかった。

彼はナメック星でベジータから教えられた「気」のコントロールでギリギリまで戦闘力を抑えながら、ひっそりと寿命を全うすることにしたのである。

そんな彼の年齢も今では還暦に近く、その背中からは人生をやり切ったような男の哀愁が漂っていた。

「……どう言えばいいんだろうな、この気持ちは」

「今なら餃子の仇が討てるが、どうする天津飯？」

「……虚しい。虚しいだけだ。死んだ奴を殺すことなど、餃子も望まんだろう」

「そうか……良い奴だな、お前」

「ふっ、今の奴を倒すのは、武道家の誇りに反する。それだけだ」

変わり果てたナツパの姿を見た天津飯は、そう言っただけで彼に対する仇討ちがもはや意味をなさなくなったことを悟り、複雑そうな顔で溜め息を吐いた。

決して恨みがなくなつたわけではないが、武道家の誇りに忠実な性格が表れた姿だった。

——しかしこのナツパ、とんでもないところで「原作」と関係していた。

「おう！ 帰ったぞラピス、ラズリ！」

「遅いんだよハゲ！」

「おいおい、今日がいつなのかわかってるのかよ」

「がはは、すまんすまん！」

ナツパの後をつけてみると、彼が帰宅した一軒家からは見目麗しい双子の少年たちが出迎えてきた。

その内、姉と思わしき口の悪い金髪美少女にはクリリンが思わず一目惚れする一幕があったが、そこは運命的なものなのかもしれない。

相違点その2、「人造人間17号と18号がドクター・ゲロに改造されなかった」。

17号はラピス、18号はラズリという名前の生身の人間として、二人とも人造人間になることなく平和に暮らしていたのである。

そんな二人が住んでいる家の中へ迎えられたナツパの姿は、まるで普通の気のいい父親のようだった。

もしもゲンサクのように改造されてしまうのなら……と双子の行く末を危惧していたヤムチャであったが、どういうわけか奇妙な形で杞憂に終わった瞬間である。

「こういうことに驚いてしまうあたり、ある意味ゲンサクって奴に拘っているのは、俺たちの方なのかもしれない……」
「それは……どうだろうね」

——流石にこればかりはリボンズヤムチャにとっても計算外だったのではないか、とはヤムチャとセルリジエネの共通の認識だった。

しかし、これならば未来からトランクスが来ないわけだと納得し、安堵の息をついた。

そして最後の相違点3、「悟空が心臓病にならなかった」。

原作ではウイルス性の心臓病を患い、トランクスの未来では死に至ることとなった悲劇の出来事。

そのトランクスが未来から来なかったにも関わらず、この世界では心臓病のしの字さえ出てこなかった。

どうにも悟空が原作中で患うことになった心臓病はナメツク星という慣れない環境で貰ってきたウイルスが元だったらしく、ナメツク星に行くことすらなかったこの世界では彼が病気になる原因自体がなくなっていたようだ。

それもまた彼をかませ犬にする為にリボンズヤムチャが敷いたレールの一部だったのかは定かではないが、彼が病気になるのならそれに越したことはないだろう。

念の為にトキトキ都から持って来ていた特効薬が無駄になったなと、嬉しい誤算にヤムチャは苦笑した。

そんな大きな三つの相違点を抱えながら、彼らは三年の時を過ごした。

そして、予想通りリボンズヤムチャが——動いた。

最初に被害を受けたのは、北の都だった。

17号と18号が誕生していない今、町を襲ったのは彼らではない。

ならば19号と20号ことドクター・ゲロか、とヤムチャたちが警戒しながら向かうと——そこには三体の人造人間の姿があった。

「くそっ、ヤムベイドの仕業か!」

人造人間13号、14号、15号である。

いずれも劇場版ドラゴンボールZ「極限バトル!! 三大超サイヤ人」に登場したドクター・ゲロの人造人間だった。

ヤムチャはセルリジエネと共に、この三年の間でドクター・ゲロの搜索も並行して行っていた。しかし、原作で彼の隠れ家があったと思わしき場所は既に引き払われた後であり、もぬけの殻だったのだ。

おそらくは彼の科学力に目をつけたリボンズヤムチャが、彼に何かを吹き込んだか……あるいはその身を匿ったのだろう。

「ヤムチャ、こいつらとんでもなく強えぞ!」

「わかってる!」

三体の人造人間はやはり悟空を狙い、その命を奪おうとしていた。

ヤムチャから事前に何かが起こることを伝えられていた地球の戦士たちは即座に打って出たものの、凄まじい戦闘力を持つ彼らを相手

に対抗できるのは悟空とヤムチャだけだった。

原作のようにネイルと同化していないピッコロでは、彼らの戦いについていけず真つ先にやられてしまう形となった。それでも登場する時だけはきっちり悟飯を助けていたあたり、いぶし銀的な活躍は光っていたが。

「ねえ！ あんたは戦わないの!?!」

「僕は戦闘タイプのヤムベイドじゃないからね」

「なによそれ!」

「というか、ティエリア……ヤムチャに止められているんだよね」

「ヤムチャに? どういうこと……?」

セルリジエネはどういうわけか、彼らの戦いを傍観するだけで戦おうとしなかった。

そんな彼の見つめる戦場の中で、悟空とヤムチャは三対二の戦いで劣勢に追い込まれていった。

——しかしその戦いは、直後に三対三となる。

13号との間で悟空を挟み撃ちにしようとしていた14号の突進を、突如として現れたもう一人の戦士が蹴り飛ばして叩き落したのである。

「おめえは……っ」

「来たのか……!」

思いがけない男の登場に驚く悟空と、喜びに頬を緩めるヤムチャ。そんな二人の視線を受けながら、腕を組みながら地に下りた「M」の額が黄金に染まった。

「なんてザマだカカロット、ヤムチャ! 貴様らを倒すのはこの俺だということをお忘れか!」

——待望のベジータ登場である。

ヤードラット星でヤムチャと修行し、その後フリーザ軍の残党狩りを行っていた彼は新たな力——「超サイヤ人」となった自らの力を持って二人を倒す為に、「瞬間移動」で地球にやって来たのである。

そう、彼はヤードラット星での修行によって、原作では覚えていなかった「瞬間移動」をその身に引っ提げて復活したのである。

そして地球での屈辱とナメック星での屈辱、ヤムチャとの修行で味わわれた屈辱から発生した「自分への怒り」で目覚めたのである。超サイヤ人に。

「お前はベジータか。以前とはデータが違うな」

「邪魔な奴らがいるな。まずは貴様らから片付けてやる！」

この時地球に来た目的はあくまでも悟空とヤムチャの抹殺だったと語るベジータだが、そこに人造人間という邪魔者がいたことで三人は一時的に共闘戦線を組むこととなった。

「激突!! 三大超サイヤ人」ならぬ、「鮮烈!! 二大超サイヤ人＋ヤムチャ」である。

成り行きとは言えベジータという心強い味方を得たことで、三人は三体の人造人間を圧していき、遂に14号と15号を破壊することに成功した。

しかし、本当の戦いはそこからだった。

「なっ……ガラクタ共が合体しやがった！」

「くそー！ あのチップを壊せなかつたか！」

破壊された14号と15号のコンピューターチップを吸収することで、人造人間13号が合体13号となり爆発的に戦闘能力を上昇させたのである。

その強さはまさに、原作劇場版通りの圧倒ぶりだった。

「コイツは……想像以上にやべえな。リボンスってのはコイツより強えのか？」

「……眼中にないぐらいにはな。コイツだって、奴にとっては使い捨ての戦力に過ぎないだろう」

「はは……俺たちは、とんでもねえ奴を敵にしちまつてるみてえだな」「まったく、だな……」

超サイヤ人級のパワーで殴ってもビクともしない合体13号の強さに、悟空とヤムチャが喝いた笑いを漏らしながら悪態をつく。

だが二人とも、まだ勝算がないわけではなかった。

「悟空、元気玉だ」

「……ああ、オラもそう考えてたところだ。時間稼ぎ、頼めるか？」

元氣玉である。

原作劇場版において合体13号という敵は、悟空が元氣玉を作り、それを超サイヤ人の身体に吸収することで限界突破した力で倒した相手である。ならばそれと同じことをすれば勝てるのではないかとヤムチャは踏んでいた。

ただ、非情な人造人間がそれを大人しく待ってくれる筈もない。元氣玉を作り始めた悟空を見るなり、彼は唸りを上げて襲い掛かってきた。

「はああっー！」

そんな人造人間から悟空を守る為に、ヤムチャが立ち塞がり、身体中に「氣」を張り巡らす。

トキトキ都での修行で身につけた力。老界王神から引き出してもらった力。その二つを余すことなく引き出し、ヤムチャは急迫してくる敵の姿を見据える。

「持ってくれ、ヤムチャ……！」

自分自身にそう言い聞かせながら、ヤムチャは狼牙風風拳の構えを取る。

皮肉なものだ……自分こそがヤムチャだと言い張ったくせして、リボンズヤムチャが作ってくれたメタルヤムチャの肉体性能でなければこうして悟空たちと並び立つことができないのは。

矛盾している。

ああ、俺という人間は酷く矛盾しているんだ。そう自嘲しながら、ヤムチャは目を瞑る。

しかし、今はそれでも良かった。

この力で、悟空たちを救うことができるのなら。

誰にも言ったことはないが、ヤムチャは自分がヤムベイドで良かったと思いはじめた。

ヤムベイドで良かったと思っている自分が、ヤムベイドと敵対して生みの親に逆らおうとしているのだ。それは原作のヤムチャよりも遙かに惨めで、滑稽な姿だろう。

だが、ヤムチャは選んだ。

ここにしていることを。

自分自身が、ヤムチャとなることを。

ヤムチャだ。

俺が、ヤムチャだ。

「ここには、悟空と……ベジータと……!」

原作では終ぞサイヤ人である二人と肩を並べることのなかったヤムチャ。知らず知らずのうちにフェードアウトしていくヘタレの代名詞だった彼。

そんな、自分自身に植え付けられたヤムベイドとしてのメタ知識を見て、ヤムチャは薄く笑う。

わかるような気がする——少年がりボンズヤムチャという人格を生み、リボンズヤムチャがヤムベイドを作ったわけが。

彼らはきつと、彼らなりに求め続けていたのだろう。

この存在に宿る可能性を——ヤムチャという名の狼けものを。

「ヤムチャ俺がいるツ!!」

吹き荒れるヤムチャの鬨気が紅蓮に輝き、彼の潜在エネルギーがさらに膨張して広がっていく。

界王拳——それは、ヤムチャが三年の間で悟空から教えてもらった、界王様の奥義だった。

悟空ほど緻密な「気」のコントロールが得意ではないヤムチャのそれはまだ未完成であり、ぶつつけ本番もいところの挑戦である。

だが、こうでもしなければ超サイヤ人を超える相手には太刀打ちできない。それが今のヤムチャの限界だった。

まだ老界王神に引き出してもらった力さえも、使いこなせていない身なのだ。その状態の身体で不完全な界王拳を発動するのは、動きの悪い車のエンジンにニトロ口をぶち込むが如く無謀な一手だった。

——しかし、ヤムチャは成功した。

紅蓮に変わり、限界を超えて上昇していくヤムチャの「気」は、二倍三倍に留まらずさらに増大していき——

——地球の空が、ヤムチヤの光に包まれた。

ヤムチャと孫悟空

その力は、明らかに本来のヤムベイドが持ち得る戦闘力を超えていた。

スパイカメラを通して戦いの様子を眺めていたリボンズヤムチャが、思わず立ち上がって目を見開いたほどだ。

老界王神の潜在能力開放と、界王の界王拳。神に由来する力同士を掛け合わせることで、これほどのパワーを生み出すことになるとは、リボンズヤムチャをしても予想外だったのである。

——名付けるならば、「ヤムチャドライブ」と呼ぶべきか。

潜在能力の解放も界王拳も、ヤムチャには使いこなすことができない。ならば逆転の発想だ。その二つの技を50%ずつ掛け合わせることで、一つ一つの力として同調させ、彼は全く新しいパワーアップ現象を生み出したのである。

赤い光を放つヤムチャの身体が「紫色の」オーラを身につけたのはその時だった。

「いけるー！」

他ならぬ自分自身の力に啞然としていたヤムチャが、自信に満ちた表情で合体13号へと挑んでいく。

ヤムチャは超サイヤ人のベジータを一方的に叩きのめしていた彼の元へ割り込むと、目にも留まらぬ早業で敵の巨体を上空へと打ち上げ、四方から連打していった。

「すげえ……！」

元気玉を作っていた悟空が、紫色に輝くヤムチャの姿を見て賞賛の声を漏らす。

合体13号もまた、合体して最強の力を身につけた筈の自分が反応すらできないヤムチャのスピードとパワーに戦慄していた。

「グオオツ……!?! ヤムチャアアアアア!!」

「ハイハイハイハイッ！ オウウウウウツ!!」

かつて孫悟空と共に戦い、レッドリボン軍の壊滅に大きく関わったヤムチャ。

そのヤムチャへの復讐心によって生み出された人造人間が、憎しみの叫びを上げて拳を振り回すと、ヤムチャが残像を残すスピードで全ての攻撃をかわしきり、カウンターで繰り出す縦横無尽の狼牙風風拳で敵を圧倒していく。

——これが、ヤムチャの力！

新たな力、ヤムチャドライブを獲得した彼は超サイヤ人すら凌駕する存在となった。

しかしその力は肉体の限界を超えた力を無理矢理引き出している性質からか、永続的なパワーアップではなかった。

時間が経てば界王拳のように反動が襲い掛かり、発動には限界時間があったのだ。

合体13号を完全に圧倒していながらも肉体にガタが来てしまったヤムチャが、糸が切れたように地に崩れ落ちていく。

一方で、敵はボロボロになりながらもその身はまだ健在だ。合体13号の目は倒れ伏したヤムチャを睨んでおり、彼にとどめを刺そうとその腕を振り上げていた。

だが、ここにいるのはヤムチャだけではない。

「俺たちに……不可能など、あるものか……!!」

「待たせたなヤムチャ！ くたばっちまえーっ!!」

「ソ、ソングクウウウーッ!!」

ヤムチャの時間稼ぎによって完成した悟空の超元気玉と、ベジータのビッグバンアタック。

その二つを同時に浴びた合体13号は、原作映画とは似ているようで違う最期を遂げることとなった。

「……ボクの知らないヤムチャだと……?」

その一部始終をビッグゲテスター・ヴェーダから監視していたリボンズヤムチャが、不愉快げにそう呟く。

ヤムチャ・ティエリアーデが既にヤムベイドの枠から外れた存在になっっているのはわかっている。しかし、それでも今しがた彼が見せた

力は想像以上だった。

それこそ、ここに来て計画に支障をきたしかねない成長である。

「そろそろ、あたしらの出番？」

「……そうだね、ヒリング。君たちに任すよ。ただ……」

彼の存在を危険だと認めるのは癪に障ったが、あえて泳がしておくのもいい加減に目障りになってきたのは確かである。

ただ、彼が獲得した「ヤムチャドライブ」という力は、リボンズヤムチャがより高みへ昇りつめていく為に有益な情報だったのもまた確かだ。

特にリボンズヤムチャにとって、老界王神の潜在能力解放は盲点だったのだ。何故ならば「ヤムチャの潜在能力などたかが知れている」と見ていた彼は、老界王神に頼るのはヤムチャのパワーアップ手段として得策ではないと判断していた。

原作での孫悟飯があればほどまで強くなったのは、あくまでも孫悟飯の潜在能力が作中最強レベルにすぎれば抜けていたからであり、引き出す力がヤムチャでは大したものにはならない。リボンズヤムチャの目標には遠く及ばない、最初期の時点で計画から外していたのである。しかし、こういった使い方があれば話は別だった。

「ドラゴンボールが欲しくなったね」

「そう？　なら持つてくるね」

——予定変更だ。

地球のドラゴンボールを手に入れて、神龍の力を使い、聖域「界王神界」へ進出することにしよう。

ヤムチャ・ティエリアーデの戦いぶりを見て、リボンズヤムチャも欲しくなったのだ。

ヤムチャの枠組みを明らかに超えさせてくれる——老界王神の力が。

「まさか、僕たちにまで出番が回ってくるとはね」

「ヤムチャ・ティエリアーデ……彼をこちらへ引き込むことはできないのか？」

「やるだけやってみれば？　どうせ無駄だと思うけど」

かくして、ヤムベイドたちは動いた。

リボンズヤムチャの命を受け、ヤムチャブリングとヤムチャヒリング、ヤムチャリヴァイヴの三人がドラゴンボールを求めて地球へ向かったのである。

——だが、地球に向かったのはその三人だけではなかった。

「カカロットの相手は俺がやる」

「バーダツ……いや、今はミスター・グドーだったね」

「てめえが勝手に呼んでいるだけだろうが」

ヤムベイドの居城であるビッグゲテスター・ヴェーダの内部。

その大広間に姿を現した仮面のサイヤ人に、リボンズヤムチャが苦笑しながら指示を与える。

「いいさ、彼の相手は君に任すよ。ヒリングたちには、ドラゴンボールの収集を優先させておこう」

ヤムチャ・ティエリアーデの覚醒という予期せぬアクシデントがあったものの、合体13号が孫悟空に敗れること自体は当初の予定通りである。

そしてその戦いがきつかけとなり、原作主人公である悟空がさらなる飛躍を遂げることも。

彼がリボンズヤムチャの立派なかませ犬になるのも、もう一押しといったところか。その一押しのためには、目の前に立つ仮面のサイヤ人の存在はまさに打ってつけだった。

——かくして、リボンズヤムチャの刺客が地球へと送り込まれた。

合体13号を倒して間もなく、新たなる脅威が地球を襲ったのである。

孫悟空はあれほどの強さを誇った合体13号さえもリボンズヤムチャにとっては使い捨ての駒に過ぎないことをヤムチャに聞かされ、このままでは駄目だと危機感を抱き、短期間で大幅なレベルアップを遂げる為の手段を講じた。

——「精神と時の部屋」である。

神様の神殿にあるその部屋では一日で一年分の修行をすることができ、室内の空間もサイヤ人好きな過酷なものとなっている。

原作ではセルに対抗する為に息子の悟飯と共に入り、親子ともども大幅なレベルアップを遂げた悟空であったが……彼は「ベジータと共に」その部屋に入ることにしたのだ。

本当ならば息子の悟飯を連れていきかけたのだが、今のところは原作の人造人間編ほど目に見える脅威に襲われていない為か、チチが彼をそんな過酷な部屋に入れることを快く思わなかったのである。至ってまともな母親心であった。

ならばヤムチャと一緒にいるか、となったわけだが……彼の場合はどうしても手が離せない状況に陥っていた。

——ヤムベイドの襲来だ。

ビッグゲテスター・ヴェーダから瞬間移動でやってきた三人のヤムベイド。

彼らはブルマの家を襲ってドラゴンレーダーを奪い、散り散りになつてドラゴンボールを探し回った。

そんな彼らの行動に気づいたヤムチャが、「悟空、ベジータ！ 奴らの相手は俺がする！ お前たちは先に入って修行している！」と言い渡し、一人でドラゴンボールの争奪戦に向かつてしまったのだ。

最初は悟空もヤムチャに加勢しようとするが、三人のヤムベイドが秘めている途方もない潜在エネルギーを察知し、「今のオラたちじゃ、どうひっくり返つても勝てそうにねえ……」と断念。

この場合はヤムチャに言われた通り、急いで精神と時の部屋に入り修行するのが最善の選択だと判断し、彼はヤムチャの無事を信じて精神と時の部屋に入ることにした。

ベジータの方は自分がヤムチャからナチュラルに味方扱いされていることと、カカロットと同じ部屋に入ることとを心底気に食わない様子だったが、伝説と謳われる超サイヤ人を超える連中が次々と現れたことに憤怒し、彼らを一齐に始末すると意気込んで部屋に入つていっ

た。

部屋の中での悟空とベジータは、流石にまだ仲良く組稽古するような関係にはならなかったものの、二人はそうして精神と時の部屋での日々を過ごしたのである。

そして彼らが部屋で修行を行っている間、ヤムチャは誰よりも大きな負担を一身に受けていた。

「ヤムチャ・ティエリアーデ……君はヤムベイターだ！」

「ちいつ！」

「我らと共に使命を果たせ！」

「嫌だね！」

クリリンやピッコロたち、そしてナツパまでも巻き込んだ、ヤムベイドとの壮絶なドラゴンボール争奪戦。

その最中に、ヤムチャはヤムベイドの一人である赤髪のヤムベイド、ヤムチャブリングと激闘を繰り広げた。

「同胞を討つのは忍びないが、やらねばならぬ使命がある！」

「強い……！これが、ヤムベイドの力……」

ヤムチャドライブという新たな境地に至ったヤムチャであるが、素の戦闘力ではヤムチャブリングが全てにおいてヤムチャを上回っていた。

そんな彼の戦闘スタイルは、両手から「気」の光剣を出して戦う超スピードの斬撃攻撃だ。

サウザーブレード——リボンズヤムチャから与えられた使命により、かつてクウラ機甲戦隊に潜入していたヤムチャブリングは、その技を得意とするサウザーから習得し、本家以上に使いこなしていたのである。

ヤムベイドを超えたヤムベイター、そのさらに上位に立つ「ヤムチャマイスター」。

セルリジエネ以来初めて相まみえた「敵」の実力に、ヤムチャは改めて戦慄した。

——だが、ヤムチャは変わった。

今の彼には、ヤムベイドにも負けない力があつたのだ。

「負けねえっ！俺は、お前たちのところにはいかねえ！」

「なに!?…これが、リボンズの言っていた……!」

悟空たちと競い合つていく中で、ヤムチャは使命に忠実なヤムベイドでは決して得られない数々の経験を積み上げてきた。

それこそが愛と、勇気と——未来へと続く「明日」だった。

ヤムチャブリングによって劣勢に追い込まれたヤムチャは、潜在能力の解放と界王拳を掛け合わせた新境地「ヤムチャドライブ」を発動する。

紫色のオーラを放出する彼が、その力で逆にヤムチャブリングを圧倒していった。

「討つと言うのか同類を!」

「違う！俺はヤムチャだあああつ!!」

至近距離からの全力かめはめ波が炸裂し、ヤムチャブリングをその手で葬り去る。

それは同胞たるヤムベイドへの決別の一撃であり、覚悟の顕れだった。

「ブリング・ヤムチャさーん!!」

「こいつ……ヤムチャのくせに!」

「はあ……はあ……つ、くそつたれ、今度はリヴァイヴとヒリングか!」

ドラゴンボールの収集を中断し、ヤムチャブリングの援護に駆けつけてきたヤムチャヒリングとヤムチャリヴァイヴがヤムチャの前に現れる。

彼らはピッコロや天津飯、そしてひよんなことからドラゴンボールの一つを持っていた双子の為に、成り行きで共闘することになったナツパに足止めされていたらしく、二人が駆け付けた頃にはヤムチャブリングはヤムベイド初の脱落者となっていた。

その光景をヤムチャブリングとの途切れたリンクを介して眺めていたりボンズヤムチャが、舌打ちして吐き捨てる。

「ティエリアめ……」

ヤムチャドライブの限界時間が訪れたことで、ヤムチャは大幅にパワーダウンした状態でヤムチャリヴァイヴとヤムチャヒリングの二人を相手取ることになる。

まさに絶体絶命の窮地——と思われたその時、精神と時の部屋から出てきた悟空とベジータが合流した。

「ヤムチャ、仙豆だ」

「悟空……早かったな。修行はもういいのか？」

「ああ、四ヶ月ぐらいで切り上げてきた。超サイヤ人2って変身をおめえが教えてくれたからな。オラたちも修行しやすかったぜ」

一日どころか五時間程度で部屋を出てきた悟空とベジータに、ヤムチャは始めは不安に思う気持ちがあつたがすぐにそれを改める。

セルゲームの際に入った原作の半年にさえ満たない、僅か四か月分の修行。それだけで二人は、原作で言うところのセルゲーム時よりも遥かに強い状態で現れてくれたのだ。

「これがその変身だろ？ オラも驚えたぜ……超サイヤ人の上に、こんなもんがあるなんてな」

「……っ、はは、すげえ奴だよお前は」

ヤムチャが悟空たちに与えた「ゲンサク」の情報。

驚いたことに悟空はそれを参考にすることによって自らの修行方針を改め、原作よりも効率良く鍛え上げること成功したのである。そんな彼と同じ部屋で修行していたベジータもまた、彼に触発されたかのように共に強くなっていた。

やはり悟空とベジータは、ヤムチャの想像が及ばない天才だったということだ。ヤムチャが与えた原作知識という僅かなヒントで、あっさり「超サイヤ人2」に変身してみせた姿に改めて畏敬の念を抱いた。

「超サイヤ人2か……上等じゃないさー！」

「言っておくが、俺は女だからと言って手加減はしないぞ。とは言ってもヤムチャではな……女じゃないか」

「あ？ あんた、今なに言った!? ふざけんなよこの野郎っ！」

「落ち着け、ヒリング。まったく、品のない……」

「あいつらが噂のヤムベイドって奴か……男の方は、本当にヤムチャそっくりだな」

「……孫悟空、僕を怒らせたな。沈めてやる」

「えっ？　なんで!?!」

超サイヤ人2になった悟空とベジータが、二人のヤムベイドと対峙する。

ヤムチャヒリングは彼女の名誉の為に言うが、女性型ヤムベイドとして作られた彼女の姿はれっきとしたかわいらしい緑髪の女の子であり、ヤムチャとの共通点と言えばせいぜいくせつ毛の加減が似ている程度だ。遺伝子情報が同じと言えど、ヤムチャアニュー共々決して女装したヤムチャのような見た目ではないので悪しからず。

一方でヤムチャリヴァイヴの容姿は髪の色が薄紫色で、目の色が赤いこと以外はほぼヤムチャと同じだった。性別が同じ男性型ヤムベイドの方が、オリジナルヤムチャと外見が似通るようだ。

尤も、二人とも自分がヤムチャと同一に見られることを酷く嫌悪している様子だった。

「今こそ修行の成果を見せてやる!」

悟空とベジータはバチバチと黄金色のオーラを弾けさせながら、二人のヤムベイドに挑み掛かろうとする。

しかし、そんな二人の元へ上空から新たな存在が舞い降りてきた。

「この気は……」

「ミスター・グドー!」

やけにノリの良いヤムベイド二人の合いの手を受けながら、突如現れた仮面のサイヤ人が地球の大地に降り立ったのである。

ヤムベイドさえも超える新たな敵が、悟空の前に立ち塞がった瞬間だった。

仮面のサイヤ人、ミスター・グドーは悟空の姿を見据えながら、静かに息を吐く。

「何年ぶりかも忘れちゃったが、見違えたな、カカロット」

「……っ、おめえ、どうしてオラのことを？」

悟空を見て「カカロット」というサイヤ人名を言い放つ仮面の男に、一体何者かと眉をひそめる。

そんな悟空の問いにくくつと笑みを漏らしながら、ミスター・グドーはその顔につけていた仮面を外した。

「これを見れば、わかるだろう？」

「——ッ!？」

露わになった素顔は、孫悟空と同じだった。

あまりにもよく似ているその姿を前に、驚きに目を見開く悟空とベジータ。

ターレスではない。やはり、お前は……と、そう呟くヤムチャの声を受けながら彼は言い放った。

「俺の名はバーダック。カカロット、お前の父親だ」

「……オラの、父ちゃんだって……?」

それは、衝撃的な告白だった。

突如この場に現れたミスター・グドー。その正体はなんと、孫悟空の父バーダックだったのである！

誰もが予想だにしなかったその展開に、悟空が驚愕しヤムベイドたちが笑う。

そんな一同の視線を浴びながら、バーダックは自らの息子に見せつけるように超サイヤ人2へと変身した。

「き、貴様……まさかあの時のサイヤ人か!？」

そこで初めて、ベジータは目の前に立つ彼こそがナメック星でフリーザと戦った超サイヤ人であることに気づく。

その問いにバーダックは言葉ではなく不敵な笑みを返し、そして悟空だけを手招きするように言い放った。

「俺の目的はカカロットだけだ。邪魔者の相手はあんたらに任せるぜ」

「了解、そういう約束でしたからね」

「じゃああたし、ベジータをやるよ。リヴァイヴはヤムチャね」

彼は実の息子と——悟空との果たし合いを所望していた。

その戦いの邪魔になるヤムチャとベジータの相手を二人のヤムベイドに押し付けた後、バーダックは悟空に容赦のない先制攻撃を仕掛けた。

「俺はカカロット……サイヤ人に相応しくねえお前を殺しに来た！」

同じ超サイヤ人2でありながら、悟空以上に大きなパワーを持ってバーダックが優位に立っていく。

そんな彼の目は実の息子に対してとは思えないほど冷酷無比な色を映しており、非情な眼差しをしていた。

その姿に、悟空は初めて出会った肉親——ラディッツを思い出す。

「っ、あんたも、ラディッツと一緒になのか!？」

「ラディッツ？ ……ああ、そうだな。俺もアイツと似たようなもん
だ」

「だったらオラは、あんたを許すわけにはいかねえ！」

「そうだ……怒れカカロット！ その怒りを、この俺にぶつけてこい
！」

実の父親と対面し、その父親がヤムベイドと共に自分を殺そうとしている。

その状況に少なからず動揺していた悟空が、明確に殺意が籠った彼の言葉を聞いて目つきを変える。

悟空もまた、徐々に戦意を昂らせていく。同じ超サイヤ人2である自らの父親との戦いにも、感じるものがあつたのだろう。

そんな息子を煽り立てるように、バーダックが高らかに叫んだ。

「そうだ！ 親が子を殺し、子が親を殺す！ それがサイヤ人だ！」

「オラは……オラは地球育ちのサイヤ人だあつ！」

——出会う筈のなかつた親子は青の星でぶつかり合い、それぞれの魂を解放した。

ぶつかり合う父と子。

超サイヤ人2対超サイヤ人2。

超高速対超高速。

二人の超戦士はお互いに黄金の尾を引き、8の字を描くように交錯を繰り返しながら上昇していく。

一瞬にも満たない交錯の中で、二人の拳は何度打ち合ったかわからないほどだ。

「こんなものかカカロット！俺がサイヤ人の運命を託したてめえの力は、この程度に過ぎねえのか！」

「ぐぐつ……い……なんてパワーだ……！」

「手を抜いているのか？それとも、それがてめえの限界か!？」

始めは均衡しているように見えた二人の激突は、バーダックの叫びに呼応していくように彼の側へと傾いていく。

純粋な力の波濤に弾き飛ばされる悟空。それを追撃し、バーダックは容赦なく拳を振り下ろした。

「スーパー界王拳！」

やられる……そう感じた瞬間、悟空は身体中全てのリミッターを外した。

ただでさえ負担の大きい超サイヤ人2の状態に、界王拳を重ねがけしたのである。それはヤムチャのヤムチャドライブをヒントに本能的に編み出した、バーダックへの対抗策だった。

寸でのところで自らのとどめを空振りにせしめた赤い姿を見て、バーダックが喜悦しさらなる変身を見せる。

「グガガガ……い……があああっ！」

「！……おめえ、まだ上があんのか……っ」

「……そういうことだ。さあどうするカカロット？俺に勝てるかカカロットよオツ！」

「勝つさー！」

超サイヤ人3。

髪が長くなり、眉毛のなくなったバーダックの姿は見た目の変化だけではなく、戦闘力も異次元の上昇を遂げていた。

初めて目にした超サイヤ人のさらなる進化に慄きながらも、悟空は臆さずスーパー界王拳で挑んでいく。

互いに彗星よりも速く加速した戦士と戦士が、正面からぶつかり合

う光の打ち付け合いの中で叫び、叫び返す。

「俺は純粹なサイヤ人だ！」

「おめえはラディッツとは違う！」

「運命さえ変えた！」

「オラにはわかる！」

「そしてこれからも変える……！　それが俺の……」

「教えてくれ！　おめえは何がしてえんだ!？」

この地球の空で何度も力と技をぶつけ合っていていく中で、悟空はバーダックの繰り出す拳から強い信念を感じていた。

それは明らかに、自らの兄ラディッツから受けたものとは違うものだ。

だから疑った。自分をサイヤ人に相応しくないから殺すと言った彼の言葉は、はたして真実なのかと。

この戦いが彼にとって、本当はどういう意味があるのか……その心に問い掛けたのだ。

「生きる意味だ！」

「父ちゃん！」

それは悟空がサイヤ人でありながらも地球人の心を持つからこそ抱いた、実の父親に対する甘さであり、優しさであった。

ラディッツでさえ一時は命乞いする彼を殺すことを躊躇い、見逃そうとした悟空だ。

自分もまた一児の父だからこそ、初めて会った実父であるバーダックへの情も人並みに強かった。

そんな彼を見下ろし、バーダックは左手の拳で悟空を吹き飛ばした。

「この限界の先を……!？」

「全部犠牲にして、それでいいのか!？」

「他にどんな力がある!？」

「わかんねえのか!？　それは……!？」

まるで阿修羅のように情もなく、戦闘マシンのように闇雲に力を求めるバーダックの求道。

そんな彼の、「他に何も無くなってしまった」ことから生まれた力の空虚さに触れて、悟空は悟る。

これは、同じだ。

かつてヤムチャにその力の虚しさを指摘された、天下一武道会でのピッコロと。

「大切なもんを守る……力だ！」

純粹に戦いを望むのは、悟空とて同じだ。

だが、悟空には今のバーダックにはない「守る者」があった。

純粹なだけでは駄目だ。

守る者があるだけでも駄目だ。

その二つが合わさったその時こそ、悟空は初めて「絶対に負けない為の極限」を極め続けていけたのである。

悟空の叫びに、バーダックが一瞬だけハツとした表情を浮かべる。

そんな彼に、悟空はスーパージョウキョウ状態で放つ全力のかめはめ波を浴びせた。

「ツッ！」

近距離で放たれた渾身の一撃を、バーダックが全力で迎え撃ち、両手を振り抜いて空へと弾き返す。

かめはめ波さえ対処してみせたバーダックは急加速して悟空へ接近し、「気」を蓄積させた黄金色に輝く右手を突き出した。

「これで最後だあっ!!」

超サイヤ人3から解放される全ての力を込めた闘志の鉄拳を、容赦なく悟空に叩き込もうとする。

紅蓮に染まる超サイヤ人2の悟空は、その一撃を——ほんの紙一重でかわしてみせた。

——残像拳。少年時代に習得したその技を、悟空は刹那にも満たない一瞬で発動したのである。

そのままバーダックの懐に飛び込んだ悟空が、ありったけの力を込めて切り札を解き放った。

「龍拳！・爆発ーツ!!」

「なっ……」

相手の力を利用し、カウンターで放つ新必殺技——「龍拳」。
直前のかめはめ波は、それを放つ為の布石に過ぎなかつたのだ。悟
空はこの技こそが唯一バーダックの超サイヤ人3を倒すことができ
る切り札として温存しながら、それを放つことができる好機を虎視
眈々と窺っていたのである。
熱い心の中で、彼はそういったクレバーさも併せ持った「戦いの天
才」である。

……見事だ。俺の、負けか……

歴戦の戦士である自分の上を行ってみせた息子カカロットの強さに、バー
ダックは金色の龍に胸を抉られながら、渴いた笑いを漏らす。

そして目の前の、自分がかつて見た「運命」さえ乗り越えてみせた
息子に対して——初めて、穏やかな目を向けた。

「……強くなったな、カカロット……」

「……………」

何を、今更……と、我ながら自分が呟いた言葉が可笑しくなり、自
嘲の笑みを浮かべる。

こんな時、サイヤ人らしからぬ穏やかな女性であつた妻のギネなら
ば、始めから息子への愛情に正直に伝え、彼をその腕で抱きしめてい
たのだろう。

しかし、バーダックはどこまでもサイヤ人らしく、そして不器用な
男だつた。

戦うことしかできない破壊者——それが自分だ。
ラディッツ以上にバーダックの血が強い息子ならば、彼もまた同じ
だろうと思っていた。

俺たち親子は所詮戦いの中でしか生きられず、喜びを得られない。
故に、戦いの極みを目指すことしかできない者同士なのだ。

だからこそ、バーダックは仮面さえつけて息子との果たし合いに臨
んだのだ。
しかし。

「父ちゃん……」

さつきまで自分の命を奪おうとしていたバーダックの手を掴み、息子として悲しげな目で見つめる彼の顔は、やはりサイヤ人らしくなかった。

だが、そんなサイヤ人らしくない彼だからこそ、限界なしに強くなれるのだろう。

戦っていく中で、バーダックは「孫悟空」という男の本当の強さを感じ、理解することができた。

(そうか……)

そこに考え至ってようやく、バーダックは自分が何をしたかったのか気づく。

自分の意志を継がせる為に、カカロットをサイヤ人に相応しい男にする？

違う。

サイヤ人に相応しくないカカロットを、一族の面汚しとして処刑する？

違う。

俺は、ただ……

(俺は……お前の成長を確かめたかったのか……)

地球人の親子がキャッチボールでコミュニケーションを行うように。

彼にとっては命懸けの戦いこそが、息子と交わすことができる唯一のコミュニケーション方法だったのだ。

——だがそれでも……彼らは、わかり合うことができた。

ヤムチャ・リターン

「タイムパトロールの仕事、本当はあまり好きじゃないでしょう？」
不意にそう訊ねられ、トキトキ都のタイムパトロール隊員であるトランク스가目を丸くした。

訪ねてきたのは、入隊してまだ間もない新任のタイムパトロール隊員アニュー。訊ねられた場所は、時間犯罪の影響を観測する施設、時の巻物が収められている「刻蔵庫」だった。

巻物の整理を区切りのいいところで終えて、トランク스가一人で休憩していた時のことだ。

トランクスは小首を傾げて薄紫色の髪の女性の目を見つめた。

突然そのような、「タイムパトロールの仕事、本当はあまり好きじゃないでしょう？」と訊ねられたことの意図が掴めなかったからだ。

しかしアニューの浮かべている微笑みはどこまでも柔和で、裏があるようには見えない。

トランクスは少しの戸惑いを抱きながら、逆に訊ね返してやった。

「何故、そんなことを聞くのですか？」

そう聞けば、面食らったような顔をした彼女が頬に指を当て、照れたような表情で答えた。

「ん、何となく、でしょうか？」

「はは、そうでしたか。俺は別に、そんなことはありませんよ」

「そうでした？ 変なことを聞いてすみません」

「いえ、そんな」

その時の会話は、単なるアニューの気のせいだったという体で終了した。

しかし、ふとトランクスが一人で仕事に取り掛かっている時、彼女の言葉を思い出してその意味を納得してしまった。

……そう、だったのか……

愕然としたのは、トランクス自身だった。

彼女の問い掛けが、タイムパトロールの仕事があまり好きではない

ということが——トランクス自身さえも今まで気づいていなかったとでも言うように、不思議なほど胸にすつぽりと収まっていたのだ。「そんな、馬鹿な……」

トランクスはこの仕事を——自分がタイムパトロールの一員になることを受け入れていたつもりだった。

人造人間に滅茶苦茶にされてしまった世界。その未来を変える為、かつてトランクスはタイムマシンに乗って過去へ渡った。

「孫悟空の病死」という確定された歴史を変えることによって、何か一つでも希望を持ち帰れたかったのだ。

事実、トランクスは過去での修行によって自らも超サイヤ人を超えた力を手に入れることができ、未来の人造人間を打倒することができた。

過去の世界もまた孫悟空の生存によって多くの人々が救われ、地球は幾度となく危機を乗り越えることができたのである。

結果を見れば、トランクスが歴史を変えたことは世界に多くの光をもたらした。

しかしそれは、本来許されざる行いだったのだ。

歴史の改ざんは、重罪に相当する。

正しい行いをしたつもりだったトランクスは、後にそれを罪と咎められ、法廷に上げられることとなった。

今にして思えば、その場で処刑されたとしてもおかしくはなかっただろう。結果的に善行になったとは言え、トランクスの行いは間違いなく時空法の違反する悪行だったのだから。

そこで、トランクスに救いの手を差し伸べてくれたのがクロノア——今のトランクスの上司である、時の界王神様である。

そもそも彼のいた地球ではタイムマシンの技術自体が史上例のない代物であり、前提として時空法などという法律があること自体知る由がなかったこと。

時間を渡ったトランクスには決して悪意があったわけではなく、元をとえば彼が時間を渡らざるを得ない状況まで追い込んだ「人造人間」などという悪魔を生み出した科学者にこそ問題があるのだと言

い、彼を弁護してくれたのだ。

そんな時の界王神の恩情によって、法に裁かれる筈だったトランクスは救われた。

そしてその恩義に報いる為に、彼は今、彼女の下でタイムパトロール隊員として働いているのである。

そんな経緯を経て、タイムパトロール隊員になったトランクスだ。全ては自らの意志で決めたことであり、この仕事にも何ら不満は抱いていない筈だった。

だが……

トランクスは目を瞑り、静かに仮眠の体勢に入る。

……正直に言えば、自らの犯した過ちを「罪」と認めていない自分も確かに存在している。

正しいことの為に時を渡って、大切なものを守る為に戦ったことの何が悪いのか？と。

自己弁護に過ぎないそれが、浅ましい感情だというのはわかってる。だから今まで誰にも口にしたことはなかったし、法廷に上がった時も自らの罪を受け入れた上でだった。

ただ、だとしても何故？

こうして指摘されなければ自分自身でも気づけなかったような感情を、何故新任のタイムパトロール隊員が気づけたのか。

そう思い始めてから、トランクスは——あくまでも仕事のパートナーに過ぎないと思っていた彼女のことを、日に日に気になっていった。

そして、気づいた。

彼女もまた、自分と同じなのだ。

時の界王神様や他の隊員たちと談笑している彼女の顔を見た時、トランクスはそのことに気づいた。

みんなの前で笑顔を浮かべている彼女の後ろで、そんな彼女を悲しげな目で見つめるもう一人の彼女がいるように見えたのだ。

それは、どんなに上手く取り繕っていても誤魔化せない小さな溝であり、どうしても周りに溶け込むことができない負い目にも似た影

だった。

時の界王神様から仕事を押し付けられた時、困ったように笑う自分と同じだ。

それはトランクスが彼女のことを注意深く見ていたからこそ気づくことができた違和感であったが——もしかしたら彼女もまた、自分のことをよく見ていたから気づけたのかもしれない。

そう思った瞬間、トランクスはいつしか彼女のことを仕事のパートナーとしてではなく、一人の女性として惹かれていた。

「最近、感じるんです……貴方の視線を」

「えっ?」

ある日の休憩中、彼女からそう言われた時、ばくりと心臓が跳ね上がるような感覚がトランクスを襲った。

しかし直後の言葉で、その鼓動が微笑ましいものを見るように落ちて着いていく。

「タイムパトロール隊員になって日の浅い私を、気に掛けてくれるんですよ? その、ありがとうございます」

無垢なる赤い瞳で見つめられれば、彼女に対して不純な気持ちを抱く自分が酷く申し訳なくなる。

トランクスは嘆息しながら、そんな彼女の純情さに訂正を入れた。

「アニニュー、貴方は強くて聡明ですが、案外鈍いんですね」

「鈍い……ですか?」

「それはもう、相当に」

「どういう風に鈍いんです?」

「あー……それは、その……」

「なに言葉に詰まってるんですか?」

「その、何と言いましようか……」

顔が赤くなっているのが、自分でもわかる。

戦いでも至らないような熱気の中で、トランクスは回りくどい言葉を選び、彼女に告げた。

「俺はですね……本当は剣を使うより、拳で戦う方が得意なんだ」

「……あつ……………」

言い終わらないや、トランクスは行動に出ていた。

彼女の小さな背中を、そっと抱き締める。

彼女は拒まない。と言うよりも寧ろ彼女は、嬉し恥ずかしといった様子で喜んでいた。

トランクスは壮絶な生い立ち上、こういうことに対する最適解がこれ以外に見つからない。普段から真面目過ぎるだけに、年長さん並みの愛情表現しかできなかったのだ。

そんな彼の起こした奇行は今にして思えばやんちゃが過ぎたが、後に謝れば彼女も望んでいたようなので良しとする。

彼女が訊き、トランクスが答える。

「私たち、わかり合えてたよね……………」

「ええ、もちろん」

——唇を重ね合ったお互いの気持ちだが、嘘である筈がなかった。

トキトキ都。

同僚のタイムパトロール隊員たちによつて集められた七つのドラゴンボールの前で、トランクスはあの時のことを思い出す。

アニュー——この世でただ一人、この心に燻っていた感情を見抜いてくれた大切な人。

その彼女を取り戻すことが、今のトランクスが抱える唯一の願いだった。

「……皆さん、ありがとうございました」

タイムパトロールの仕事の一つである、時空の振れを修復する作業

「パラレルクエスト」。歪んだパラレルワールドの一部にはドラゴンボールが落ちている場所があり、優秀な成績を収めたタイムパトロー隊員には特別にそれを回収し、願うことが許されている。

トランクスもまた、過去に一度だけそのドラゴンボールで願いを叶えてもらったことがある。

「俺と一緒に時間を越えて戦ってくれる、強い仲間を連れてきてほしい」と、その願いに応じてくれたアニューがトキトキ都に召喚されたのが、彼女との出会いの始まりだった。

そして、今また、トランクスは彼女のことでも願おうとしている。

上司である時の界王神にも、老界王神にも黙って。

「私は別に、ボールの報酬に服を買ってもらいたかったただけだもんねー」

「渡したボールがどう使われようと、知ったことじゃないっすよね」

タイムパトロー隊員の同僚である、魔人の女とフロスト族の男が白々しい笑みを浮かべる。そんな彼の後ろでは、筋肉質なナメック星人の隊員が力強く頷いていた。

彼ら三人の協力がなければ、ドラゴンボールを集めることはできなかっただろう。

何せトランクスは前科者だ。大らかな時の界王神は見逃してくれども、他の神々からは常に厳しくマークされていた。

そんな彼の代わりに、この三人がパラレルクエストの合間にドラゴンボールを集めてきてくれたのだ。

全ては、トランクスの願いの為に。

「時の界王神様や老界王神様に聞かれたら、俺に脅されたと言ってください」

「ああ、俺たちの正義を為したんだってデカイ声で言ってる」

「っ……」

「みんな知ってるんすよ？ トランクスさんがずっと、たくさん人の為に頑張ってくれたこと」

「誰よりも真面目にね。アニューが羨ましいわ。こんなにいい男に愛されてるんだから」

あまりにも危険な橋だ。沈みゆくボロ船とも言える。

トランクスがこれから行おうとしていることは、向かおうとしている場所は、タイムパトロールの任務にはない明らかな職務放棄である。時空法に触れる時間犯罪にも値するだろう。だがそれでも、トランクスには譲れないものがあつた。

数年前、ここでヤムチャが修行していた。

セルリジエネというアニューの同胞と会い、彼女がリボンズヤムチャという黒幕に操られているのだということを知られた。

修行を途中で打ち切ったヤムチャが、彼女のいる世界へ帰った。

ヤムチャは言った。「俺が彼女も連れてきてやるから安心しろ」と。あちらの世界のことは、あちらで解決すべきなのだろう。

違う世界の人間である自分は、彼女を取り戻す為にあちらの世界に介入してはいけないのだろう。

だが。

だが、そんな道理は……

「罪だの罰だの言われたら、胸張って言い返すさ。俺は自分が守りたいものを守りたかっただけだつてな」

「……ありがとうございます」

「だから、やつこさん連れて帰って来いよ。時の界王神様も、きっとそれを望んでいる」

「もちろんです」

……こじ開ける。

そんな道理、俺の無理で、こじ開けてやる。

同僚たちの甘美な言葉に熱いものを込み上げながら、トランクスは決意の目を見開いた。

「いでよ、神龍ー」

七つのドラゴンボールから、龍の神様を呼び出す。

そして彼は、もはや何の躊躇いもなく願いごとを告げた。

「俺を、アニューのところへ連れて行ってくれー」

「それは私の力を……」

「できないとは言わせないー」

「む……」

「……頼む。たとえ魂だけだろうと、俺を行かせてくれ。俺はもう失いたくないんだ……誰一人として」

彼女の元へ行く為なら、この身がどうなってもいい。

罪だと言われれば喜んで極刑も受け入れよう。

頭を下げ、必死に懇願するトランクスの姿を見て神龍が唸った。

「……わかった。成功は保証できないが、可能な限りやってみよう」

そしてトランクスは、トキトキ都から姿を消した。

そんな彼に取り残されるような形で、トキトキ都に残った三人のタイムパトロール隊員が口々に語る。

「行かせて良かったんですか？　うちらも共犯者ですよ」

「……奴は初めて、自分の為だけに戦おうとしているんだ」

「未来を信じて戦ってる……私は後悔してないかな」

「ははは……みんな、考えることは一緒か」

バレれば即座に首が飛ぶだろう。時の界王神様は温情派の神様だが、他の世界に干渉するなど本来であれば物理的に辞任させられるとんでもない案件だ。

だがそれでも、彼らにはトランクスを手伝った自らの悪業に対し、後悔はなかった。

「神様にだって自分勝手に生きている奴はいるんだ。これぐらい、アイツには許される……許されなければならないと思う」

筋肉質のナメック星人隊員が言い、彼らは同僚が恋人を連れて無事に帰ってくることを、切に願った。

「……は……」

神龍の力によって、トキトキ都のトランクスはヤムチャアニューが存在する時間軸へのワープに成功した。

神龍が言うにはこの世界はポルンガの力によって隔離されていたとのことだが、願いを叶えた彼もまた相当に頑張ってくれたのだろう。次元と次元の間に一瞬だけ空いていたほんの僅かな隙間を通して、トランクスを願い通りの場所へ連れていってくれたのである。

そんなトランクスがワープした場所はリボンズヤムチャの総本山、機械惑星ビッグゲテスター・ヴェーダの内部だった。

「随分時間が掛かってしまった……待っている、アニュー」

彼らの本拠地に単独で侵入したトランクスを始めに出迎えたのは、奥の方から猛進してくる数十体もの人型兵器だった。

人造人間——その姿はトキトキ都で見たことがある「人造人間19号」と似ている。さしずめ、量産型人造人間19号と言ったところか。しかもそのスピードとパワーはビッグゲテスター・ヴェーダの技術を受けて作られている為か、本家の19号よりも遥かに強化されているように見受けられる。

「リジエネさんが言っていた通り、ドクター・ゲロもリボンズヤムチャに取り込まれているのか」

内部の警備にこれほど大量の戦力を蓄えていたとは、随分な施設である。

トランクスの侵入に気づいた量産型19号が、ゾロゾロとメタルクウラのように群れをなしながら彼の排除に動いた。

しかし、冷徹に見据えたトランクスの目には、塵一つとして恐れも油断もなかった。

「……で？ それだけか」

一気に超サイヤ人2に変身したトランクスが、鞘から振り抜いた剣圧だけで前列の人造人間たちを真っ二つに切り裂いていく。

音を置き去りにする速度で後列の人造人間たちへと切迫すると、そ

の首を、腹を、足を、一体ずつ拳をねじ込んでバラバラに砕き割ってやった。

相手が人間であれば、さぞスプラッタな光景が広がったことだろう。いや、仮に相手が人間だったとしても今のトランクスはすこぶる冷酷な目つきをしており、容赦がなかった。

あるいは人造人間に孫悟飯を殺された時と同じか、それ以上に冷静さを欠いていたのだ。

「どけ!!」

体内から黄金色のオーラを解放し、それを気合い砲に変えて周囲の人造人間たちを一斉に吹き飛ばしていく。

もう、どうでもいい。

この行動が犯罪かどうかなど、知ったことではない。もはや完全に吹っ切れてしまったトランクスは父ベジータを彷彿させる傲慢な瞳を映しており、自重をかなぐり捨てていた。

「未来トランクスだと……? だが、ここは通さん!」

「ヤムベイター……!」

量産型19号では数に任せても相手にならないと判断したのか、ヤムベイドの一人ヤムチャデヴァインが出現し、突き進むトランクスの前に立ちはだかった。

ヤムチャブリングと同タイプのヤムベイドである赤い髪の彼を見て、その容姿にかつての仲間であるヤムチャの姿がちらつく。が——今のトランクスには、何の動揺も走らなかつた。

「邪魔を……するなあ!」

「なに?」

ヤムチャデヴァインはかつてターレスのクラッシュ軍団に潜入し、神精樹の実を喰らうことによってヤムベイドの力を超えたヤムチャマイスターだ。

その力はヤムチャブリングたちと同等であり、超サイヤ人を超える戦闘力を保有していた。

そんな彼の拳を額から諸に受けても、流血したトランクスはピクリとも怯まず彼の目を睨んでいた。

「貴様……！」

「俺が会いたいのはお前じゃない……消え失せろ！」

「ぐあああっ!？」

超サイヤ人2の黄金色のオーラの淵に、「青色の光」を纏ったトランクスが叫び、腕の一振りでもヤムチャデヴァインの身体をドーム一戸分ほどの高さがある天井へと叩き込んでいった。

そして今しがた吹き飛ばした敵には目も暮れず、トランクスは目の前の壁を気攻波で粉碎し、自らが通る道を強引にこじ開けた。

感じる……この先に、彼女がいる。

トランクスが大切な人の「気」を追って穴の中に飛び込んでいくと、ほどなくして彼は対面した。

薄紫色の髪 of 彼女……アニューと。

「アニューー！」

「トランクス？……どうして……どうして来たの!？」

トランクスが次元を越えてまでここに来るとは思っていなかったのだろう。彼女は彼の顔を見て驚いた表情を浮かべた。

しかし、直後に彼女の瞳が金色の虹彩を帯び、人形のように無機質な表情へと変わった。

「……………」

彼女がその手に一振りの青龍刀を構えると、おびただしい「気」を解放しながらトランクスに襲い掛かってくる。

華奢な体格からは考えられないほど鋭く、重い攻撃だ。

それを自らの剣で捌き受け止めながら、トランクスは彼女を操る裏の存在に対して激しい憎悪を燃やした。

——同じだ。

タイムパトロールで共に働いていた頃、彼女は突如豹変し、今回のように攻撃を仕掛けてきた。

彼女がタイムパトロールを裏切った時もまた、同じ反応をしていたのだ。

『彼女らヤムベイドは皆、ヴェーダの端末に過ぎない。だからそのヴェーダのコアを掌握しているリボンズが命令一つ下せば、彼女らは

その身を操られ自由を失ってしまう。そういう風に作られている、「人造人間」なんだ」

今と同じ虹彩をした彼女をヤムチャリヴアイヴという男に連れ去られ、途方に暮れていたトランクスの前に、不意に現れたセルリジエネがそう語っていた。

『それでも彼女のことを助けたいのなら、リボンズ……リボンズヤムチャを打倒するしか方法はない。一応ヴェーダを破壊して強引にリンクを断ち切るっていう手もあるけど、ヴェーダのコアを壊すことで、ヤムベイドである彼女まで一緒に壊れてしまうかもしれないからね。それこそコアが破壊された途端、一斉に爆発していったメタルクウラみたいに』

トキトキ都で色んな次元の世界を見てきた君には、僕としても説明しやすく助かるよ。そんなことを呟いて、セルリジエネはトランクスにリボンズヤムチャのことを——「ヤムベイド」の情報を教えた。それにはリボンズヤムチャの野望を語る上で「ドラゴンボール」という物語のことも聞かされたものだが、そちらはトランクスにとってはやはりピンと来る話ではなかった。

彼の話によればその物語の中でのトランクスはアニューではなく、「マイ」という女性と恋仲になり添い遂げたという話だが……この世界に生きるトランクスからしてみれば、何の意味もなさない情報だったのだ。

この世界の正体が何であろうと、自分は自分だしアニューはアニューだ。

物語だろうと、ヤムベイドだろうと。

みんな……みんな同じだ。

生きている。

生きようとしている。

だから……

「決まっているだろうー！」

青龍刀による彼女の猛攻を見切ったトランクスが、全てを刀身で受け流しながら叫びを上げる。「どうして来たの？」と問うた、彼女の言

葉への返事だ。

彼女の技は全てわかっている。彼女が一番の得意としている、この青龍刀を使った剣撃も。

何故ならば彼女に剣技を教えたのは、トランクス自身だからだ。ある日修練に行き詰まったと言う彼女に教えを請われた時、トランクスは彼女に我流ではあるが剣技の手ほどきを行った。

トランクスにとって彼女は生まれて初めての恋人であると同時に、弟子であり、そして――

「君をもう一度、俺のパートナーにする！」

「っ……」

――相棒パートナーだったのだ。

その彼女に、トランクスが負ける筈はなかった。

ましてや操り人形となり、彼女本来の実力を引き出せていない状態などに。

「嫌とは、言わせない！」

やがて黄金色の混じったものから完全な青いオーラへと変わった超サイヤ人のトランクスが、彼女の手から青龍刀を弾き飛ばし、自らの剣先を突き付けるように差し向ける。

しかし即座にその剣を投げ捨てると、トランクスは両手で彼女の身体を抱き締めた。

強引に、強く抱いて呼び掛ける。

「……俺はどうにも、感情が昂るとつい調子に乗って、色々勘違いしてしまう性格になるらしい」

俺は父さんを超えてしまったんです――そのような勘違いをしたこともある自らの恥ずかしい思い出を振り返りながら、トランクスが笑う。

それを笑い話にできるほどに、今のトランクスはきつと救われていた。

そう言って、抱き締めたその腕から、彼女の身体に向かって自らの内包する「気」を丁寧に注ぎ込んでいった。

「勘違いでも俺は、君を攫っていく。たとえ君が……人造人間だとし

ても」

彼女らヤムベイドには、ビッグゲテスター・ヴェーダー——リボンズヤムチャの呪縛から逃れる方法が、一つだけある。

それは、そのヤムベイド自身がビッグゲテスター・ヴェーダの領分を大きく超えた存在になることだ。

老界王神に潜在能力を解放されたヤムチャ・ティエリアーデという男が、ヤムベイドの身体でありながらリボンズヤムチャとのリンクを断ち切ることができた事実をヒントに、トランクスは唯一の望みを掛けて実行に移したのだ。

自らの^{サイヤパワー}力を彼女に分け与えることで、彼女の力をヤムベイターよりも上位の存在へと昇華させる。

そうすればきつと、今の彼女も正気を取り戻してくれる筈だと、トランクスは僅かな可能性に賭けたのだ。

そしてその賭けに——トランクスは勝った。

「トランクス……」

青く輝く光の中で、トランクスはアニニューを抱きしめていた。

強く、強く。二度と離さないと誓った通り、手元へ留め置こうとするように大切な女性を抱き締めている。

トランクスはこの世界に来てより、冷酷に染まり始めていた自らの心が雪のように溶けていくのを感じながら、彼女の薄紫色の髪に手のひらを乗せ、感触を楽しむように優しく撫でた。

「ずっと……退屈だった」

そんな彼女が震えるように、しかし穏やかな顔を見せて想いを打ち明ける。

「ここには貴方がいなかったから、生きていて張りがなかったわ」「アニニュー……」

囁くようなアニニューの声に、トランクスは慎重に腕の力を抜いて、彼女の顔を覗き込んだ。

お互いに目と目を合わせて、大切な人が微笑む。

切なげに、彼女が言った。

「ねえ……私たち、わかり合えたよね？」

トランクスは頷き、微笑んだ。

それはおそらく、彼がタイムパトロール隊員になってから初めて浮かべた——正直な笑みだった。

「もちろんだよ」

その笑みを見て、アニューが——今度こそ、安心しきったように破顔した。

「良かった……だって貴方ったら、いつも張りつめていたんだもの」

「ああ……」

「私の気持ちだって、いつ伝えればいいのかなくて、ずっと悩んでいたわ」

「すみません……」

「ほら、そういうところよ？」

「自分を……なんていうか、受け入れられなかったんだ。ずっと誰かに負い目があって、何かを守らないかと思いつけていて」

「うん」

「タイムパトロールの仕事があまり好きではないのかって君に言われた時、俺は初めてそんな自分に気づいた。心が軽くなったんだ」

「ええ」

「俺は初めて……初めて自分の弱きを出すことができた……つ、初めて、俺が俺でいられるような気がしたんだ……」

「私もよ、トランクス。私もずっと……使命なんか無くなればいいのかって思ってた。貴方の傍にいて、初めて生きているって思えたから」

出会えたことで、世界が一変したようだった。

二人はその胸の内を包み隠さず明かす。生きて、見て、聞いて、話して、触れ合う。

その実感を与えてくれたのは貴方だったんだと。

だからもう、置いていくなとトランクスが言い。

願っても祈ってもつかまえていてと、アニューが笑う。

「俺たちは……」

「私たちは……」

そして、二人は――

「わかり合うことができたんだ……」

彼らは、お互いの矛盾を超越した。

YAMUCHA

ヤムベイドたちが各地から蒐集した戦闘経験値。

ビッグゲテスターの科学力。

ドクター・ゲロの科学力。

界王神の遺体。

ポタラ。

そして、サイヤパワーの回収。

リボンズヤムチャの計画に必要な条件は、概ね揃ったと見ていいだろう。できれば老界王神の力も研究したかったところだが、この時点でも彼には既に神を超える算段がついていた。

特に最後のサイヤパワーの回収については色々想定外なこともあったが、結果的に最高の形で手に入れることができたので良しとしよう。

ヤムチャアニュー、そしてトランクスは最高の働きをしてくれた。リボンズヤムチャの想定よりも、あの二人は見事な踊りを披露してくれたものだ。

「完成しました、リボンズ様」

時は、トキトキ都から来訪したトランクスがアニューの解放に成功した直後であり、地球では悟空がバーダックに逆転勝利を収めた瞬間である。

場所は、ビッグゲテスター・ヴェーダの工房スペース。

町一つ分ほどの面積が贅沢に使われているその場所では、銀色の光沢を放つ一人の老人が佇んでいた。

——アルケー・ゲロ。

ビッグゲテスター・ヴェーダによって物理的な肉体改造を施され、新たに生まれ変わったドクター・ゲロの姿だ。

リボンズヤムチャはビッグゲテスター・ヴェーダの高度な科学力を取引材料に彼と手を組み、数年前から協力関係を結んでいた。

尤も今となつてはビッグゲテスター・ヴェーダ諸共ヤムベイドを支配下に置こうとしていたゲロの野心を機に、完全に破綻しきつた関係

であるが。

彼の野心を最初から見抜いていたリボンズヤムチャは、ヤムチャヒリングを使って彼を返り討ちにし、捕縛した。

そのまま彼をビッグゲテスター・ヴェーダの溶鉱炉に放り込み、従順な機械人形「アルケー・ゲロ」へと改造してやったのである。

惜しむらくは脳まで機械化してしまった影響で科学的な閃きが失われてしまったことだが、計画の為ならば新しい発想が生まれなくとも、既存の知恵だけで充分だった。

何より彼に自由な頭脳を与えてしまう危険さを、リボンズヤムチャは十二分に理解していたのだ。

「遂に完成したんだね」

かつてフリーザに殺された界王神の遺体を彼に引き渡し、解剖から得られるデータによって神次元の力を解析、研究を行う。

そしてその研究から得られたデータを基に、「神次元の力を付与する」効果を持った魔改造ポタラ「ポタラドライブ」を作り出す。

アルケー・ゲロは見事にその役目を果たし、リボンズヤムチャに研究の成果を披露してくれた。

彼の手から黄金色に輝くイヤリングを受け取ると、リボンズヤムチャは堪えきれない喜びを漏らした。

「あつちの方はどうかかな？」

「これより起動します」

魔改造ポタラ「ポタラドライブ」の完成。

そしてもう一つ——リボンズヤムチャが神を超える計画をなすものが、アルケー・ゲロによって作られた。

——ヤムチャキャンオン。

アルケー・ゲロによって開かれた等身大のカプセルから出てきたのは、リボンズヤムチャと全く同じ姿をした金髪の人造人間だった。

その容貌は、さながらヤムチャが超サイヤ人になったようだ。

彼の正体は、言わばサイヤ人と界王神をベースにして生み出した「セルの究極体」である。

あるいは、「最高の技術と環境で作られたバイオプロリーのような

もの」と言えるかもしれない。

これより以前に製作したセルリジエネは、欠陥品の失敗作だった。しかしセルリジエネを作った時よりも遥かに膨大な情報とエネルギーを注ぎ込んで完成に至ったそれは、ビッグゲテスター・ヴェーダがこれまでに生み出してきたどのヤムベイドよりも圧倒的に強く作られていた。

その戦闘力は、魔人ブウをも超越している。

「わかるよ。そちらも成功したようだね、人造超サイヤ人「ヤムチャキャノン」の完成に」

「私の技術、ヴェーダの技術、そしてこれまでに得られた超サイヤ人の細胞や戦闘データがあったればこそです」

「何より、ヤムベイドの身体にトランクスが直接サイヤパワーを送り込んでくれたのがありがたかったかな」

「ええ」

トランクスがヤムチャアニューに執着してくれたおかげで、超サイヤ人の研究がより加速度的に進んだのである。

そういった意味では勝手に自宅に上がり込み、ヤムチャアニューを攫っていった彼には寧ろ感謝していた。

たかがヤムベイドの一人、欲しければくれてやる。

リボンズヤムチャにとつて真に必要なのは優秀な配下ではなく、自らが神を超える為のきっかけに過ぎなかった。

このように良かれと思って相手を必要以上に強くしてしまうところは、父親のベジータとそっくりだとリボンズヤムチャがせせら笑う。

彼はこのリボンズヤムチャを倒すどころか、大きくパワーアップさせてしまったのである。

「さあ、始めようか」

10年以上待ったのだ。この時を。
傍観はもう十分だろう。

リボンズヤムチャは新しい玩具を手に入れた子供のように目を輝かせながら、魔改造ポタラ「ポタラドライヴ」の一つを自らの右耳に、

もう片方のポタラを人造超サイヤ人「ヤムチャキャノン」の左耳に括りつけた。

「ヤムチャの、真の变革を」

その瞬間、意志のないヤムチャキャノンと野心に満ちたリボンズヤムチャが合体し、新たなヤムチャが誕生した。

身体中の組織が一瞬にして変化し、自らが生まれ変わっていくのがわかる。

高揚する気分の中で肉体は静かな気を宿し、やがて収束していくのを感じる。

——これが神の気！　これがヤムチャ計画の到達点！

「ボクは、強いぞ……」

リボンズヤムチャが、リボンズヤムチャとなった瞬間だった。

切り札の龍拳爆発によって、窮地から見事バーダックを倒した孫悟空。

しかし彼との戦いで力を使い果たしてしまった悟空にはもう、ヤムチャヒリングとヤムチャリヴァイヴを相手にできる余力は残っていなかった。

「これは……？」

しかし、ヤムベイドたちはそんな悟空に攻撃を仕掛けてこなかった。

二人はふと何かに気づいたように立ち止まって目を見開くと、次に歓喜の笑みを浮かべた。

「あっはっはっは！　終わったね、あんたたち！」

「なんだと？」

ヤムチャヒリングが哄笑を上げ、ヤムチャが怪訝に眉をひそめる。

そんな彼らの前で、ヤムチャリヴァイヴが衝撃的な発言を言い渡した。

「僕たちのヤムチャ計画は完了した。たった今、リボンズは神の力を得た」

「神の力だと……まさか!」

その言葉を耳にした瞬間、ヤムチャが驚愕に目を見開く。

そして今まさに、その人物がこの地球に姿を現した。

「そうだよ」

ピシユンと、もはやお馴染みの風切り音と共に彼が地に降り立つ。

瞬間移動とは本当に便利なものだ。遙か遠くに離れている筈の彼らの本拠地から、一瞬にして転移してみせたのだから。

「リボンズヤムチャ……現れやがったな!」

はつと息を呑み、ヤムチャはその姿を見据える。

胸に「楽」と描かれた緑色の服は、原作のヤムチャが初登場時に着ていたものと同じだ。

背中には青龍刀の鞘が装備されており、髪型もまた馴染み深いロン毛である。

傷がついていないことを除けば、その顔はヤムチャであるヤムチャ・ティエリアーデと完全に同じだった。

ただ違うのは、彼の両耳にポタラらしき二対のイヤリングがついていることだ。

「久しぶりだねヤムチャ・ティエリアーデ。それに、孫悟空」

「おめえは……昔のヤムチャに似ているな」

「そうだよ。名前はリボンズ……リボンズヤムチャ。ボクがオリジナルのヤムチャさ」

「つてことは、おめえがそいつらの親玉なんだな。わざわざやって来たつちゆうのは、オラと決着をつけようつてことか?」

「正解だよ孫悟空。君の役目はもう終わったから、そろそろ渡してほしいと思ってね」

ヤムチャと同じ顔でありながら、ヤムチャでありながら——ヤムチャでは絶対にしないような涼やかな顔を見せてリボンズヤムチャ

が前髪を払い、優雅に告げる。

ふつと浮かべた冷笑の奥からは、悟空に対する包み隠せない執着を感じた。

「物語の……主人公の座を」

こうして直接会うのは初めてだが、やはり彼はヤムチャが思っていた通りの人物だったようだ。

その目的は、この世界の物語を自分色に染め上げること。

その為に彼は、物語の主人公である孫悟空を排除しようとしているのだ。

ヤムチャよりも冷ややかな声でそう告げられた悟空は、バーダック戦を通した満身創痍の身体を起こし、リボンズヤムチャと対峙する。

「そんなのはよくわかんねえし、はつきり言っただうでもいいけどよ……オラの命を奪おうってんなら、いつでも相手になるぞ！」

「……カカロット……っ」

力強く言い切ってみせた悟空の言葉に、バーダックが感慨深げに彼の名を呟く。

悟空も実の父親を殺したくなかったのだろう。ギリギリのところ急所を避けたことで、龍拳を受けた彼もまだ生き残っていたようだ。

だがそのバーダックとの戦いで消耗している今の悟空と対しても、リボンズヤムチャはただただ呆れ顔を浮かべるばかりだった。

「仙豆を食べるといい。それと、悟飯とナツパもここに連れてきなよ」

彼の体力回復を待つてやるのは前提として、リボンズヤムチャは意味深な言葉を後に続けた。

その言葉の意味を即座に理解したのは、ヤムチャを含むヤムベイドたちだけだった。

「……っ、リボンズ、まさか孫悟空をゴッドにする気ですか？」

「あははっ、さっすがリボンズ！ でもどうするの？ 何故か生きてるナツパを含めても、サイヤ人は五人しかいないじゃないさ。今アニューと戦っている未来トランクスでも引っ張ってくる？」

「その必要はないよ」

悟飯とナツパをこの場に連れてくる——それは今この場所に、五人のサイヤ人を集結させるといふ意味の言葉だった。

悟空、ベジータ、悟飯、ナツパ、そしてバーダック。

多くのサイヤ人を一か所に集めて行うことと言えば、彼らにとっては一つだった。

「超サイヤ人ゴッドって奴か……」

ヤムチャからいわゆる「原作知識」を与えられた悟空が、遅れて彼の意図を察しその名を呟く。

超サイヤ人ゴッド——サイヤ人の神。

善の心を持った五人のサイヤ人から一人のサイヤ人がエネルギーを受け取ることよって誕生する、超サイヤ人を凌駕する存在だ。

実現できるかどうかはさておいて、それは悟空にとつて、今後有用になっていくだろうと事前にヤムチャから授けられていた知識だった。彼が精神と時の部屋で至った超サイヤ人2という変身も、元々はヤムチャの「原作知識」を経由して知ったのが始まりである。

故に、その信憑性は疑っていない。

「本当ならゴッドの誕生には六人のサイヤ人が必要なんだけど……この星には一人、サイヤ人ではないけどサイヤ人の力を持つ者がいるからね」

ヤムチャと同じ顔でありながらやはりヤムチャらしくなく、無性に腹が立つ竦め笑いを浮かべながらリボンズヤムチャが言う。

そんな彼が顔を向けた先には、今しがた瞬間移動を使って孫悟飯とナツパの二人を連れてやってきたヤムベイドの姿があった。

「そうだろう、セルリジエネ。いや、プロトタイプ人造超サイヤ人、リジエネ・レジエッタ」

「……………」

「人造超サイヤ人だっけ?」

セルリジエネ——ヤムチャの協力者としてこれまで主に戦い以外の面で悟空たちを助けてくれた男が、憤りを隠せない目つきでリボンズヤムチャを睨む。

そんな彼は、事態もわからずこの場に連れてこられ、戸惑っている

ナツパと悟飯を置いて言い放った。

「後悔することになるよ、リボンズ。今まで何人もの強敵が、そうやって孫悟空に足元を掬われてきた」

「そうだね。それで彼らと同じように倒されるものなら、所詮ボクも足元がお留守……ヤムチャだったということになる」

あまりにも大胆不敵かつ余裕綽々とした姿で佇む彼は、そんなセルリジエネの忠告にも肩を竦めるように言い放ち——その場から姿を掻き消した。

「でも」

一瞬にも満たない交錯——。

まばたきを終えた頃には、移動した彼の傍で地に屈しているベジータの姿があつた。

「がっ……!?!」

「ゲンサクより随分先取りしてしまった超サイヤ人2の彼ですら、一撃でこの有様だ。ここまで強さの次元が違うのは、ボクからしても望ましいことじゃない。それに……」

悟空たちが反応すらできないスピードで動いたりリボンズヤムチャが、小指一本で超サイヤ人2のベジータを失神させたのである。

あまりにも次元が違う戦闘力である。

そして何よりも、圧倒的な力を感じるのに「気」を感じられないのがまた、悟空たちには一層不気味だった。

隔絶した自らの力を披露した彼は、王者の余裕を見せつけるように意図を明かす。

「超サイヤ人ゴッドになった孫悟空に打ち勝てば、ボクの有用性は不動のものとなる」

人を物語だの駒扱いした矢先に、自らの有用性を主張する。

目まいを覚えるような傲慢さにヤムチャが歯を軋め、悟空はただ静かに敵の姿を見据えた。

「あれを見なよ」

その時、ふとりボンズヤムチャが、上空を見上げた。

「あれは……!?!」

「なんだあれ？ タマネギみてえだな」

「ビッグゲテスター・ヴェーダ……ヤムベイドの故郷だ」

空——夕焼けの広がる空の上には、星々とは明らかに違う物体が一つ漂っていた。

悟空がタマネギのようだと根も葉もない表現をしたが、まさにそう言い表すのが相応しい形状をしている。

まるで月のように巨大な物体が徐々に大きくなっていき、この地球へ近づいているのがわかる。

それこそがリボンズヤムチャによつて改造、進化を施された機械惑星ビッグゲテスターの成れの果て——ビッグゲテスター・ヴェーダの姿だった。

「地球圏へ移動させたのか！」

「大切に保管しておく必要がなくなったからね。ボクがここまで強くなれた時点で、アレの役目はもうほとんど終わっている。それに……見なよ」

彼らヤムベイドの本拠地である機械惑星が、自ら移動してこの地球圏にやってきた。

それだけじゃない。そう言つてリボンズヤムチャが指差すと、巨大な楕円形の物体から無数の粒のような「何か」が飛び出し、超スピードで向かってきているのがわかった。

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

「狼牙風風拳！」 「狼牙風風拳！」

下半身が存在せず、上半身だけの身体で「気」のバーニアを吹かしながら飛行している人型の編隊。

ヤムベイドと違い、一目で機械であることがわかるメカメカしい外見をしたヤムチャ状の姿は、リボンズヤムチャによる新兵器のお披露目だった。

「な、なんだあれは……！」

「簡易生産型ヤムベイド、「ヤヤ」だ」

「うわっ……キモッ」

「ヒリング……気持ちはわかる」

彼らの味方である筈のヤムチャヒリングが生理的嫌悪感を露わに、引きつった表情で空を眺める。

それほどまでに、壮観かつ圧倒的な光景だった。

ビッグゲテスター・ヴェーダから飛び立つなり数分で大気圏を抜けてきた「ヤヤ」の軍勢は、散り散りになって地球の町々へと向かっていく。それはまるで空を流れていく濁流のようだった。

まずい！ その軍勢を前に呆気にと取られてしまったのが致命的となり、ヤムチャが急いで舞空術で飛び上がり都の方角に目を向ければ……そこには噴き上がる爆炎とおびただしい黒煙の姿が視界に広がっていた。

「早くしないと、彼らに地球人類が滅ぼされてしまうかもね」

「貴様あああっ!!」

面妖なヤヤの外見に騙されてはいけない。

あれはこの地球人類を滅ぼす最悪の対人兵器だ。ヤムチャは怒りに任せてリボンズヤムチャに気攻波を放つが、彼はそれに反応すら返さず無傷であしらってみせる。

——本当に……本当に神の次元に至ってしまったのか！

合体13号や超サイヤ人3のバーダックを持ってしても、比較にもならない理不尽な強さだ。

リボンズヤムチャの思う壺になるのは心底癪であったが、もはや超サイヤ人ゴッドでなければ戦いの舞台にすら上がれないのは明白だった。

「悟空！ リボンズを倒してくれ……絶対だぞ！」

悔しさを滲ませた顔で戦友に言い渡すと、ヤムチャは自らの「気」を

解放してヤヤの軍勢に「フア練気狼牙」を叩き込んでいく。

今の自分にできることは、ほんの少しでも多く地球の人々への被害を減らすことだけだった。

そんなヤムチャの思いを受け継ぎ、悟空が本気の日つきで呼び掛ける。

「悟飯！ リジエネでもいいけど仙豆持ってるか!? ベジータと父ちゃんに食わせてやれ！」

「は、はい！ あれ？ お父さん今「父ちゃん」って……」

「ああ、おめえのじいちゃんだ。そのことは、後でゆっくりみんなで話そう」

後があればな……珍しく弱気な言葉を、息子に聞こえないように呟きながら、悟空は怒りに染まった顔をリボンスヤムチャに向けた。

さつきから言っていることはわけわからねえが、アイツがクウラやコルドたちと似たような奴なのはわかる。

自分の為に関係のない人間を次々と殺していくのであれば、もはや是非もなかった。

——そして、悟空たちはセルリジエネ主導の下、急いでゴッド誕生の儀式に取り掛かった。

仙豆で回復したバーダックが素早く事態を飲み込むと、無言で息子と孫の手を掴み、ナツパとベジータの方を睨む。

お前らカカロットの言うこと聞かないとぶっ殺すぞと、無言ではあったがそう言っているかのような眼差しだった。敗者は勝者の言うことに従うのがサイヤ人の流儀だと口では語っていたが、その本心がどうなのかはわからない。もしかしたら単純に息子の手伝いをしたかったのかもしれないし、リボンスヤムチャのことが気に入らないだけなのかもしれない。

その心境は本人にはわからないが、彼があっさりと協力してくれたのは幸いだった。

一方でナツパは悟空たちへのわだかまりは解けていないものの、このままリボンズヤムチャを放っておけば自分が大切に思っている双子の命まで危ないと理解し渋々了承。その際バーダックの顔を見て幽霊でも見たように驚いていたものだが、二人には過去に何か接点があったのかもしれない。真偽は不明であるが。

そして、ベジータ——プライドが高くこの中で最も厄介な性格をしている彼だが、バーダックが「サイヤ人の王子のくせに、器量の大きさはベジータ王に負けているようだなあ」と煽るなり彼は「俺がベジータだあ！」と奮起した。そのプライドの高さはある意味純粹であるが故に、煽り方を心得れば割と扱いやすいのもまた彼なのかもしれない。

悟空と悟飯、ナツパからも懸命に説得した甲斐があり、ベジータも渋々承諾してくれた。

「地球人が何人死のうが知ったことじゃないが、奴の思い通りにされるのは気に食わん！」

——というのがナツパと悟飯の手を掴んだベジータの言葉である。そしてそんな彼の手を掴み、最後の六人目であるセルリジエネが言う。

「さて、果たして上手くいくか……確かに僕はサイヤ人の細胞をベースにして作られた存在だけど、それだけで成功するものだろうか」

「まあ、なるようになるさ」

「この面子だと、善の心つていうところで引っ掛かりそうだが……はっ、俺には無縁だな」

「おじいちゃん……」

孫悟空——悪の心がないのは既に、アックマンからお墨付きだ。

孫悟飯——優しさが仇となるほどの善人だ。間違いなく条件を満たしている。

ナツパ——極悪人だったが心が折れてからは穏やかになった。更生したと捉えるかは微妙だが。

ベジータ——最近悪いことはしていないが、未だ独身なので危うい。

バーダック——どこまでもサイヤ人らしいサイヤ人。純粹ではあるが、善人とはとても言い難い。

セルリジエネ——そもそもサイヤ人ではない。

純粹サイヤ人が四人、混血サイヤ人が一人、サイヤ人の細胞を持った人造人間が一人。

改めて見渡すと、何とも混沌とした顔ぶれである。この六人でゴツドが誕生するかどうかで言えば、提案したりボンズヤムチャサイドも大して期待しておらず、成功すれば儲けもの程度の認識だったのかもしれない。

しかし五人が悟空に向かって己のエネルギーを注ぎ込んだ時、奇跡は起こった。

「これが、超サイヤ人ゴッド……確かにこれなら、アイツと戦えるかもしれないねえ」

奇跡的な出会いが奇跡を呼んだと言えば、少しだけ合点が行くようにも思えるだろうか。

悟空の「気」もまたリボンズヤムチャと同じように感じられなくなり、彼はその名にある通り悟りを開いたような目でリボンズヤムチャの姿を見やった。

界王拳とは違う「赤」に染まった悟空の姿を見て、それまで空を飛び回ってヤヤの軍勢と戦っていたヤムチャが一先ずの安堵を得た。

だが、それは未だ、リボンズヤムチャという「神」に挑戦する資格を得ただけに過ぎなかった。

「遂に審判が下される。超サイヤ人ゴッドになった孫悟空か、このボクか、そのどちらかが物語の行く末を決める。それでいい」

超サイヤ人ゴッドの誕生に喜びも驚きもしないリボンズヤムチャが、淡々とそう語り戦闘の構えを取る。

静かに構え、お互いの敵と対峙する神と神。

その二人が同じタイミングで動き、激突した。

「か、め」

「リボーンズヤムチャ！」

「は、め」

「狼牙風風拳！」

「波あああつ！」

「行く！」

——それぞれ全く別の方法で人を超えた者同士による、最終決戦が始まった。

再生（ヤムチャ）

ビッグゲテスター・ヴェーダ。

悟空が「デカイタマネギみたい」だと評した機械惑星は、直径で月ほどの大きさがあり、星内には数多の工場区画が広がっていた。

トランクスはヤムチャアニューを助け出した後、この星のコアを指して手当たり次第に探り回っていた。

「トランクス、あれ！」

「あれは……ドクター・ゲロ！」

襲い掛かる量産型人造人間と、狼牙風風拳を仕掛けてくるヤヤの軍勢を斬り落としながら、トランクスたちはやがて突き当たった区画で銀色の光沢を放つ機械仕掛けの科学者と対面した。

——アルケー・ゲロ。

「ここから先へは、行かせん」

「貴様……貴様のような奴に、悟飯さんたちは！」

トランクスにとつて誰よりも因縁深い人造人間の——その製作者との戦いが始まった。

地球は、ヤヤの軍勢を前に窮地に陥っていた。

一体一体の戦闘力は気弾の一撃で破壊できるほど脆弱なものだが、彼らは接近した相手に狼牙風風拳を仕掛けた後、サイバイマンのように組みついて自爆するようにプログラムされているらしく、油断すれば超サイヤ人さえも手傷を負う火力が備えられていた。

クリリン、天津飯、悟飯たちは各地に散らばってその「ヤヤ」の撃退に当たった。

その際、ピッコロはもはやなりふり構っていない場合ではないと神との同化を決意し、神もそれを了承。ドラゴンボール消滅のリスクを承知した上で神コロ様が誕生せざるを得ないほどに、ヤヤの軍勢は地球人類に対し甚大な被害をもたらしたのである。

「ちっ、ピーピーうるさいヒヨコ共め……まとめて挨拶してやらねえとなあ！」

「ハ、ハゲ……！」

「ナツパ、来てくれたのか！」

「隠れてなラズリ、ラピス。こういうのは俺の仕事だ！」

「か、かつこいい……」

ナツパは悟空の超サイヤ人ゴッド化に協力した後、脇目も振らずに双子たちの住む田舎へ戻り、その町に攻め込んでいたヤヤの軍勢を撃滅すべく得意技のフレイムピラーを放ち一掃してみせる。

かつて大勢の地球人を殺したその技が、双子を始め大勢の命を救うことになるとは因果なものだろう。

しかし、そんなナツパの攻撃さえも次から次へと襲い掛かってくる圧倒的なヤヤの物量の前では気休め程度にしかならなかった。

それほどまでに、数が多すぎるのだ。

「気功砲！」

戦力比はざっと見て100万対1と言ったところか。

空一面を覆い尽くすヤヤの軍勢は、歴戦の武道家である天津飯の精神力でさえも正気を保つのが一苦労な光景だった。

しかし、彼は退かない。亡き友と交わした約束を守る為に、この地球を誰にも奪わせるつもりはしなかった。

「守ってみせる……餃子が守ろうとした地球を！」

俺は地球を守る、鶴仙流の武道家だ！ そう叫び、天津飯は師匠から授かった多彩な技と、友から受け継いだ超能力を持って敵の軍勢に挑んだ。

簡易生産型とは言えヤムベイドである「ヤヤ」の相手をするには、地

球人戦士だけではあまりにも荷が重い。

しかし、ならばサイヤ人は何をしているのかと言うと、ベジータとバーダックの相手には本家ヤムベイドであるヤムチャヒリングとヤムチャリヴァイヴが立ちはだかり、彼らの動きを釘付けにしていた。

思うように動けない敵の鬱陶しさにベジータが苛立ち、バーダックが舌打ちした。

「ちっ、貴様ア！」

「あんたの相手は、あたしらだっつて！」

超サイヤ人2のベジータでさえも、ヤムチャヒリングと戦闘能力はほとんど同じなのだ。

その上、隙あらばヤヤたちが後ろから自爆特攻を仕掛けてくる乱戦模様になっているともなれば、個の力では最も優れているバーダックさえも迂闊には攻められなかった。

「俺の超サイヤ人3は、こういう状況じゃ使いにくいな……」

ベジータ同様超サイヤ人2の状態でヤムチャリヴァイヴを相手取っていたバーダックは、自らのスタミナを考慮に入れて最善の選択を考える。

最も簡単なのは、この地球ごと諸共全てを吹き飛ばしてしまうことなのだが……自らの後ろでヤヤの軍勢相手に小さな身体で挑んでいる孫の姿を見てしまうと、バーダックには何故かそれを実行することができないでいた。

カカロットとの戦いに負けたことで、バーダックは彼らの生きる未来にある種の興味を抱いたのかもしれない。

ならば、この地球を滅ぼすわけにもいくまい。

「ヤムチャー！」

ほんの気まぐれか。それとも焼きが回ったのか。

気づけばバーダックはこの鬱陶しいヤムベイドやヤヤのベースになっっている存在、ヤムチャに対して呼び掛けていた。

「どうしたバーダックさん？」

「ヴェーダへ行け」

「ヴェーダへ？」

「このままじゃキリがねえ。アレをなんとかすれば、このゴミ共も止まるかもしれねえからな」

ヤムチャリヴァイヴとの攻防の最中、背後から迫って来たヤヤの首を裏拳で碎き割りながら、バーダックが推奨する。

ヤヤの発生源であるビッグゲテスター・ヴェーダへ行く。そうすることで、手っ取り早くこの状況を打開できるのではないかと考えたのである。

そんなバーダックの言葉に肯定するように、メガネを掛けたヤムベイドが言い放った。

「……ヴェーダのコアを掌握し、コントロールを奪うんだ」

「リジエネ！ お前大丈夫なのか!？」

「失敗作のプロトタイプが、無理をすればこうもなるさ」

「お前……!」

孫悟空を超サイヤ人ゴッドに仕立てた後、彼——セルリジエネはふらりと貧血を起こしたようにその場に倒れた。

ドクター・ゲロによつて試作的に製作されたプロトタイプの人造人間である彼の身体には、様々な面で欠陥が多い。それこそ本格的な戦闘を行えばたちまちシステムに異常をきたしてしまい、人並みの「気」を放つだけでも体内のバランスを崩してしまうのだと言った。

故にこそ、彼はこれまでヤムチャから戦うことを止められ、自発的に「気」を消して活動していたのである。

そんな身体で超サイヤ人ゴッドの儀式に参加したことで、今の彼は当然のように身体の不調を起こしていた。

今にも倒れそうなセルリジエネを容態を心配し、ヤムチャが判断を鈍化させる。

ここで自分が抜けてしまったら、彼がヤヤに殺されてしまうのではないかと。

しかし、そんなヤムチャを一喝するように緑色の戦士が駆けつけてきた。

「何を躊躇している、ヤムチャ!」

「ピッコロ……!」

神と合体し一人のナメツク星人に戻った彼の声に、ヤムチャは目を見開いた。

神殿から大急ぎで飛んできたのであろう彼は急旋回して周り込むと、ヤムチャに向かってくるヤヤの軍勢に向けて気攻波を撃って薙ぎ払う。

「生きる為に戦えと言ったのは、貴様の筈だあ！」

それは、ピッコロからの叱咤と激励だった。

「自分の運命を呪っても純粹に生き続ける！　それが、貴様の戦いだと！」

言うなり、彼の身体から潜在エネルギーが解放される。

本来の姿に戻った彼は、眩い「気」のオーラを纏いながら敵陣へと踊り込んでいく。

ピッコロの戦いぶりはこれまでのヤムベイド戦で役に立っていないかった鬱憤を晴らすかのように、まさに鬼神の如しであった。

紙一重で敵の狼牙風風拳を交わして反撃の蹴りを打ち込み、それに挟まれた金属ヤムチャ体が爆発した頃には、既に次の目標に手をかざして気弾を放っている。

それほど俊敏に、鋭角的に、彼は老練かつ力強い戦闘スタイルで敵を破壊していく。

とは言え、敵は圧倒的な物量に任せて彼を取り囲んでいる。

彼が敵の包囲網に穴を空けても、すぐに別のヤヤが現れてその隙間を埋めるのだ。

くそつたれめ！

そうピッコロが毒づいた瞬間、一体のヤヤが繰り出した狼牙風風拳の刃が彼の肩を切り裂いた。

身を乗り出しかけたヤムチャの耳に、再びピッコロの声が届く。

「行け、ヤムチャ！　生きて奴らをぶっ壊せ！」

「ピッコロ……」

ヤムチャは僅かに顎を引き、彼がどれほどの思いを込めてその言葉を放ったのか察する。

生きる為に戦えとは、第23回天下一武道会の二回戦で、かつてヤ

ムチャが彼に贈った言葉だ。

その言葉を今になって蒸し返してきた意味を察し、ヤムチャは僅かに笑みを浮かべながら覚悟を決めた。

「死ぬなよ、ピッコロ、リジエネ」

「……当然だ」

「行きなよ、ヤムチャ」

「ああ、行ってくる」

そしてヤムチャは自らの額に指を当てると、ヤードラット星での修行で習得した「瞬間移動」を使ってその場から離脱していった。

ビッグゲテスター・ヴェーダから解き放たれたヤヤの軍勢は、この地球に対して未曾有の被害をもたらしている。

しかしそれさえも、リボーンズヤムチャにとってはささやかな余興に過ぎなかった。

所詮はこの戦いをより面白くさせる為の彩りの一つだ。リボーンズヤムチャの目的はあくまでも、赤く輝くサイヤ人の神との決着だったのだから。

共に雲の上へと飛び出すと、不遜な眼差しで見下ろしながらリボーンズヤムチャが語る。

「孫悟空、君たちは今まで自分の意思で戦い、これまでの人生を楽しく生きてきたつもりだろうけど……その人生は全て、一柱の神に敷かれたレールの上を渡らされているに過ぎない」

「おめえが、その神様だつて言うのか?」

「そう、神そのものだよ」

「だからって、こんなことをしていい理由にはならねえ筈だ」

「そうかな?」

孫悟空の人生は全て、神である自分が思い通りに動かしてきたもの

だったのだと。

常に賽を振ってきたのは上位次元の存在であり自分であり、君たちは振られた賽の出目に従うことでしか生きられない哀れな存在であると、リボーンズヤムチャが断定する。

「救世主なんだよ、ボクは」

リボーンズヤムチャの手に掛ければ、この世界に生きる者たちは等しく駒に過ぎない。

殺すも救うも意のままであり、それが当然なのだと思下ろして嘲笑った。

「破壊神が自分たちの尺度で星を壊すのと一緒さ」

「なんだそりや……じゃあ、その破壊神っていうのは悪い奴なのか？」
「いいや、違う。神の破壊というものはいつだって、世界を救済に導くのさー！」

リボーンズヤムチャの突き出した拳が予備動作もなく襲い掛かり、超サイヤ人ゴッドの悟空がそれを右腕で受け止める。

受け止めながら足払いを掛けてきた悟空の蹴りを、リボーンズヤムチャがひらりと身を回転させていなし、振り向きざまに繰り出した左手の裏拳を悟空に浴びせ、体勢を崩させた。

「君がボクによって滅ぼされ、踏み台となるのもまた救済だ。こんな風にね！」

間髪入れず両足を叩きつけ、リボーンズヤムチャが悟空の身を雲の下へと叩き落していく。

自分が上であり、お前が下だと。それを見せつけるような位置取りで見下ろすリボーンズヤムチャの視線を受けながら、その身を数回転させて体勢を立て直した悟空が不敵に笑った。

「つ……へへ」

「何かおかしいかい？ 孫悟空」

「わりい、ちよつと……おめえの言うことが、あまりにもわけわかんねえからよ」

—— ついつい、笑えてきちゃったんだ。

姿が掻き消える。

その言葉と同時にリボーンズヤムチャの背後に回り込んだ悟空が、リボーンズヤムチャの背中を狙い、右肘を振り下ろしてきたのだ。その攻撃を察知したリボーンズヤムチャは即座に重力に逆らった逆さの体勢へ身を傾けることで、彼の攻撃を両手で受け止めてみせた。

密着した体勢から、その目に静かな怒りの炎を燃やした悟空が言い放つ。

「おめえのおかげでみんなと会えたって言うんなら、感謝しねえとな」「ふふ……どうやって?」

超サイヤ人ゴッドの力で捻じ伏せようと力む悟空の両腕を抑えながら、リボーンズヤムチャが余裕に満ちた眼差しを向けて問い質す。

そんな彼に、悟空がカツと目を見開いて頭突きを喰らわせた。

「おめえより強くなったオラを見せてな!」

「……っ、それは傲慢だよ!」

戦闘が始まって以来、リボーンズヤムチャが悟空から初めて浴びたクリーンヒットである。

彼の頭突きによって密着した体勢が解かれたリボーンズヤムチャに向かって、畳み掛けるように悟空が拳を振るった。

「ゴーマンってなんだ?」「そうやって相手を見下して侮る、愚かな人間のときさ!」「おめえだなりボンス!」「ボクは神そのものだと言った!」——そんなやりとりを交わしながら、互いに神の領域に至った者同士である二人の打ち合いが空を、大地を揺らしていく。

「でりやあああつ!」

「ははは、そうだ……そうでなければここまで成長を待った意味がない! この戦いの意義も!」

「ぐっ……! おめえは、オラが倒すぞ!」

「しかし、それが本気なら君はボクを超えられない! いけ、ファイナアンゲ新練気狼牙!」

超サイヤ人ゴッドの力を限界まで引き出し、フルパワーで放つ拳をことごとく受け止められる悟空。

リボーンズヤムチャの拳もまた戦い慣れした悟空の体捌きを前に

紙一重で届かず、二人はここまで一見互角に戦っているように見えた。

しかし徐々に……まるで今になって自分の身体が馴染み始めたとも言おうように、リボンズヤムチャの動きは時間が経つほどキレを増していき、数々の技までも撃ち出してきた。

「うわっぐ！ おめえ……ヤムチャの技も、使えるのか！」

「それだけじゃない！ ボクは君たちが使う全ての技を知り尽くしている」

「ピッコロの……魔貫光殺砲っ」

ヤムチャの練気弾に、ピッコロの魔貫光殺砲。

天津飯の気攻砲にクリリンの気円斬、さらにはターレスのキルドライバーやフリーザのデスビームなど、様々な技を見せつけるように放つリボンズヤムチャの多彩さに悟空が唖った。

いずれも、これまでヤムベイドたちがビッグゲテスター・ヴェーダに蓄積させてきた戦闘データによって習得した技である。

リボンズヤムチャと合体したヤムチャキャノンは人造超サイヤ人であると同時に、ビッグゲテスター・ヴェーダに詰め込まれた全ての情報を戦闘能力に捧げた究極のメタルヤムチャでもある。

そのヤムチャキャノンの力を持つリボンズヤムチャには、彼が知る限り全ての戦士の技を扱えるも同義だった。

「本当に神様みてえな奴だな！ だけど、オラだって……！」

負けちやいねえ！ そう叫び、赤い光を纏った悟空が激しい弾幕を掻い潜りながら一撃、魂を込めた正拳突きをリボンズヤムチャの額に喰らわせる。

しかしその瞬間、ダメージを受けた筈の彼が冷たく笑い、悟空がハッと愕然とした表情を浮かべた。

——戦闘開始から数十分が経過したことで、悟空が纏っていた赤いオーラがとうとう消失してしまったのである。

「残念だけど、時間切れだ！」

超サイヤ人ゴッドの変身が解けたのである。

そんな彼の姿を名残惜しそうに見つめながら、リボーンズヤムチャはそろそろファイナーレだと容赦なく拳を突き出した。

しかし、悟空は諦めなかった。

何故ならば背負うものがあつたから。

負けられない理由があつたから。

この地球に、守るべき者がいたから。

そして自分自身、ただただ純粋にこの戦いに勝ちたいと思つたから。

その為なら——！

「神様だって、超えてやるさあつ！」

黄金色の髪を逆立てた悟空が、自身の心臓を貫こうとしていたりボーンズヤムチャの拳に反応し、両腕をクロスさせて致命傷を避けてみせる。

勢いだけは殺すことができず悟空の身体はふつとばされ岩盤へと叩きつけられてしまうが、それでもまだ悟空には意識があつた。

まだ、戦える。まだ勝てる。彼の血が、思いが、そう叫んでいる気がした。

そういう時は得てして、何度打ちのめされようかと熱く立ち上がれるのだ。

「……やはり、ゴツドの世界を吸収したか。流石、孫悟空……物語の主人公だ。しかし……」

岩盤から素早く復帰して飛び出してきた悟空が、果敢に猛攻を仕掛け、鋭いラッシュを浴びせ掛かる。

繰り出す攻撃の威力は、超サイヤ人ゴツドの状態と比べてもほとんど低下していなかった。

そんな彼との戦いに、リボーンズヤムチャが始めは不快さを表し、次に冷笑へと立ち直る。

悟空が一瞬の間に打ち込んできた数百発もの拳を捌き切った後、リボーンズヤムチャは高らかに叫んだ。

「ボクが！」

「ぐっ……！」

一閃、悟空の左脇腹に蹴りを打つ。

「ボクこそがー！」

一閃、腰の折り曲がった悟空の背中に肘打ちを叩き込む。

悶絶する彼を優雅に見下ろしながら、史上最強のヤムチャがハンマーパンチを喰らわせ、主人公の身体を地面へと叩き落した。

「リボーンズヤムチャだー！」

ヤムチャであってヤムチャではない。

我こそがこの世に唯一無二の存在たる、生誕した大地のヤムチャである。

自らの存在が超サイヤ人ゴッドさえも凌駕したことを確信し、リボーンズヤムチャはまるで壇上で演説を行うように両手を広げて高説した。

「くっ……！…なんて奴だ……！」

陥没した地面からしばしの間を置いて復帰してきた孫悟空が、ボロボロになった上着を脱ぎ捨てて傷だらけの上半身を晒す。

超サイヤ人ゴッドの世界を吸収した悟空でさえも、リボーンズヤムチャとの力の差はあまりにも大きかった。

「はあ……はあ……っ、くそっ、界王拳だあぁッ！」

戦いの余波で受けたおびただしい地形変動によって、地面からマグマが噴き上がったと同時に超サイヤ人の悟空がゴッドとは違う「赤」のオーラを纏い、飛翔していく。

スーパー界王拳。超サイヤ人ゴッドでなくなってもまだ、打てる手を全て打ってみせるといふ闘志の表れだった。

彼が見せた諦めの悪い姿勢を前に、リボーンズヤムチャが愉快気に笑いながら気攻波を連射する。

「そうだ。足掻くがいい、抗うがいい！ その自由は君のものだ」

「ぐうっ……ぐあああああッ!？」

「これがボクの方……！ リボーンズヤムチャー！」
リボーンズヤムチャの容赦の無い凶弾が次々と悟空に襲い掛かり、崩れ落ちていく大地と共に悲鳴を上げていく。

絶え間のない嵐のような弾幕の前では、スーパー界王拳で上昇した速度を持ってしても接近するどころか回避さえ覚束なかった。

「さようなら、孫悟空」

リボーンズヤムチャが自らの勝利が間近に差し迫ったことを確信し、界王拳と共に超サイヤ人の状態ですらなくなった悟空が薄れゆく意識の中で自らの「死」を予感する。

——その時だった。

(? なんだ……?)

走馬灯というものなのだろうか。

どこからともなく、不意に多数の人々の「声」が聴こえてきた。

『うわああ！』

『悟飯！ くっ、そまあああ!!』

際限なく現れる圧倒的な物量を持って襲い掛かる、無数のヤヤの軍勢。

その猛攻に悟飯が彼らの自爆攻撃を受けてしまい、その悟飯を庇う為にピッコロまでもが巻き込まれていた。

そんな二人の元へ容赦なく、後に続くヤヤの軍勢が滝のように襲い掛かっていく——。

(悟飯！ ピッコロ！)

悟空が幻視したその景色に手を伸ばすと——次の瞬間には、別の場所ですべて倒れている天津飯の姿へと切り替わっていた。

『はっ！ はっ！ く、くそっ、身体が……!』

ヤヤの軍勢に対して新気攻砲を連射していた天津飯が、とうとう反動に耐え切れず地に落ちた光景である。

そんな彼の元へ、まるで死体に集る砂漠のハイエナのように迫っていくヤヤの軍勢——

(逃げろ！ 逃げろ天津飯！)

『も、もうもたねえ……』

(ク、クリリン！)

クリリンも、彼の援護に回っていた亀仙人も、絶体絶命の窮地だった。

そのまた別の場所では鶴仙人やサイボーグ桃白白、ギラン、ナム、パンプット、チャパ王など、懐かしい顔ぶれがヤヤの軍勢と戦い、追い込まれている光景が見えた。

それもまた一度超サイヤ人ゴッド——「神」になった影響なのだろうか、悟空はこの地球で戦うあらゆる人々の命を感じていた。

『くそつたれがああー！』

体力の消耗によって、次第にヤムチャヒリングに圧され始めたベジータが怒りの叫びを上げる。

その後ろでは、いよいよ超サイヤ人3を解放するほど後がなくなつたバーダックが、しきりにパオズ山の方角を守護しながら奮戦している姿が見えた。

見える。

聴こえる。

感じる。

チチ、ブルマ、牛魔王、ウーロン、プーアル、ウミガメ、カリン様、ヤジロベエ、ミスターポポ。

この星で、今も戦っている人々の思いが。

悟空は自分の命が「死」に向かっているこの瞬間、消えゆく彼らの鼓動を感じ取っていた。

誰も彼もが追い詰められていた。

このままではみんな一緒に、死んでしまう。

「みんな……死んじまうんか……？」 このままいいように、踏み潰されちまうのか……」

悟空は自らの身を襲う気弾の嵐に対し、胎児のように身体を丸めながら呟く。

——違う！　こんなものを見る為に、戦っていたんじゃない！

仲間の死を、大切な人たちの最期を見る為に、超サイヤ人ゴッドになつたんじゃない。

勝つ為だ。

負けない為だ。

守る為だ。

強くなる為だ。

そして、手に入れる為だ。昔、亀仙人のじつちやんが言つてたような、面白おかしく暮らしていける人生を。未来を。

だから。

オラは——

「そんなこと……」

グツと血が滲むほど強く拳を握り締め、身体中の全てを振り絞つて内なる力を解放する。

大きく目を見開いた悟空が、あらん限りの声で叫んだ。

「そんなこと……許さねえーっ!!」

瞬間、悟空の力が拡大した。

両目が超サイヤ人ゴッドの「赤」に輝いた直後——その色がさらにもう一段階変化する。

——それは、新たな覚醒だった。

そして、超サイヤ人ゴッドに秘められた能力の解放でもあった。

悟空の身体を赤色化させていた輝きがさらに増大し、圧倒的な量の「青い光」が放出されていく。

その光景に、リボーンズヤムチャが驚きを隠せない様子で立ち尽くす。

「そんな……!」

放たれた青い光に煽られ、悟空の身体を襲っていたリボーンズヤムチャの気弾の嵐が押し返されるように吹き飛んでいく。

それだけではない。

悟空の身体から放出された青い光は龍のように天へ昇った後、地球全土へと拡散していき、地上を襲うヤヤの軍勢を次々と薙ぎ払っていった。

リボーンズヤムチャが今度こそ感情を剥き出しにした目で、青い光の中心部に立つ彼の姿を見据える。

超サイヤ人ゴッドよりも荒々しく、超サイヤ人よりも神々しい。

闘争への強い意志を漲らせた孫悟空が「神」たるリボーンズヤムチャと対峙する。

「……………続きをやろうぜ、リボーンズ。勝負はここからだ」

青く染まつた髪を逆立てた、地球育ちのサイヤ人が構えを取る。

超サイヤ人ゴッドの力を持ったサイヤ人の、超サイヤ人。

伝説を超えた最強の戦士、超サイヤ人ブルーの生誕だった。

最終回 ヤムチャ

転生したらヤムチャがりボンズになった件（Aパート）

この姿には、みんなの魂が集っている。だから、負ける筈はない。自身の内から湧き上がってくる無尽蔵な力に、孫悟空は強くそう感じていた。

「感謝してほしいな」

蒼炎を纏う究極の超サイヤ人になった悟空の耳に、リボーンズヤムチャの耳当たりのいい声が届く。

戦友ヤムチャと同じ顔をした彼が、挑発的とも言える口調で続けた。

「君がその力を手に入れたのは、ボクのおかげなんだよ？ 孫悟空……」

両耳のイヤリングから金色の輝きを放ちながら、神の気を放出するリボーンズヤムチャが正面に立ちふさがる。

超サイヤ人ゴッドでも敵わなかった、今までの敵とは別次元の力を持つ強敵。悟空は初めて砂漠で出会った時のヤムチャと同じ恰好をしている彼の姿を、すがめて見つめた。

「そいつは、嘘だろ」

はつきりと彼の「強がり」を断定した悟空の言葉に、彼が僅かに目つきを変える。

その表情の変化が何よりも、リボーンズヤムチャの心境を物語っていると云えた。

「超サイヤ人ゴッドまでは予定通りだったおめえでも、ここまでは望んでなかった筈だ」

「……………」

「おめえが何でもかんでもそうやってわかったような顔をしてんのは、そうでもしなきゃやってらんねえからだろ？」

沈黙を返すリボーンズヤムチャに、青色のオーラをより激しく放出

させた悟空が対峙する。

さつきまでは彼の姿が高い場所にあるように見えたが、今は十分に手の届く場所にあるように見える。

故に、何となく見抜くことができたのだ。

彼が自身の戦友ヤムチャと比べて、いかに空虚な力を身に着けているのかを。

「おめえ、オラには勝てねえよ」

言い放った次の瞬間、リボーンズヤムチャの拳が視界に広がった。

その腕が伸び切るよりも先に、悟空が振り払った右手が彼の拳を弾き、返す膝蹴りがリボーンズヤムチャの腹部を捉え腰を叩き折っていた。

驚きに目を見開くりボーンズヤムチャ。その彼に、悟空は右手をかざした。

「だけどおめえだけは……勘弁なんねえんだ！」

「……！」

気合い砲がりボーンズヤムチャを吹き飛ばし、彼の身体を初めて地上へと叩き落していった。

荒野に聳える幾つもの岩山を貫通しながら、体勢を立て直し、再び神次元の速度で迫ってきたリボーンズヤムチャが剛拳を乱打する。

リボーンズヤムチャの動きは、確かに速い。今まで戦ってきた者たちと比べればまさに次元の違うレベルであり、拳の一つを取ってもさながら光の速さで飛んでくる剣山のようなようだった。

だが、超サイヤ人ブルーとなった今の悟空にはそんな彼の動きにもついていくことができていた。

そしてついていくことができるということは、攻撃の際に生じる僅かな隙を見つけることができるということだ。

「足元が甘えんだよっ！」

左右交互に繰り出される彼の連打をかわしながら、本気の眼差しで睨んだ悟空が足払いを掛け、敵の体勢を崩す。

続けざまの右ストレートで、リボーンズヤムチャの頬を狙い――

——次の瞬間、悟空は吹っ飛ばされた。

否、弾き飛ばされたのだ。

リボンズヤムチャの左手が無造作に背中に背負っていた鞘から一振りの青龍刀を抜き放つと、まるでボールを打ち返すかのようにその刀身で悟空の身体を薙ぎ払ったのである。

敵のパワーは、これまで見せてきた力以上に凄まじかった。

跳ね返された悟空は受け身を取ることもできず、一直線に岩山の崖部へと叩きつけられていく。

その衝撃で、悟空の肺から空気が絞り出された。

「つつ……つつ……なに……？」

脳震盪を起こしたボクサーのように軽く頭を振り、悟空はすぐさま上空に視線を戻す。

そこに映し出された光景を目にし、悟空は思わず言葉を失った。

「あれは……つつ、超サイヤ人……？」

敵の髪の色が変わっていたのである。

ヤムチャと同じ黒髪だった筈の長髪が、神々しい光を放つ薔薇色に染まっており、身に纏うオーラまでも同様に変質している。

悟空を見下ろしながらゆっくりと振り返ったりリボンズヤムチャの両目は銀色に染まっており、橙色の光を放つイヤリングを輝かせながら彼は嗤った。

「超サイヤ人が、自分たちだけの変身だと思っては困るな」

叩きつけられた岩山からようやく浮き上がった悟空に向かって、リボンズヤムチャが言った。

神の魂と超サイヤ人の器が合わさることで誕生する、薔薇色の神戦士。

高次元の存在であるリボンズヤムチャが、界王神とサイヤ人のデータを基に生み出された究極の人造人間ヤムチャキャノンと合体した存在が、今のリボンズヤムチャである。

ならば彼もまた、その姿に至れない道理はなかった。

——超サイヤ人ロゼ。

超サイヤ人ロゼのリボンズヤムチャである。

もはやそこに、ヤムチャの要素などない。

「そうとも、この姿こそ……」

真の姿を解放したりリボンズヤムチャが左手の青龍刀を振り上げ、急迫する。

「物語を導く主人公だ！」

思い切り振り下ろされたリボンズヤムチャの剣に、悟空は青色の気で固めた自らの両腕で対抗する。

だが、急迫した時に乗せられた彼の勢いとスピードは、そう簡単に殺し切れるものではない。

なおも押し込まれていく青龍刀に悟空は不利を察して後退し、上空へ飛び出していった。

しかし体勢を立て直す隙を、リボンズヤムチャは与えなかった。

「遅い！」

「ぐうっ!?!」

青龍刀を携えた左手とは、反対側の手から素早く気攻波を乱射する。

降り注ぐ赤い閃光に数発目までは紙一重でかわしてみせた悟空だが、立て続けに走らせた気攻波の一発が遂に彼の身を捕らえた。

咄嗟に両腕をクロスさせることで致命傷は免れた悟空だが、その両腕はかつてない衝撃に痺れ震えていた。

距離を取るのには、マズい！

数多の戦いで培ってきた戦士としての直感がそう訴え、悟空は青色のオーラを噴き出し旋回しながら急速にリボンズヤムチャとの距離を詰めていく。

「だりゃあっ！」

「……ふっ」

青色の超戦士と薔薇色の超戦士。

互いに異なる方法で神の力を得た二人が、お互いが放つ美しい光で

夜空を照らしながら交錯していく。

一瞬の接触だった。

その接触によってダメージを受けたのは、悟空の方だった。

右肩の先が青龍刀によって斬り裂かれ、鮮血が飛び散る。

苦悶に歪む彼の顔を見て、リボーンズヤムチャが愉悦した。

瞬間移動によってビッグゲテスター・ヴェーダへの侵入に成功したヤムチャは、間髪入れず襲い掛かってきたヤヤの軍勢を前に、今は敵の攻撃の回避に専念していた。

自分がこの場所で為すべきことは、目先の雑魚を倒すことではなく、ビッグゲテスター・ヴェーダの本体である「コア」を掌握することだ。

月ほどの大きさがあるこの機械惑星だ。どんな形をしているかわからないコアを見つけることは、砂漠に落とした一本の針を探し出すことよりも困難を極めるかもしれない。

しかし、ヤムチャは自分ならば見つけられる「当て」があったからこそ、一人この場所に乗り込んできたのだ。

そんな彼に今必要だったのは、自分の行動が敵に封じられない一定時間の確保であった。

「アニューー！ コイツらを食い止めてくれ！」

「……？ ヤムチャ・テイエリアーデ!?」

ヤムチャは瞬間移動する際に辿らせてもらった「気」の持ち主――

既にビッグゲテスター・ヴェーダの内部にいたヤムチャアニューに対して大声で呼び掛ける。

彼女は今、ヤヤの軍勢に対して両手から気弾を連射している最中であり、そんな彼女のいる場所の奥ではメタル化したドクター・ゲロ―アルケー・ゲロと一対一の死闘を繰り広げるトランクスの姿がそこにあつた。

その光景を目にして、ヤムチャは即座にヤムチャアニューがビッグゲテスター・ヴェーダの呪縛から解き放たれたのだと察し、彼女を信じて自らへの協力を頼み込んだのである。

ヤムチャの登場に気づいたヤムチャアニューが、驚いた顔を浮かべた後に訊ねる。

「勝機があると言うの？」

「いや、俺にそんなものはねえさ。だが、希望はある！」

「……！ わかったわ！」

ホープ 希望……あのトランクスと惹かれ合つた彼女は、その言葉を聞いて感慨深い思いを抱いたのだろう。

彼女はヤムチャの頼みに応じると、突破口をこじ開けるように極太の気攻波を放ち、進行ルートに塞がっていたヤヤの軍勢を撃滅した。

「サンキュー！ トランクスによろしくな！」

「はやく行きなさい！」

もはや、軽口に反応している余裕さえ怪しいのだろう。ヤムチャアニューは彼に対して顔も向けないまま次の標的へと攻撃を放ち、何よりトランクスの戦いを邪魔しないように敵を撃ち落としていた。

女の人って、やっぱり強い。

あれ？ そう言えば今俺、初対面の女と話しても大丈夫だったな……と、不思議と上がり症を発症しなかつた自分に苦笑しながら、ヤムチャは彼女の善意に応えるように先へ向かつて飛翔した。

ヤムチャが侵入したビッグゲテスター・ヴェーダの内部は、まるで金属でできた鍾乳洞のようだった。

ごつごつとした岩石の代わりに天井を構成しているのは、毛細血管

のように根を張り巡らせている金属の管である。

ただひたすらに無機質な空間は不気味であったが、そこは不思議と幻想的な雰囲気を漂わせていた。

そのエリアに入り込んだヤムチャは、この辺りでいいだろうと判断し、舞空術で飛翔していた足をザツと地に下ろした。

この辺りのヤヤたちは、トランクスとヤムチャアニューの二人が粗方片付けてくれたのだろう。辺りに気配はなく、ヤムチャがコアを探すには絶好の環境だと言える。

「……いくぞ」

すうつと深く息を吐き、ヤムチャは地に着けた足を肩幅まで開く。

そしてその身の周りに、六発もの練気弾をおもむろに生成した。

ヤムチャの意思一つで遠隔操作されるその練気弾たちは、彼を中心として渦を描くように回転していくと、やがて足元に集まって円状のフィールドを発生させた。

フィールドから浮き上がった光のリングがヤムチャの腰と頭上に移動し、天使の輪つかのような輝きを放つ。

「クオリヤム・バースト！」

ヤムチャはその技名を叫ぶと、潜在能力を解放した黒髪が逆立ち、おびたらしい「気」の嵐が体内から発生していく。

だが、まだ足りない。

「ヴェーダの構造は全くわからねえからな……フルパワーで行くぜえっ！」

ヤムチャはここまでお膳立てしてくれた仲間たちに感謝の思いを込めながら、潜在能力を解放したその姿に界王拳を重ね掛けする。

そして自身が行使する二つのエネルギーを同調させると、一つのエネルギーに編み込んだそれを躊躇なく完全解放した。

その勢いによって上着が弾け飛び、引き締まった上半身の筋肉が露出する。

——ハイクオリティ・ヤムチャドライブ・バースト。通称「クオリ

ヤム・バースト」である。

元々はセルリジエネによって名付けられたその技名を高らかに叫んだ彼は、出力を最大限に引き上げたヤムチャドライブを持ってその身から膨大な量のオーラを解き放っていた。

それで終わりではない。

ヤムチャドライブによって紫色に染まった彼のオーラは、練気弾によつて象られたフィールドを介することによって爆発的に拡散量を増幅し、やがては「翠色」の光へと変わっていく。

そうしてヤムチャから猛烈な勢いで放たれた「気」の光は、人間の視覚限界を超えた量となり、月ほどの大きさがある機械惑星そのものを包み込んでいった。

ヤムチャが放った新技「クオリヤム・バースト」とは、ヤムチャの得意技である練気弾の派生の一つだ。

それは「浴びた者が全て練気弾のようにヤムチャとリンクする」という効果を持つ。

原理はトリアル練気弾と同じであり、相手の身体を練気弾のように操ることができるのも同じだ。

ただ、このクオリヤム・バーストは従来のトリアル練気弾とは規模が桁違いであり、ヤムチャが想定していた以上に危険な副産物が発生する禁断の技でもあった。

気弾を浴びせた者を練気弾にするのがトリアル練気弾ならば、クオリヤム・バーストは光を浴びた者を「ヤムチャにする」技と言える。う。

その「ヤムチャにする」とは身体機能の制御のみならず、思考までヤムチャとリンクすることを意味していた。

「おうおうおうああああああっ!!」

ヤムチャが狂乱したように咆哮を上げ、眩い光の中でもがく。

この技はリボーンズヤムチャのような格上の相手には効果がなく、

戦闘中に扱おうにも隙や消耗が多すぎて実戦的ではないが、それ以外の者——ヤムチャより力が劣る者が相手であれば、世界中全ての人間とリンクすることもでき、無機物までも制御下に置くことができる神の如き奥義だった。

ヤムチャはこの巨大な機械惑星のどこかに隠されている「コア」を見つげる為に、ビッグゲテスター・ヴェーダそのものを「ヤムチャにする」ことでその内部情報を読み取ろうとしているのだ。

しかし、ビッグゲテスター・ヴェーダはあまりにも巨大な対象だ。いかにフルパワーを発動したヤムチャと言えど、一度に流れ込んでくる膨大な情報量はとても人の脳で処理しきれるものではなかった。

「……手伝うよ、ヤムチャ」

(リジエネ……！)

「僕とリンクするんだ……一人では無理でも、二人のヤムチャが合わさればきつとできる」

想像以上に膨大であるビッグゲテスター・ヴェーダの情報に脳が焼き切れるかとさえ感じた思考の中で、ヤムチャの横から同じ声が呼び掛かってくる。

セルリジエネ——一体いつからそこにいたのだろうか？ 瞬間移動でこの場所に合流した彼が、光を放つヤムチャの肩に手を置いて語りかけたのである。

そんな彼のメガネの奥にある瞳は、彼の知るセルリジエネとは違う目つきをしていた。

「ああああああっっ！」

「この情報の奔流は、元凶の俺が受け止める！ 余計な物を受け流し、見つけるんだ……コアの場所を……！ 真実を……！ こんなバカげた戦いを引き起こした……俺の罪を！」

「うううう……っ！ ろ……ろうが……っ、ろうがふうふうけええんっっ!!」

押し寄せる情報の波を掻き分けるように、狼牙風風拳を使いながら両腕をばたつかせ、ただひたすらにもがく。

口調が変わったセルリジエネの方にまで気が回らないヤムチャの

意識を、ビッグゲテスター・ヴェーダの苛烈な情報の乱流が翳っている。

だが、ヤムチャは諦めなかった。

うめきながらもゆっくりと目を開き、歯を食いしばって情報の中身を見分ける。

ビッグゲテスター・ヴェーダの構造は、どうなっている？

コアの場所はどこだ？

どこにコアがある？

どうすれば、それを掌握できる？

砂漠のハイエナは情報という腐肉を手当たり次第漁りながら、一つずつ噛み千切っては乱雑に放り捨てていく。

一瞬の時間の中で、何千、何億、という情報を処理し、目的の肉だけを探し求める。

そしてヤムチャが一心不乱に突き出した狼牙風風拳の指先が、その情報を——真実を、掴んだ。

超サイヤ人ロゼの姿で悟空と交戦していたリポーンズヤムチャは、ビッグゲテスター・ヴェーダで起こっている異変に気づき「チツ」と短く生々しい舌打ちの音を立てた。

自分以外の存在に愛着を持つ彼ではない。ビッグゲテスター・ヴェーダはその科学力によってヤムチャキャノンという最強の矛と、ポタラドライブという最強の盾を与えてくれた。

間違いなく何者よりも自分に貢献してくれた存在であるが、力を得た今のリボーンズヤムチャにとってはもはや、奪われようが壊されようが痛手にはならなかった。

しかし、だからと言って自分の庭で好き勝手暴れられて良い感情はしない。

自分こそが唯一無二の絶対者であると確信しているリボーンズヤムチャであるが、少しずつ自分の手札が削られていくのを感じるのはどう受け取っても快いものではなかった。

目の前の戦いも、出し惜しみをしている場合ではないか。

そう判断したりボーンズヤムチャが左手の人差し指から放つデスビームで敵を牽制しながら、背中から四発の練気弾を射出していく。

リボーンズヤムチャの脳波によって操作され、鋭角的にランダムな軌道で襲い掛かっていく「新練気狼牙^{フィンファング}」。

それに対し小刻みに挙動を変え、右へ左へとかわし続ける悟空が両手を振り上げるなり、二つの光芒が開かれては消えていった。

超サイヤ人ブルーの姿で放つ気円斬とハンマーパンチで、四つ全ての練気弾を破壊してみせたのである。

「やるじゃないか」

心にもない賞賛をしながら上昇したりボーンズヤムチャの足のつま先を、青白い閃光が通り抜けていく。

悟空のかめはめ波だ。

隙のない現主人公の攻撃に眉をしかめながら、リボーンズヤムチャがお返しとばかりに気攻波を撃ち放った。

「そんな攻撃！」

リボーンズヤムチャが放った赤い気攻波に対し、擦れ違うようにかわしてみせた悟空が青色のオーラを纏いながら急加速してくる。

右腕を振り上げ拳を構えながら、彼は真つ正面から突っ込んできた。

「ふん……」

急迫してくる彼の姿を銀色の眼光で見下ろし、超サイヤ人口ゼのりボーンズヤムチャが二つの練気弾を射出しながら超サイヤ人ブルー

の悟空と相對した。

「ぐあああっ！」

放たれた超スピードの練気弾が突進してきた悟空の右胸と左腕に突き刺さり、爆発を上げていく。

苦痛の叫びを上げ、ぐらついた悟空の隙を見逃すりボーンズヤムチャではなかった。

「いただくー！」

リボーンズヤムチャは喜悅の笑みを浮かべた顔で、左手に携えた青龍刀を振り上げると、彼の身を真つ二つにせんと斬り掛かっていく。

悟空は懸命に体勢を立て直しながら苦し紛れに右腕を突き出し、その拳でリボーンズヤムチャの劍に応戦した。

そして――

リボーンズヤムチャの青龍刀が、粉々に吹き飛んだ。

「――ッ!？」

「へ、へへ……」

馬鹿な……と、その言葉を漏らす余裕もなくリボーンズヤムチャの思考が空白に飲み込まれる。

我が身に降りかかった光景が、神となった頭脳を持つてしても理解できなかつたのだ。

続けざまに繰り出された悟空の回し蹴りに吹っ飛ばされた痛みを受けて、彼は初めて事態を飲み込み理性を復歸させた。

「こ、この力は……!？」

だが、それでも動揺が禁じ得ない。

何故彼の身を真つ二つにする筈だったボクの劍が、逆に破壊されるのか、と。

リボーンズヤムチャが体勢を立て直し、使い物にならなくなった青龍刀を投げ捨てるなり素手で躍りかかっていった。

「だあああっ!!」

「はあああっ!!」

絶え間なく激突する、リボーンズヤムチャと孫悟空の拳と拳。

二人の力の差は、もはや完全に互角と成り果てていた。

敵の攻撃を喰らう回数が徐々に増えていくこの戦いの中で、リボーンズヤムチャの双眸が憎々しげに超サイヤ人ブルーを睨みつけた。

認めたくは、ない。

だが、これが孫悟空という男の強さなのだろう。

そして、これが……

「主人公の力か！」

超サイヤ人口ゼと、超サイヤ人ブルーから溢れ出るエネルギーの波濤がさらに一段階膨れ上がってぶつかり合う。

二人の拳がつばぜり合いのように火花を散らしていく夜空の下で、リボーンズヤムチャが悟空の青い目を見下ろしながら言った。

「君のその力……物語の主人公であればこそだ！」

「くっ、うあつ!？」

悟空の身体を引きはがすように蹴り飛ばした後、間髪入れず「デスボール」を投げ放って追撃を掛ける。

「いただいでいくぞー！」

「——っ、勝手にしろ！」

直径50メートルはあるそれをサッカーボールのように宇宙へと弾き返した悟空が、再び神の気を解放して急迫し、リボーンズヤムチャの頬を殴りつける。

リボーンズヤムチャもまた悟空の鳩尾を殴り返し、二色の輝きを放つ二人は螺旋を描くように地球の空を周回していった。

やがて青い地球を見下ろす成層圏の高さまで上昇していった二人は、通りすがりのヤヤの軍勢を余波で消滅させながら何度となく拳を重ね合った。

「おめえは……わけわかんねえ奴だけど、滅茶苦茶強えな……！」

「下等な二次元などの戦いにつ！」

戦いの中で鬨気的笑みを浮かべ始めた悟空の姿に苛立ち、吐き捨てるようにリボーンズヤムチャが叫ぶ。

その直後、リボーンズヤムチャの胸部に悟空の蹴りが叩き込まれる。

吹っ飛ばされた彼の身体に、超サイヤ人ブルーによる気弾の連射が

襲い掛かる。

リボーンズヤムチャは身を翻しながら対応し、左右の腕で弾き飛ばしていくが、全弾対処しきることはできず、爆発が彼の頬に擦り傷を与えていった。

それは丁度、「原作」のヤムチャが負っていた傷痕の場所である。

「戦いを楽しむ気は……ないよ!」

怒りに燃える超サイヤ人口ゼのリボーンズヤムチャが、その身を薔薇色よりも深い真紅へと変えた。

ビッグゲテスター・ヴェーダを経由して、ヤムチャキャノンに植え付けられていた数多の戦技。その一つにこの技——界王拳があった。

界王拳によって飛躍的に上昇したスピードとパワーを持って、リボーンズヤムチャの放った蹴りが悟空の身体を豪快に吹っ飛ばした。

さらに弧を描くように旋回して回り込んだリボーンズヤムチャが追撃の手刀を振り下ろすが、その攻撃は敵の残像をすり抜けていくだけだった。

「界王拳!!」

悟空もまた呼応するように界王拳を発動し、同様の上昇幅に染まった戦闘力でリボーンズヤムチャの手刀をかわしたのである。

互いに赤い彗星に姿を変えた二人の超戦士が、時折通りがかったヤの軍勢を蹴散らしながら成層圏を駆け巡り、寄りつ離れつの軌跡を描く。

リボーンズヤムチャは赤く染まった超サイヤ人ブルーの敵を見据え、自身の全力を込めた「新練気狼牙^{フィンファング}」を四発射出した。

突進していく練気弾と共にリボーンズヤムチャ自身も悟空へと飛び掛かり、交錯させた二人の拳からスパークが弾け飛ぶ。

より勢いをつけて飛び込んだ分、力比べの軍配はリボーンズヤムチャに上がった。

大きく吹っ飛ばされた悟空の身を、四発の練気弾が追撃していく。

その内の先行の一発はバックステップを踏むような悟空の動きにかわされるが、かわした先で待ち構えていた二発、三発目の練気弾が左右から挟み撃ちに襲い掛かった。

「くっ……波あああっ！」

それぞれの方向に両腕を伸ばした悟空が、片手から二方向に発射したかめはめ波で迎撃し、練気弾を消滅させていく。

しかしその間に背後から回り込んできた四発目の対処には間に合わず、練気弾は振り向いた悟空の頭部に突き刺さり、爆発を上げた。

「リボーンズかめはめ波ああああっっ!!」

悲鳴の叫びを上げる悟空に向かって、リボーンズヤムチャが最後の追撃を仕掛ける。

リボーンズかめはめ波——その両手に集束させたエネルギーを一気に解放した眩い閃光は、完全にバランスを崩していた悟空の身を捉え、塵一つ残さず消滅させる——筈だった。

「——ッ、まだだあ！」

神の速度を持ってしても、かわすことも防ぐこともできない距離。にもかかわらず、リボーンズのリボーンズかめはめ波は敵のいた筈の場所を何の成果も得られず突き抜けていったのである。

目の前の敵が忽然と姿を消してみせたその現象を見て、リボーンズヤムチャが銀色の目を見開いた。

「瞬間移動だ?!」

ぞくりと悪寒が走り、リボーンズヤムチャは即座に後ろへ振り向く。

そこにはなけなしの力を込めて最後の拳を振り下ろそうとする、ドラゴンボール物語の主人公の姿があった。

「龍拳——ッッ!!」

「こオのおおお!!」

この戦いにおける最大の威力が込められた悟空の一撃に対して、咆哮を上げたリボーンズヤムチャが神の気を纏った左腕を振り上げ、零距离から気弾を発射する。

二人が放った最終攻撃は地球の成層圏上に太陽と見紛うような眩い閃光をまき散らし、地上全土に轟き渡る爆発を起こした。

その勢いに乗じるように、リボーンズヤムチャと孫悟空は互いに視線を交わし合いながら左右に散っていった。

転生したらヤムチャがりボンズになった件（Bパート）

初めて、強敵と言えるようなキャラクターだった。

銃弾を受けても痛いでも済まされる怪物少年孫悟空。そんな彼を空腹状態だったとは言え、一時は倒す直前まで追い詰めたのだ。作中初めて登場したイケメンキャラだったこともあり、コイツがライバルポジション、もしくは悪友的なポジションになっていくのかなと思っ

た。

アニメ版の再放送から入った世代である彼は、最初にドラゴンボールを見たのが原作ではなく無印のアニメだったこともあり、ヤムチャにヘタレのイメージを持つようになるまでは意外にも時間が掛かった。

アニメ版のドラゴンボールでは、おそらくヤムチャもスタッフから気に入られていたのだろう。ウルフハリケーンという専用テーマソングを引っ提げて原作以上に天津飯と善戦する姿は実にカッコ良かったし、インフレ真っ只中のナメック星編や人造人間編でも、リクームを一对一で倒したりセルジュニアを相手に少しだけ粘っていたりする。それは決して派手とは言えないが、彼が活躍しているシーンは原作以上に多く見られた。特に美麗な作画でヤムチャの勇姿を見ることが出来る「ドラゴンボール 神龍の伝説」や「ドラゴンボール 最強への道」は大のお気に入りである。

原作も同様で、性格面は初登場から物語が進むに連れて元来の面倒見の良さが明るみになっていき、一介の盗賊に過ぎなかった彼が立派な武道家になっていく姿には胸が温かくなるものがあった。

そんな彼だからか、少年の中では彼をヘタレキャラの代名詞のように扱われることをどこか悲しくも思っていた。

少年はカッコいいヤムチャが好きだった。

しかしどうにも肝心なところで運が悪く、貧乏くじばかり引かされ

る彼は、そのせいで視聴者から不当に実力を過小評価されることが多い。某動画サイトでヤムチャのことを中傷するコメントを見た時は、まるで自分のことのようにはらわたが煮えくり返る思いをしたものだ。

特に「ヤムチャ視点」などという造語を見た時は「ヤムチャが実際に相手の動きが全く見えなかったシーンはあまりない」だとか、「つうかヤムチャの目ならこんなスピードぐらい、ハエが止まるようなもんだろう」だとか空気の読めないマジレスを入れたり、友人からは「あいつヤムチャの話になると早口になって気持ち悪いな」と陰口を叩かれたりしたものだ。

だが決して、ヤムチャネタを嫌悪しているわけでもなかった。

にわか知識でヤムチャをけなされた時には激しく憤りを感じることもあるが、ヤムチャを笑うネタに対して周りの友人と同じように笑っている自分も確かに存在していた。

彼自身、ヤムチャの爆死体フィギュアが販売すると聞いた時は即行で予約したし、趣味のネットサーフィンではヤムチャをネタ的な意味で活躍させる二次創作小説を好んで読み漁っていた。

ヤムチャのヘタレ伝説を面白おかしく書き綴ったファンブログなんかも閲覧したり、自分自身似たようなものを創作したことがある。

中でも「たまにはヤムチャが活躍する物語を考えようぜ」の作品群は、そんな彼の需要を完璧に満たした——まさに「光」だった。

カッコいいヤムチャも、カッコ悪いヤムチャも彼は等しく愛していた。

彼にとってヤムチャの存在は、ある意味では宗教的な神のような存在だったのかもしれない。

だからこそ彼は——ヤムチャに転生した少年は、ヤムチャを強くする為ならば倫理に反した計画さえ企てることができた。

彼の計画は今、リボンズヤムチャによってさらに歪んだ形で実現されているが……「最強の人造人間とポタラで合体する」という大まかな概要に、大それた変化はなかったのだ。

ある意味では彼も、悟空のように純粹な人間だったのかもしれない

い。

「そうか……ヤムチャになった少年は、こんなにもヤムチャが好きだったんだな……」

全てを理解したという面持ちで、ヤムチャが呟く。

クオリヤム・バーストによって機械惑星とのリンクに成功したヤムチャは、コアの位置を特定する過程でさらに一つ、重大な情報を手に入れていた。

ビッグゲテスター・ヴェーダのコアである一枚のコンピュータチップ——そこにはリボンズヤムチャによって、元少年の記憶が埋め込まれていたのだ。

リボンズヤムチャがそこに元少年の感情を収めたのは、おそらくはかつて地球の神様が自らを善と悪の二つに分けたのと同じようなものなのだろう。リボンズヤムチャは神龍によって生み出された人格であるが、何がきっかけで元の少年の影響を受けることになるのかわからない。そうならない為の保険として、彼はヤムチャを純粹に想っていた少年の記憶を科学的に自身から分離し、ビッグゲテスター・ヴェーダのコアへと封印していたのである。

コアと一時的なリンクに成功したヤムチャは、それらの情報を金色に光る虹彩で閲覧し、理解した。

元少年がヤムチャというキャラクターに抱いた、祈りにも似た愛情を。

彼はただ、ヤムチャを愛していただけだったのだ。

ヤムチャに転生した少年は、しかし転生したことによる自らの矛盾に悩み苦しんだ。既に違う命として生涯を終えている自分では、どうあっても本当の意味でのヤムチャにはなれないのだと。

そのことを理解したからこそ、この世界で生きていける本物の「ヤムチャ」を作りたかった。

彼は異物である自分によって、ヤムチャがヤムチャでなくなることを受け入れられなかったのだ。

「後に託すことで……自分から踏み台になることで、本物のヤムチャを作ろうとしていたのか……」

結果はこの始末だ。とてもではないが、目も当てられない現状である。

だが……そんな少年の思いを知ったヤムチャには、だからと言って彼の夢を全否定することはできなかった。

自らの祖に対して、ヤムチャはできの悪い子供を叱りつけるような目で振り向いた。

「俺はあんたに、なんて言えばいいんだ？」

ほんの少しの共感を覚えながら、困惑した顔で問い掛ける。

その言葉を受けたのは、ヤムチャの隣に立っていたセルリジエネだった。

「さあてね」

肩を竦めながら、セルリジエネが笑う。

「ただ……」

ヤムチャの目を一点に見つめて、彼は万感の思いを込めるように言い放った。

「俺の願いは、十分に果たされた」

自らの一人称を「俺」と言った彼は、ヤムチャとの差別化の為に掛けていた伊達メガネを外し、それを無造作に放り捨てた。

セルリジエネ——その正体はドクター・ゲロがメタルヤムチャであるヤムチャ・ティエリアーデの細胞を基に、人造超サイヤ人のプロトタイプとして製作した人造人間だ。

原作のセルほどのキメラではないものの、彼がその身体に含んでいる細胞には、オリジナルのリボンズヤムチャの細胞も含まれていた。そしてリボンズヤムチャの身体は、ヤムチャになった少年の細胞でもある。

故にセルリジエネは、リボンズヤムチャの細胞を介して少年の思いをその身に宿していた。リボンズヤムチャがこの場所に封印していた記憶を、少年の想いを、彼だけは持ち続けていたのである。

そんなセルリジエネが、ヤムチャに転生した少年としてヤムチャに

告げる。

「こんなことになるなんて、思ってもいなかった……俺はただ、お前やリボonzにカツコいいヤムチャになってほしかっただけなんだ……」

「……………」
「……はは……懐かしい名前だな。ヤムチャに呼んでもらえて、感動したよ」

ヤムチャが彼を気遣い、少年の名前をフルネームで呼ぶ。

すると、彼は嬉しそうに穏やかに微笑みながら、「セルリジエネ」として言った。

「……行きなよ、ヤムチャ。僕は、ヴェーダのコアと融合する」

「いいのか？」

ビッグゲテスター・ヴェーダとリンクしたことによって、コアの位置は完全に特定した。

あとはコアの元へと赴き掌握するのみとなっていたが、その役目を、ヤムチャの代わりに彼がすると言ったのだ。

原作映画でクウラがやったように、自分自身がコアと融合することで機械惑星を支配下に置く。しかしそれをやってしまえば、セルリジエネは人の姿ではなくなるだろう。

「良いも悪いもないや」

ヤムチャの問いに、セルリジエネが淡々と答える。

「どの道、この身体じゃそう長くは生きられないし……僕にも、生きていく意味があった」

ドクター・ゲロによって作られ、生まれた時から少年の記憶を宿し、そしてヤムベイドとしての活動の裏で今日まで物語の行方を見守り続けていた彼。

そんな彼は今までヤムチャにすら気づかれることなく、その心の内で葛藤し続けていたのだ。

彼がヤムチャの肩に手を置くと、淡い光を放ちながら自らの「気」を送り込んでいく。

クオリヤム・バーストで消耗した彼の体力を、完全とはいかないまでも回復させてくれたのである。

ヤムチャに転生した少年の想いと記憶を持つ彼は、罪滅ぼしの為にリボンスヤムチャを裏切つてヤムチャに協力してくれた。

ヤムチャは決して聖人君子ではなく、このような厄介なことを引き起こした少年を憐み嫌悪する感情はある。

だが彼にとつてはそれでもセルリジエネはセルリジエネという一人の人間であり、彼と同一視しているわけではなかった。

ヤムチャ自身、己が何者でどういう存在なのか、ずっと悩み苦しんできたのだから。

だがそれでも——そんな俺にも生きている意味があった。

「……またね」

「ああ、また会おうぜリジエネ」

特定したコアの場所へ向かっていった彼と別れ、ヤムチャは一人飛翔していく。

ヤムチャの放ったクオリヤム・バーストによって身体制御を奪われている今、機械惑星周辺のヤヤたちは一斉にシステムダウンを起こし、全て糸の切れた木偶人形のように動かなくなり、地球に襲い掛かる大軍の脅威は無風となった。

クオリヤム・バーストの残滓が消えればたちまち活動を再開するだろうが……それもセルリジエネがコアと融合することによって、直に完全停止する筈だ。

一転して静かになったビッグゲテスター・ヴェーダの内部を飛びながら、独語するようにヤムチャが言った。

「みんな同じか……」

それぞれに思惑があり、何かを追い求めている。

自分の存在意義に思い悩みながら、それでも答えを出す為に戦っている。

辛いことや悲しいこと、受け入れたくない現実是谁だつて抱えている。

あの悟空ですら、大猿化した自分が祖父を殺してしまったのだと知った時は責任を感じ、堪えていたのだ。

だがそれでも、未来に進んでいける者といけない者の差ははつきり

と現れる。

「なのになんで、こんなことになっちまうんだか……」

ビッグゲテスター・ヴェーダの一区画では、未来の孫悟飯のように目元に傷を負ったトランクスの身体を、労わりながら抱き起こしているヤムチャアニューの姿があった。

満身創痍の姿でも無事を知らしめるように微笑むトランクスの後ろには、リボンズヤムチャによって改造された身に引導を渡されたアルケー・ゲロの残骸が横たわっていた。

彼らも、決着をつけたのだろう。

善と悪が幾度となく戦いを続けるこの世界——ドラゴンワールド。

既に物語は変革され、どのような未来を辿るのかは想像もできない。

だが、未来のことがわからないのは当たり前だ。

酷く当たり前で、それが世界なのだ、ヤムチャは改めて身に染みる。

「アイツにも、教えてやらねえとな……」

因縁に終止符を打ち、愛する女性と抱き合うトランクスの姿を見て刺激を受ける。

俺も負けてられないなど笑い、ヤムチャは二人に気づかれる前に額に指を当てて地球人の「気」を探り、瞬間移動の体勢に入った。

「楽しいことは、いくらでもあるってことを——!」

狼は牙を研ぎ澄ませ、最後の戦いへと赴いた。

荒れ果てた砂漠の大地と平行線を描くように、リボーンズヤムチャが飛翔していく。

動きは精彩を欠き、既に超サイヤ人口ゼの姿でなくなったことから消耗の程が窺える。

「ふふふふ、ははははは……っ」

その傷だらけ姿で舞空術で飛びながら、リボーンズヤムチャは愉悦の笑みを溢した。

——勝った！

成層圏でぶつかり合った悟空とリボーンズヤムチャの最終攻撃。

その爆発の煽りを受けて、二人の身は大気圏内に墜落し、それぞれ離れた場所に落ちていた。

しかし、リボーンズヤムチャはまだ生きている。

対して、彼の落ちていった場所から感じる悟空の「気」は既に風前の灯火だった。

その姿は見えないが、「気を感じる」ということは、彼の姿が超サイヤ人ブルーではなくなったということでもある。そしてその「気」が今も消滅に向かって弱まっているということは、リボーンズヤムチャの手によって彼が致命傷を受けたことの証でもあった。

「勝った……ボクは孫悟空を倒し、原作さえも超越した存在となった……！」

これが愉快でなければなんだというのだ。

本来の予定では超サイヤ人ゴッドとなった彼を圧倒的な力で踏み潰す筈であったが、その上の変身形態である超サイヤ人ブルーをも踏み台にできたのならば当初の計画以上の成果を叩き出したと言える。

リボーンズヤムチャは遂に悲願を成し遂げたのだ。
……いや、駄目だ。まだ、とどめを刺すまでは。

彼の愉悦の気分は、その身を襲う負傷の痛みによって中断させられた。

「くっ……ダメージが……！」

神次元でもない敵を相手にするならば致命的と言えるほどではないが、リボーンズヤムチャも深手を負った身である。

舌打ちを鳴らす彼の目が、気絶している筈の孫悟空の姿を探し回る。

彼の「気」が弱々しくなって死に向かっている今、段々と感知するのも困難になっていた。

だが、油断はしない。この手でとどめを刺して死亡を確認するまでは、リボーンズヤムチャも血眼だった。

「どこだ、どこにいる？ 孫悟空……！」

その時、リボーンズヤムチャが不意に知覚する。

——何かが来る……！

一瞬にしてこの地球に現れた大きな「気」が、こちらに向かって接近している。

バーダックか、ベジータでもやってきたのだろうか。

そう思い、リボーンズヤムチャは向かってくる大きな「気」へと顔を向ける。

ヤヤ部隊が消えたことによって見えるようになった、無数の星々が瞬く美しい夜空——その端から流れてくる、青白い光の軌跡を見つけた。

その「気」がはつきり感じられるようになると、リボーンズヤムチャは即座に自分が思い浮かべていた相手ではなかったことに気づく。

山吹色の道着を纏い、上着は破れたのか上半身を露わにしている地球人の戦士。

黒髪を逆立てた彼の頬には十字型の、右目には斜め一文字の傷痕が刻まれている。

青白い気のオーラを放出し迫ってくるその男の姿は——

「まさか……まさか！」

——そのまさかだった。

胸に「楽」と描かれた緑色の服を纏い、ポタラのようなイヤリングを両耳につけたりリボーンズヤムチャの姿を見据えながら、「ヤムチャ」は拳を握り締める。

疲れているところ悪いが、今こそ決着をつけてやる！

「狼牙風風拳……未来を切り拓くっ！」

そんな彼の来訪に奥歯をぎり、と鳴らしたリボーンズヤムチャが、怨嗟の叫びを上げて振り向いた。

「この……ヤムチャ風情があああああっっ!!」

「ハイイ！ ハイハイハイハイ……ッ!!」

お互いの咆哮が響き渡る夜の砂漠で、二人のヤムチャが対峙する。

ヤムチャは自身最大の得意技である狼牙風風拳を仕掛けながら、敵に向かって突進していった。

リボーンズヤムチャ——リボーンズヤムチャはヤムチャにとって自らの作り出した存在であり、生みの親とも言える相手だ。

今の自分がこの世に生きているのも、彼がいたからこそその命である。

それと戦うことに、何らかの感情が湧き立たなくもない。

だが、それがこの地球の——プーアルや皆の未来に立ちふさがると言うのなら、ヤムチャは自らの親をも倒す覚悟を背負っていた。

バーダックと死闘を繰り広げた、孫悟空のように。

こうしてヤムチャ同士の最終決戦は、奇しくも悟空とヤムチャが初めて出会った砂漠で行われたのである。

『そう言えば、ヤムチャさんはどうだったんですか？ その……「ドラ

ゴンボール」のヤムチャさんは』

三年前、初めて「物語」のことを仲間たちに明かした時、クリリンと行った会話が脳裏に過る。

『俺はな……』

リボーンズヤムチャによって植え付けられていた原作知識、それを参考にしながらヤムチャは自分なりの「ヤムチャ」という登場人物への印象を告げた。

最初の一撃は、リボーンズヤムチャが突き出した右手の人差し指から放たれた。

デスビーム——フリーザが使っていた技でもあるその光線が夜空の闇を切り裂き、ヤムチャの身へと襲い掛かる。

ヤムチャは潜在能力を解放したスピードを持って降り注ぐ光線の間を掻い潜り、リボーンズヤムチャに向かって突進していった。

敵へと組みついたヤムチャが、そのままスピードを緩めず、リボーンズヤムチャを巨大なキノコのような形をした砂漠の大樹へと叩きつける。

『情けない奴だと言われる理由はわかるんだよなあ……ロリコンじゃないからとか言って小さい頃のチチさんをぶっ飛ばしたり、天津飯に白目剥かせてやるって吠えた後、自分が白目を剥くことになったり……外から見てたら、ヘタレにも見えたさ。でも……』

リボーンズヤムチャもやられっぱなしではない。

ヤムチャの拘束を振り払うと右ストレートで弾き飛ばし、飛び退りながらデスビームを連射する。

しかし、ヤムチャには当たらない。

鋭角的な動きで光線の群れをかわし、ヤムチャがリボーンズヤムチャの後を追う。

ヤムチャが撃ち返した一発の気弾が、砂漠の砂を豪快に巻き上げた。

その砂煙で作った煙幕をヤムチャが突き抜けた直後、リボーンズヤムチャの右拳がヤムチャの頭部に襲い掛かる。

気弾戦から移行した突然の肉弾戦に、ヤムチャは即応しきれなかった。

『何度も負けて、負けまくって……それでも自分なりにできることを信じて、戦おうとする。足手纏いになるだけだとわかったら、悔しくても引き下がる。そんな生き方は……どうしようもなく、憧れるんだ』

一発、二発とリボーンズヤムチャの剛拳がヤムチャの顔面を打ち据え、その度にヤムチャが口から血を噴き出す。

だが、ヤムチャの身体を界王拳の赤いオーラが包むと、その攻勢は入れ替わった。

ヤムチャは鼻面に急迫してきたリボーンズヤムチャの拳を両手のひらで受け止めると、足元が留守だと叫んで足払いを掛け、体勢を崩した敵の身体を、絡め取った腕ごと地面へと投げつけてやった。

「おおおおおおお!!」

「っ……くっ……いー」

一本背負いの要領で背面から叩きつけられたリボーンズヤムチャが立ち上がるよりも速く、ヤムチャは右腕を振り上げ、真つ直ぐ敵に向けて突き落とした。

リボーンズヤムチャは仰け反るようにその一閃から逃れたが、刃のような拳に胸元が抉られ、「樂」の一字が切り裂かれた。

「ふん……いー」

リボーンズヤムチャはその損傷に怯むことなく、右足を振り上げてヤムチャを蹴り飛ばした。

直撃を受けたヤムチャが、後方に飛び退くことでそのダメージを軽減させる。

おびただしい土煙を巻き上げながら着地したヤムチャが、その砂を握りしめるように片手で自らの身体を支えながら立ち上がる。

『小物臭くて、情けなく見えたりすることもあるけど……物語のヤムチャは、本当の意味で弱い奴なんかじゃない。ヘタレだって言われるところも、なんでか魅力的に見えたんだ』

ヤムチャとヤムチャ。

ヤムチャティエリアとリボーンズヤムチャ。

二人はお互いの「気」が底を尽きかけていることを感じながら、その目で相手を睨みつけて相対した。

リボーンズヤムチャが破れた上着を脱ぎ捨て、神の気を解放しながら「狼牙風風拳」の構えを取る。

ヤムチャも左手を前に、右手を顔の横へとも構えて「狼牙風風拳」の体勢に入る。

睨み合う二人はもはや、何も言葉を交わさない。

ただ言葉も無く、これが最後の一撃だと示し合わせるように砂漠のど真ん中で対峙していた。

リボンズヤムチャの姿が薔薇色に染まり、超サイヤ人口ゼの力が大気を揺らす。

ヤムチャの身体を覆うオーラが紫色に変わり、ヤムチャドライヴが唸りを上げる。

眩い光が地上に広がっていき、短く、長い時間が過ぎ去った。

『だから俺は、俺も……いつか、そんなヤムチャになりたいと思う』

二人が、同時に地を蹴る。

助走をつけるように数歩刻んだ後、二人のヤムチャが跳ぶ。

真つ直ぐにお互い譲ることなく突き進んだ二人は——激突し、二色の光が弾けた。

ヤムチャとヤムチャがぶつかり合った結果、倒れたのはヤムチャであり、残ったのもまたヤムチャだった。

決め手となつたのは狼牙風風拳の締め形である、両手で狼の口を象つた最後の貫き手だ。

それを為したのは、ヤムチャでありながらヤムチャではなく、しかし誰よりも自分がヤムチャであることを望み続けたヤムベイド——ヤムチャ・テイエリアーデただ一人だった。

「……終わつたぜ、みんな……」

その言葉を残して、ヤムチャもまた砂漠の地に倒れ伏していく。

ドラゴンボールファンからも、にわかなファンからも、はてはファンですらない者たちからも何度となくネタにされ続けてきたポーズを自ら取るように、ヤムチャは横たわった。

『だからどうか、お前らも俺を見捨てないでくれよ。笑うのはいいが、馬鹿にはしないでくれ……なんてな』

戦いは終わった。

地球全土で飛び交っていた閃光や爆発は既に無く、夜明けと共に地上は静寂を取り戻している。

人類とヤムベイド、どちらの陣営が消滅したからではない。

突如としてヤヤの軍勢が活動を停止し、かと思えば突然動き出して宇宙まで上昇していき、その全てが一方向に向かって集まっていたからだ。

満身創痍の戦士たちへの攻撃も停止し、悟飯や天津飯たちも、ブルマやチチたちもみな命を永らえた。

そこにいる者たちの視線が、夜明けの空の向こうへと集められる。彼らの視線が向けられているのはヤヤたちが集合していった場所であり、ビッグゲテスター・ヴェーダが浮かんでいた場所でもあった。彼らは呆然と、あるいは驚きや困惑を浮かべながらそれを見上げていた。

「ソングクウ、大丈夫か？」

「……あ……ああ、大丈夫だ。サンキューな、ハツチャン」

リボーンズヤムチャとの戦いで雪国まで落ちていった自分を介抱してくれた、北の村の青年——懐かしい再会をすることになったハツチャンに肩を貸してもらいながら、孫悟空はふらりとした足取りで外に出て、空を見上げる。

「見て！」

「あれは……」

「な、なんじゃあれは……?」

今はハッチヤンの奥さんらしい、美人に成長していたスノが空の向こうを指差し、避難場所から出てきた他の住民たちがざわめく。

彼女らの視線が集中する、そこにあつたものは――

「……やったんだな、ヤムチャ……」

集大成だった。

タマネギのような形ではなく、円の形になった機械惑星の姿。

そしてその円の真ん中で、集結したヤヤたちが変形し光を放ちながら文字を象っていた。

それは、悟空にとつて馴染み深い一文字であり。

それは、彼にとつても馴染み深い一文字である。

――【亀】――

機械惑星を丸に、集まったヤヤたちを字に見立てて形成された新たな満月が、地球の夜明けを祝福した。

エピローグ 『ヤムチャ』（終）

リボンズヤムチャが引き起こした一連の事件は、戦士たちの活躍によって幕引きを迎えることとなった。

ヤムベイドの——特にヤヤの大軍によって発生した死傷者の数はゆうに地球人口の半数を超えていたが、そんな人々も後にドラゴンボールによって全員が生き返ることとなった。

ピッコロが神と合体したことによって一度は消滅したドラゴンボールだが、悟空の機転によってナメック星人の龍族であり地球に帰化していたデンデが後任を務めることになり、彼の力で新たに復活したのである。

壊された自然や町も二つに増えた願いによって元通りになり、地球はまるで何事もなかったかのように平穏を取り戻した。

しかし平和の中でも孫悟空は相変わらずの修行ジャンキーであり、度々妻のチチから小言を授かっている。

そんな、いつも通りになった日常に悟飯が苦笑しながらも、最近になって変わったことがあった。

それはパオズ山の家で暮らす家族が一人、新しく加わったことだ。

「悟空さ！ 悟天ちゃんのミルク足りなくなっただ！ 瞬間移動つので買ってきてけれ」

「なに？ そりゃ大変だ……えーつと西の都西の都つと」

「ついでにオムツも頼むだよー！」

悟天——二人の次男坊である。悟飯にも、遂に弟が出来たのだ。

悟空もまた修行ジャンキーと言えど、流星に生まれて間もない子供がいるとなれば自分の修行よりも当然そちらを優先する。

厨房に立つチチが窓を開けて外にいた悟空に買い物を頼むと、彼は素直に聞き届け、ヤムチャから教わった「瞬間移動」を使って人里へと向かっていく。

彼を一人買い物に行かせるのは少し不安ではあるが、あれでも子供の頃は亀仙人から最低限の一般常識は教えられていた身だ。何となく問題ごとに巻き込まれそうな予感はあるものの、自ら率先して問題

を起こすことは多分ないだろうとチチは考えていた。

「悟飯ー、ちょっとこっち来て手伝ってほしいだが……って、あれ？」
家族が一人増えたことで以前にも増して家事が忙しくなったチチが、申し訳なさそうな顔をしながら勉強中の悟飯を呼びに行き——そこで、彼女の目が留まった。

勉強中の悟飯と、小さなベッドの上で寝かせられている悟天。そしてもう一人、悟空にそっくりな顔をした男がいつの間にか家にいたのだ。

「おっとうさま、来てただか！」

「ああ」

おっとうさま——そうチチが呼んだ相手は、チチの父親である牛魔王ではない。

しかし悟飯にとってはもう一人の「おじいちゃん」である、バーダックその人だった。

彼は少しくたびれた顔をしながら、つまらなそうに壁に寄りかかりながら座っている。そんな彼を見て、悟飯が微笑を浮かべながら言った。

「さつきまで、悟天のこと寝かしつけてたんですよ？」

「あらそうだったか！ さつすがおっとうさまだ！」

「ぎゃあぎゃあうるさかったただけだ……子供は嫌いだ」

うんざりしたようにそう語るバーダックであるが、その表情筋が僅かに緩んでいることを悟飯は見抜いていた。

何だかんだで彼も、ピッコロと同じで面倒見のいいのだろう。悟天のゆりかごを揺らしていた時の彼も一見無表情だったが、その目は悟空のように穏やかだったし確かな優しさを感じた。

悟天もまたそんなバーダックに懐いているのか、彼が家に来ると機嫌が良くなつてキヤツキヤツと笑い出すのだ。

おかげで悟飯も勉強に集中できる……と言うと不謹慎だが、彼が来てくれて助かることは確かだった。

「はは……」

バーダックは普段からこの家で暮らしているわけではない。

どこで何をやっているのかはわからないが、時々風来坊のように現れては去っていくことを繰り返している。

ただ、それでも定期的に顔を見せて悟天の面倒や悟空の修行に付き合ってくれる彼のことを、チチや悟空も家族の一員として受け入れていた。

それはもちろん、悟飯も同じである。

「……面白えか？ それ」

教材から出題された問題の答案をノートに書き綴っている悟飯の様子を見て、バーダックが不思議そうな目をしながらつまらなそうに訊ねる。

そんな祖父の言葉に、悟飯は満面の笑みで答えた。

「はい！ 僕の夢ですから」

平和になった世の中で悟飯が目指すのは偉い学者さんだ。

それは決して母のチチに強制されたわけではない。

彼もまた自らの意志で、未来に向かって進んでいた。

パオズ山の上層から流れ落ちていく美しい川や緑の光景が一望でききる静かな場所に、墓地があった。

そこでは青みが掛かった灰色の髪の毛の青年が、黒いコートの襟を立てて佇んでいた。

頭上を覆う青い空に、千切れた雲が流れていく。太陽を隠す雲を眺めた後、彼は手にしていた花束を墓標の前に置く。

かがめていた腰を上げ、師匠の名前が刻まれた墓標に向かって呟く。

「悟飯さん……」

師匠であり、兄でもあった男の名だ。

「僕は、この地球から離れてタイムパトロール隊員として生きます。時を渡ったことが罪と言われようとも、僕は僕の意志で戦い続ける……」

それは、彼の決意表明だった。

選んだつもりで状況に流されていた自分の戦いは、今日を持って終わりにする。

この日は、その決意を伝える為に元の世界へ帰り、この場所を訪れたのだ。

トランクス。トキトキ都から「アニニューと共に、時の界王神の特命を受けて」リボンズヤムチャの打倒に向かったタイムパトロール隊員は、今は元通りトキトキ都のタイムパトロール隊員として働いている。

無断で別の時間軸に渡ったことは、本当ならば罪に問われていた問題であろう。しかしそれを問うてきたお偉いさんの前で、時の界王神が彼に言ったのだ。「潜入捜査ご苦労様」と。

……どうにも今回の件では、彼女の側でも動いてくれていたようだ。

トランクスが戦いに臨んだ対象のリボンズヤムチャが凶悪な時間犯罪者である事実も後に判明したことで、トランクスとアニニューはタイムパトロールの規律違反者どころか、彼の悪事を止めたトキトキ都の英雄として祀り上げられることとなった。

トランクスとしてはまたしても彼女に大きな借りを作ってしまったことになり、今までよりもさらに頭が上がらなくなってしまうのだが……トランクスがアニニューを連れて帰ってきたことに対して、同僚と一緒に喜んでくれたのもまた彼女だった。

まさに、捨てる神あれば拾う神ありと言ったところか。

未だ借りを返しきれないトランクスは上司に対して戦々恐々な日々を送っていたが、その程度の懲罰で済むのなら安いものだった。

トランクスはこの墓参りを終えた後、すぐにトキトキ都に帰る予定

だ。

次はいつ来られるかわからない。

いや、もう二度と来られない可能性だってあるだろう。

だが、今の彼にはもう、一人で何もかも背負いながら朽ち果てていく気など欠片もなかった。

彼は自らの横で墓前に祈りを捧げている、薄紫色の髪の女性へと目を向けた。

彼女と婚約したこと……悟飯さんはきつと、喜んでくれるだろうか。

「僕はこのアニューと一緒に、悟飯さんたちが望んだ未来を切り拓いていきたいと思えます。だから……そちらへ行くのは、もう少し待っててくださいね」

トランクスは師匠の名が刻まれた墓に語り掛ける。

この墓の下に眠っているのは、彼の遺骨や遺品だけではない。

思い出だつて詰まっている。

トランクスがまだこの星の為に戦う戦士として、彼と共に生きていた思い出も。

タイムパトロールの仕事が嫌になって、ふと昔の自分に戻りたくなったら、いつかまたここに戻ってくる。

決意を新たなものにする為にも。

トランクスは隣の女性の肩を抱きながら、踵を返して墓の前から去っていった。

——頑張れよ、トランクス。その子と、幸せにな！

花束を添えられた師匠の墓が、そう言つて二人の門出を見守つていくように見えたのは、おそらく気のせいではないだろう。

セル・リジエネ・レジエツタ・ヤムチャは夢を見ていた。
いや、夢を見ているように思っているだけかもしれない。
それでも不意に浮かんだイメージは、彼に幸せな心地を与えてく
れていた。

魔人ブウとの戦いで活躍するヤムチャ。

ゴールデンフリーザとの戦いで活躍するヤムチャ。

宇宙サバイバル戦で活躍するヤムチャ。

復讐鬼ベビーとの戦いで活躍するヤムチャ。

邪悪龍との戦いで活躍するヤムチャ。

いずれの戦いも勝利を収め、ヤムチャは悟空やベジータ、クリリン、
天津飯、ピッコロ、それに加えて何故かブロリーやパラガスたちと肩
を組み合って笑っている。

それらのイメージは所詮イメージであり、セルリジエネの頭脳に浮
かんだ勝手な未来の想像図に過ぎない。

ただ、それらのイメージは彼の口元を自然と綻ばせるものだった。
尤も、今のセルリジエネはビッグゲテスター・ヴェーダのコアと融
合した身であり、綻ばせられるような口どころか肉体すら持ち合わせ
ていないのだが。

そんな彼は、これまで生きてきた自らの生を振り返る。

短かった——短い人生だったが、空っぽな頭に夢を詰め込まれた濃
厚な日々だった。

『……これで、ヤムチャが無駄に背負うものはなくなった……』

リボンズヤムチャは野心を抱きすぎ、そして業が深すぎた。

ヤムチャ・ティエリアーデは彼の野望を知ってからは、かつての未
来トランクスのように色々なものを背負いすぎていた。

だがそれも、これで少しは肩の荷も下りたのではないかと思いた
い。

これからが彼の、彼ら自身の人生の始まりなのだろうとセルリジエ

ネは思う。

『僕はヴェーダの一部となり、君たちの活躍を見守ることにするよ……生まれ変わる前の、一人の少年のように……』

共に戦ってきた仲間たちの姿が……彼らとの思い出が浮かび、笑みを漏らす。

もしかしたらこんな自分も、いつかは肉体を作って彼らの元へ遊びに行くこともあるかもしれない。

だが今は、ゆっくりと休みたかった。

『バイバイ、ドラゴンワールド』

お気に入りのソファアールの上でゴロゴロするような心地良いまどろみの中で、セルリジエネはビッグゲテスター・ヴェーダと共に静かな眠りについた。

ヤムチャ——ヤムチャ・ティエリアアードではなく一人のヤムチャになった青年は今、人生の墓場に直面していた。

しかしその墓場は、決して薄暗くネガティブな場所ではない。

多くの知人たちが詰めかけた神聖なる教会。神父を務めるのは正真正銘の神様であるデンデであり、礼装に身を包んだ彼に見守られながらヤムチャはブルマと向かい合っていた。

ヤムチャがその身に纏っているのは、白いタキシードであり。

ブルマがその身に纏っているのは、白いウエディングドレスだ。

それは、二人の結婚式だった。

孫一家に悟天が生まれて間もない頃のことである。

二人が結婚するという話が広がった時、彼らの知人たちは言わずにはいられなかった。

やつとかよ！——と。

前々から主にブルマ側から言い寄る形で二人が共にいる光景は見られたが、そんな彼らは一体いつくつつくのやらと、主にチチや亀仙人からじれったく思われていたのだ。

ヤムチャも長年世話になってきたブルマのことを間違ひなく愛していたし、ブルマもまた彼のことを最初の天下一武道会の頃から一途に想っていた。

その二人がめでたく結婚に至ったことを、彼らの知人たちはもろ手を挙げて祝福した。

特にヤムチャの奥手ぶりを誰よりも見続けてきたプーアルに至っては、式が始まる前からも号泣しており、ブルマの親族たちから宥められていたほどだった。

神父をデンデ。仲人をプーアルが務めた二人の結婚式は、つつがなく行われた。

悟空やクリリンたちお馴染みの顔ぶれが参列する前で、二人は永遠の愛を誓い合い、口づけを交わした。

教会の外に出たところで祝福のライスシャワーを浴び、ブルマが放り投げたブーケを亀仙人が空気を読まず掴んでしまい、チチや金髪ラッチ、ラズリらによって袋叩きにされるアクシデントも発生したが……概ね成功したと言えるだろう。

彼らのそんな「らしい」姿を見ながらあははと笑い、ブルマが感慨深い思いに浸るようにヤムチャに言った。

「こんな待たされるなんてね……あんたのせいで、もう少しで行き遅れのおばさん扱いされるところだったのよ？」

「……すまん。何て言うか、あと一歩が出てこなかったんだ……その、勇気が湧かなくて……」

「まったく……肝心なところでへタレるのよねあんたは」

プロポーズを行ったのは、新郎のヤムチャの方である。
そしてその一步を何年も前から健気に待ち続けていたのは、新婦のブルマである。

数年前にはリボンズヤムチャというとんでもない化け物と勇敢に戦ったこの男が、女性一人の扱いに狼狽え続けていたのは何とも滑稽な話だろう。

しかしそういう残念な性格も含めて彼を愛したのもまた、ブルマという女性だった。

「そんなところが大好きよ。ヤムチャ」

「……ありがとう。俺もお前のことが、とつくに好きだったよ」

そんな彼女の想いを受け止めながら、ヤムチャはヘタレながらも熱く、抱擁を交わした。

二人の幸せな結婚式会場を後にする、青年の人影があった。

彼は新郎と新婦が穏やかに微笑み合う姿を一瞥した後、踵を返してその場から一瞬にして立ち去る。

——瞬間移動。

そしてその技によって彼が移動した場所は、地球圏から離れた宙域に漂う一隻の宇宙船の中だった。

「どうでしたか？ 彼らの結婚式は」

にわかに活気づいている宇宙船のブリッジでは、コンソールパネルを叩く手を止めて振り向いてきた薄紫色の髪の青年——ヤムチャリヴアイヴが最初に問い掛けてきた。

青年は肩を竦め、「綺麗だったよ」とあえて彼が求めている感想とは別の言葉を返す。

そんな彼の言葉に、緑髪の女性が操縦席の背もたれに寄りかかると

「んー……」と声を漏らし、チャーミングな背伸びをしながら問い掛けた。

「でもヤムチャとブルマがくつついちゃったらさ、トランクスどうなるの？」

ヤムチャヒリング——かつての戦いを共に生き延びた彼女の質問に、彼が涼しげな顔で応え、ヤムチャリヴァイヴが付け加える。

「もちろん、この世界では生まれないだろうね。なに、それでボクらに不都合が生じるわけでもないさ」

「強いて言えば、パラレルワールドが勝手に増やされたことでどこかのザマスが正義感を拗らせるぐらいだろう」

「あつ、そうなたらこの世界もいつか襲われるのかしら？ こっわいこわいー」

「心配ないさ、この世界には既に超サイヤ人ブルーとなった孫悟空がいるし、彼もいる」

彼らがこの世界に遺していった爪痕は、未だ完全には消えていない。

と言うよりも、新たなる不穏な火種を撒き散らしてきえた。

遠くの宇宙や別の次元には、あらゆる脅威が存在していることを彼らは知っている。

やがて訪れるであろう壮大な戦いの将来を想像し、げんなりとした顔を浮かべるヤムチャヒリングに向かって彼は告げる。

「いざとなれば、ボクが出る。君は安心するといいき」

「リボンズ……」

やだ、カッコいい……そう感動した目つきでヤムチャヒリングに見つめられ、彼——リボンズヤムチャは嘆息する。

そんな光景が最近では日常的に見られるようになった宇宙船の中で、ヤムチャリヴァイヴがやれやれと呆れながら操縦桿を握った。

「では、出発しようリヴァイヴ。ボクらの旅路の幕開けだ」

「了解」

ヤムベイドとして生きていたヤムチャリヴァイヴ、ヤムチャヒリング。そして、リボンズヤムチャは生きていた。

生きてまた、何やらまた策謀を巡らせていた。

しかしそこにはかつてほどの悪意は見えなかったし、外面から見る限りはどこにでもある家族の団欒のような光景であった。

そんな二人——かつてヤムチャ風情に敗れた自分を救出してくれた二人を伴って、リボンズヤムチャは宇宙船のモニターから北の銀河にある地球の方角を眺めて呟く。

——孫悟空……そして、ヤムチャ。この世界の未来は、しばらく君たちに預けておくよ。

しかし、覚えておくといい。

ボクはリボンズヤムチャ、この世界の救世主だ。

いつかまた力を付けて、必ず君たちを凌駕してみせる。

敗者の礼だ。しばらくは地球に手を出さないと約束しよう。

だから今は、この言葉を君たちに捧げることにする。

「アデュー」

リボンズヤムチャの未来もまた、新たな明日へと進み始めていた。

——彼らはヤムチャ、ドラゴンワールドに住まう者。

——たとえ世界の敵になっても、彼らは彼らの信念を守り続ける。

——だからこそ、彼らは存在し続けなくてはならない。

——未来の為に。

三次元の存在としてではなく、このドラゴンワールドの一部となった混沌の「ヤムチャ」たち。

そんな彼らに乗せた宇宙船は銀河を抜けて、壮大なる旅路へと旅

立っていった。

【転生したらヤムチャがりボンズになった件】

— T_ャ H E_ム E N_チ D_ャ —